せり加之棍棒瓦石を以て人を迫り實に強暴殘酷至らざる所なかりき堅日のセント、アイヴスの集會は賤民等が鷄卵瓦石を投せし爲め全く解散せしが彼等は既に窓戸、長椅、燭臺等を毀ち今又室の四壁を引倒さんと言へり

ウエスレー親しく各會友を訪ふ

又フールに於てゐ七月二十六日チャールス、ウエスレーの說敎中一人の敎會吏大聲を發し其說敎を止めんが爲め已が帽を以てウエスレーが口を蓋ひたりと云ふ、是等の暴舉は主として敎會信徒の煽動に成りし者にして彼等は常にメソヂスト敎徒を目して法王の間者なりとし且つホブリン氏の「議論に由らず腕力を以て彼等を追放すべし」との暴言を口にせり、遂にセント、アイヴスの市長は新たに二十人の警官を增し以て暴徒の鎭壓に備へ、且つ明かにホブリン氏に告るに惡事に贊同し妄りに之を敎唆す可からざるを以てせり

ウエスレー兄弟は當時其時日とロンドン、ブリストル及び他の諸會に發去ブリストルに於てはウエスレー此年の一月に於て信者各個人に就て親しく相語り而して彼等が主イエス、キリストを識るとの使事からざるを見て大に喜べり氏はキングスウードに於ても同樣の働をなし而して左の如く云へり「傳道者若し（イグヂシアスが勸めたる如く）僕婢に至る迄凡て其群中に在る者の名を知るに非れば如何にして喜びを以て其務を終結するを望まんや、ロンドンにて二月二日よりウエスレー兄弟共に午前六時より午後六時に至る迄各會友を訪ふことを始めしが彼等日々斯の如くして遂に全會友に及ぼせり、而してニューキャスソルに於ても亦之と同樣の事を爲せり

ロンドン會の增進

ロンドンの會は當時一千九百五十八の會友を有せしが此年の終りには二千二百の會友を有する廣大なる會となれり是れ全く過ぐる四年間に斯くなりたる者として當時大に牧者の注意看護を要せり、小兒僕婢等を除き單に會友のみにても當時のファウンドリ講義所には其半ばをも容るゝに足らざりしを以て講義所新築の必要目下に迫り若し速かに之を爲さゞれば只に事業を擴張するを得ざるのみならず當時の事業をも尙能く之を維持するを得ざるの狀況なりき故に此時迄ロンドンには只一の講義所あるの

ロンドンに於ける新講義所

貧者病者の訪問

扶助

みなりしも終に他ふ二個の講義所を見るゝ至れり○ウエスレーのロンドン會の爲に成さたる事業ハ單に此ゝ止まらず進んで他の慈善事業ゝ及せり、氏は病者を訪ふとを以て基督信徒の爲さゝる可らざる義務ゝして且つ病者の爲に必要の扶助を與ふるのみゝて未だ不充分なりとし且つ此訪問を怠るものは曾ゝ其義務を怠るのみならず自ら恩惠を受くるの道を失ふ者となせり、ウエスレー曰く「富者が貧者困難者を憐むの情ゝ乏しき一大理由ハ彼等が自ら斯る人々を訪ふの極めて稀ゝるとなり誰にても消へざる火より免かれ而して永遠限なきの天國を嗣がんとを望む者は皆其力に從ひ等しく此切要なる義務を盡さゝる可からず」とウエスレーハ既に斯る意見を保持し而して身自ら力を盡して貧者困厄者を訪へり然れども氏は素より巡回傳道者なるを以て其訪問看護ハ斯る人々の全體に及ぶと能はず故に一千七百四十三年ゝ氏ハロンドンゝ於て病者の訪問者を立て之を以て其役員の一に列せり、又會計吏は會友より出したる金と受け取り(其集金毎週殆んど八パウンドに上れり)而して之を修繕、家賃、負債償還、雜費及び貧人救助等の諸事ゝ使用せり會計吏(七人)は可成的儉約なるべかりしも救助を求むる者に施與するに當ては苟も不快なる言貌を表はし又は人より謝辭を望む可らざりしゝり彼等ハ毎木曜日午前六時に會合し火曜日の夜迄に集まりたる金を支出し斯くして毎週該金出納の決算をなせり然るに程ゝく彼等ハ厄難者に對する一の困難を發見せり即ち未だ會計吏が此等厄難者に就て聞知せざるに既に或は危急に迫まるゝあり又假令其實況を知るも會計吏ハ多く商業に從事する人なれば意の如く屢々彼等を訪ふとを得ず此困難を治せんが爲めにウエスレーは一日ロンドンの全會友を集め府下の各部に散在する病者を訪ふは會計吏ゝ於て實に爲し難き事なるを陳べ由て各組長は病者の事情を尋問し且つ速かゝ之を報ずるとに於て一層の注意を加へんとを請ひ而さてゝ全會衆ゝ向ひ此切要なる役務を執るの志願者を求めたり是に於て許多の人々喜び勇んで之に應じたればウエスレーは其中最も柔和にして最も愛心ありと自認したる者四十六人を撰びロンドンを二十三區に別ち主任の訪問者をして毎週三回其區の病者を訪

訪問者の守るべき規則

いしめたり、彼等は只に病者心靈上の事を問ふのみならず若し肉体上の缺乏あるを發見せば之れを助け又之を毎週會計吏に報ず可き者なりしなり

ウエスレーの辨妄

ウエスレー記して曰く「予は熟らく〳〵之を考察して此事に於ても我儕い全く初代教會の慣例に從ふ者なることを發見せり夫の初代の執事い何をなせしや又女執事フィベの職務い如何只病者に訪問者ありしのみ」と、而して是等の役者は皆左の四則を守るべき者とす　第一、心靈上の狀況を問ふに明瞭淡泊なるべし　第二、柔和温厚忍耐なるべき　第三、病者の爲に汝ぞ爲す事い凡て清潔あるべき　第四、身を裝飾すべからず　五年の后ウエスレー左の如く云へり「我儕は此事業を絶へず惠み給ひし神を讃美せざる可らず此方法に由り許多れ人命は助かり許多の病は癒へ多の苦痛窮乏い除去せられ多の憂鬱痛嘆者い大に慰籍を蒙り而して訪問者は神より現在其勞働の報酬を得たり」

ウエスレーはメッヂスト教理の駁論に答へ殊に氏及び同役者い詐僞を行ふとい羅馬教徒に類し專ら已が金囊を肥さんが爲に説教し以て教會を傾倒する者なりとの誣罔を辨ぜり、人或い報じて曰くウエスレーはブリストル、キングスウード、ニューキャスソル及び其他の所に於て受くるの外フプウンドリのみにて一年に受くる所の金額一千三百パウンドに上れりとウエスレーい之に答ふるにメソデスト信徒より出したる金は一切氏ぞ手を經ず之を受取るも又之を慈惠の爲め或い講義所を購求建築修繕の爲に支出するも皆會計吏所轄の下に置き氏にい毫も餘裕なかりしのみならずロンドン、ブリストル及びニューキャスソルの諸會場の爲に六百五十パウンドの負債あるの事實を以てせり、實に氏は自ら其身の安靜、許多の友倍、名譽、及び已が天性と教育とに適合する生活の道を捨て且つ六七百パウンドの負債を償還せんが爲に凡て其時と力とを費やさて自家の健康を害する事を知りつゝ日夜勞働し而して終に身の衰弱、疾病等を招くに至れり

財に關するウエスレーの心事

ウエスレー同役者に問ふて曰く

「足下は如何なる報酬の爲に一年中毎週十八九回の説教をなすや予い足下が二三箇月毎に天氣の如何に關せず七八百英里を巡回する爲に何を足

下ふ予ふるや如何なる俸給の爲よ足下は、善をなし神を頌讃をるの外、凡て他の娯樂を棄つるや、然れども若し足下が數千の金銀を積むに勝りて斯る生活を撰ばざりせば予ハ足下を誤認せし者なり

予は今是等の事に就き予ご意見を足下に告げん之を聽くと鵠かざると ハ足下にあり　食物と衣服は予之を有す而して其食物は予が撰ぶまゝ衣服も亦然り予には枕する所あり又予が敬虔なる生活に必要なるもの一としてあらざるとなし而して世が予に與ふる所のものは之よ過ぎず王者と雖ども此外よは一物も予に與へ得る者なし、金銀の如きは予之を視ること泥土の如し、予は之を希はず又之を求めず却て或は此物予に附着するとあり て予が靈の神に歸る前ふ全く之を脱却する能ハざるをを恐るゝのみ、予は神の祐助に依り主より召さるゝの日に於て人誰も予が幕屋の中に些少の呪ハるべき者あるを發見せざらんとを勉むるなり、予若し負債書籍等の外十パウンドの金を遺さば予等と全人類は予が盗賊として生き盗賊として死したるを証すべし」と

ウエスレー自首を服む

ウエスレーご固く此言を守りしことは氏ご左の語を以て之を証するを得べし氏其出納簿の終に書して曰く(震動ゑたる筆跡辛ふじて讀むことを得)「予ハ精確よ予が會計を書記して爰ふ八十六年餘に及べり爾後復之を記せざるべし蓋し予は之よより予が勉めて儉し勉めて散ずるの確認を得たり」と(氏ハ是を書して後一年を出でずして世を逝れり)

一千七百四十四年　四十一歳

此年に於けるウエスレー

ウエスレー此年の過半をロンドン及び其近隣よ費やし而してブリストルに往きしと凡そ五六回にして三箇月の間ハブリストルよりヨルクシールル及びニユーキヤスツルを經てロンドンよ到るの旅行よ費やせり

記憶すべき二事件——第一の年會および大學に於けるウエスレーが最後の説教

此年よ記憶すべき二事件起れり即ち第一のメソヂスト年會及びウエスレーが大學に於ける最後の説教にして右年會は六月二十五日(月曜日)ロンドンのファウンドリよ開き同三十日よ終れり會員ハウエスレー兄弟と四人の教師(ジョン、ホッヂス、ヘンリー、ピールス、サムエル、テーロル、ジョンメリトン)及び四人の接手禮なき傳道者(トーマス、リヂヤルド、トーマス、マクスフ

第一のメソヂスト年會(ロンドン)

議したる條項

教理に關する議定

ヒールド、ジョン、ペンヂット、ジョン、ダウンス)なりき、會議の前日ハ我儕が祀聽すべき日よりして通常の説教の外愛餐を守り六人の按手禮を受けたる教師之に列あり且つ此日ロンドンの全會友よ聖餐を施せり當時其會友は二千人より三千人の間ゐして五人の教師聖餐式を輔佐したり、翌日ゐ至り嚴肅なる祈禱を以て會を開きチャールス、ウエスレーの説教后一人の大人(彼は此時此所に於て神と全く和ぐことを得たる者ゐり)よ洗禮を施せり○此日討議したる條項は第一、教ゆべき事物、第二、教ゆべき方法、第三、教理條例及び實行(プラックティス レギュレート)を管理(コンデイション)そべき方法、の三点なりき○右第一の議決ハ義とさるゝとは罪の赦を受け神に受け容れらるゝの謂ひなると、信仰(悔改の後に起る)ハ義とさるゝ事の要件なると、悔改とは罪の確認なると、信仰(普通の意味にて)とハ見ざる事物よ於ける天出超理的の承認あると、義とさるゝの信仰とはキリスト我を愛し我ゞ爲に已を與へりとの確認(聖靈に由て)なると、義とされたる者は必然之と自覺する者なると、義とさるゝ信仰の即時の結果ハ平和、喜悅、愛、及び内外の罪よ勝つの力なると、故意の罪と義とさるゝ信仰とは決して両立そる能ハざると、

信者は誰も再び刑罰の下よ來るを要せざると、信仰は行を缺ぐよ由て失ふの外之を失ふと能はざる者にして行ハ信仰を保續する爲よ必要なると、パウロはアブラハムは行に由て義とせられずと云ひヤコブハ彼は行に由て義とせられたりと云ひしも彼等は同一の義又行を指せしに非ずパウロは信仰に先だつ行を指しヤコブ信仰より出づる行を指せし者にして両者決して相反對したるに非ざると、等なりき、此議會は更に左の諸点に於て一致せり即ちアダムの罪は全人類ゐ及び其罪の爲に(一)我儕の肉体は死すべき者となり、(二)我儕の靈魂は神と離れて罪惡なる性質を取り、而して(三)我儕ハ永遠の死を招くべき者となりたると、及び聖書は決してキリストの義を以て我儕よ歸(インピュート)するとを明言せず寧ろ信仰を義とさるゝとを明示すると、又キリストの功德により凡ての人ハアダム自犯の罪科(ギルト)より赦され而して其肉体は復活の後不滅の体となり其靈魂ハ靈界生活に適合する資格を受ると、及び凡ての信者は神と一和し而して神の性質を共受する者なると等の意見よ一致せり、又聖(サンクティフィケーション)となるとの意義は義と眞正の聖(ツルー、ホーリネス)とに於て能く神の像

傳道者の義務に關する議定

メソヂスト傳道者を起し給ひし神意―聖經的聖德を擴布せしめんが爲め會を組織すべきこと

ゑ似て新たになることにして完全なる信者とは全く心中の罪根を刈除され而して心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して主なる我僧の神を愛する者而して信仰は期る恩惠を受くるの要件(コンディション)又器械なりと解釋せり○議會は尙進んで傳道者は說敎と實行とを以て英國敎會の敎理を保護すべきと及び凡ての事ゑ於て監督ゑ從ひ又良心の許を限りゑ其敎條(キヤノンス)を守るべきと且彼等は力を盡して別ゑ一派をなして英國敎會より分離するが如きを防ぐべきと然れども彼等は其死後に期る事(分離)の起らんことを恐きて現在八々の靈魂を救ふべきの好機會を失ふが如きとは決してなすべからざることを約せり)等を議定せり○彼等は世ゑメソヂストと稱する傳道者を起し給ひし神の聖意い國民を改革し殊ゑ敎會を改革するに在て之ゑ依り聖經(スクリプチユ)的聖德(ホーリネス)を國中ゑ擴布せしめんが爲なりと信認せり、彼等い又何處にても其說敎したる所には會を組織すべきことを議決せり是蓋し會なきときは傳道者は認罪者等ゑ適當の敎訓をなすの便を得ず且つ信じたる者愛を以て互ゑ相助け患難相救ひ而して互の信仰と聖德とを養成するを得ざればあり

此年會の及ぼせし功力

大學ゑ於けるウエスレーが最後の說敎

斯く此十人の人々い毫も新敎會の組織に就て討議するとなく只基督敎の最大緊要なる眞理及び傳道者の義務等を考究熟議して六日ゑ亘れりウエスレー曰く「彼等は已が靈魂と已れゑ聽く者の魂靈を救ふの外何をも願はざりき」と、是等の單純なる敎理は當時一般に行はれたる神學上の敎理にあらざりしと雖ども尙聖經中に發見する處のものにして又凡て罪ある者の要する敎理なりしなり、彼等は此議會の將來社會ゑ於て最も緊要なる年會の基を開き宗敎の德澤を地の全面ゑ傳播するの中心、又內外に於て之と同種類れ議會を起その摸範となるべきことに就ては恐くは毫も豫想せざりしなるべし、以上議定せられたる敎理は今尙メソヂスト敎會の主要なる敎理ゑしてメソヂスト敎會條例の諸原案は我僧之を此第一メソヂスト年會の記錄中ゑ發見するを得べし

是よりオックスフオルド大學に於けるウエスレー最後の說敎の記事ゑ移らん　此說敎の日は八月廿四日(金曜日)セント、バルソロミユーの例祭日にしてオックスフオルドゑ於ては競馬の催しあるの時、なりしが此日は

ウエスレーが説教の當番として若し自ら往かざれば代理者の爲め三ギニヤ（一ギニヤは大約我五圓餘に當る）を出さざる可らざりしなり、我儕は此時の狀況に就きチャールス、ウエスレーより左の數事を學び知るを得即ち氏とピールス及びメリトンの三人が其説教に臨み居たりしと、此日の聽衆甚だ多く殊に此地に催さるたる競馬の爲め夥多の人を增加せしと、聽衆皆非常に注意して、ウエスレーの説教に耳を傾けしと、諸大學の教頭等は終始目を説教者の上に注ぎたると、及び説教の後單に四人のメソヂスト教師徐ろに共所を退き敢て一人の彼等に從ひ行く者なかりしと等なり

ウエスレー記して曰く

「予はセント、メーリーの會堂に於て説教せしが是れ恐くは予が彼處に於ける最後の説教ならん、予は今是等の人々の血に於て與かる所なし、予は全く予が魂靈を救へり、説教後一使大學より來り副事務長より予が草稿を求むるの旨を通ず予は直に之を與へ而して神の攝理の奇なるに驚けり若し予より進で草稿を如此有名なる人に與へしあらば之を讀むの勞を取る者は甚だ少なかるべきに今此の如く彼より之を求めされば予が説教は必ずや大學中にて名ある人々の手にわたり彼等は之を反覆熟讀するとなるべし

予は此説教を爲せし日の偶々前世紀に於て殆んど二千の燔祭赫々たる光（佛國の新教徒を指す）が一擊の下に盡されし日に該當するを喜ぶ、彼等と予との差異は實に大なる者にして彼等は家宅財産を失ひしも予は只説教を支へられし外一物を損せず即ち會員等は予が説教の當番に至れば自ら金を出し代理者を備へ斯の如くして予が會を退くの時に及べり」と

ウエスレーが此説教は三段に分れ基督教を三面より論究せり　(一)其各個人に入り來ると　(二)一人より他人に廣がると　(三)地の全面を覆ふと然るに聽衆は不滿を與へたるは是等諸点の理論的談話に非ずして之が實際的の應用にてありしなり

ウエスレーが許多の迫害に遭遇せしは多少其新奇なる教理法則の爲めなりしと雖ども其主要なる原因は氏が誠實なりしことなり、氏とメソヂ

ウエスレーが迫害に遭ひし主なる原因―誠實

迫害中のメソヂスト教徒

ウエスレーの北部旅行

スト教徒は既に充分の迫害を忍受せしも人民の激怒は尙ほ未だ止まず夫のスタッフオルドシール其他各所の迫害い既に述べし所なるがウエスレーい「コルンウオール」に於て人民のメソヂスト教徒に對する勇氣は遙かに西班牙人に向ふの勇氣に超へたり」と云ひ、ヘンリー、ミラルドは「セント、アイヴスに於て神の語は大に傳播し、且つ崇められるゝと雖ども之と同時に惡魔の怒い實に恐るべき高度に達せり」と述べたり、然るに斯くコルンウオールニ於ける迫害の激烈なりしよも係いらず僅かに三四名の教より離るゝ者ありし外信者は一般に信仰を動かさゞるのみならず敵の逆待により却て之を固ふしさるい實に喜ぶべき事にてありしなり

一千七百四十四年に於けるウエスレーが最も長き旅行はロンドンよりコルンウオールに到り夫よりニユーキヤスツルを經てロンドンに歸りたるものにして此間殆んど三ヶ月を費やし數百英里を旅せり而して此旅行は馬車又は驛車等の便を得しに非ず只乘馬にて困難なる道路を經行し或時い數時間雨雪に撃たれ或時は人馬を埋沒する程の大雪に逢へり氏い此間に凡そ一百の說教をなせしが其中若干回はウエンナップ及びセント、スデシアンに於て數千に聽衆に向て之をなし若干回い公館に於てし又或時い青草の上に於てせり而して其會堂に於てせしものい甚だ少なしウエスレーは旅行中種々の事變に遭遇せしが夫のエプウオルスなる氏の父が牧せし會堂に於ては最も虛妄にして殘暴なる二回の說教をロムレーの口より開けり氏ぞ進んでサイキ、ヘウスに到りし時或教友は來りて醉漢等氏が到着を待て其會衆に妨害を加へんとを謀ると告ぐ而して或者は其醉漢等い殆んど會場に放火せんとし或は之を引倒さんとすと報せり然るにウエスレーい徐かに答て「我儕が爲すべき事は其會場の未だ立ち居る中に最も有益に之を用ふるとなり」と云ひ直に會場に入て馬太傳第十章を講明せり、ドルハムに於てい ジョン、テルソン及びトーマス、ベールドに逢ひ之を已が旅宿に誘ひ語て曰く「テルソン氏よ時を失ふ勿れ毫も時を失はずして語れ蓋神は其境遇の何たるを問はず子に爲すべき事を與へ給ふなり而して子其聖旨を成し畢らば神は子が軛を解き給ふべし而して我儕共に

チンレーの寡婦

樂しむことを得んと、ドルビシールのチンレーにガッドハールドと名くる一人の寡婦此婦人に四人の小兒を持てり、ありしがウエスレー此婦人の願よりチンレーを其休憩所となし而して其所よて說敎を始めたり然るに氏は此寡婦の家の餘り狹小なるを見自ら水車場の近傍に到り椅子の上に立て說敎せしが水車場の主人之を見て大に怒りウエスレーの聲を奪はんと欲して水堰を開て水を決出せり然れども斯る謀計は失敗し眞理は愈々勝を占めて遂よ此地はメソヂスト傳道地となれり、而して夫の寡婦と其小兒等は傳道者が一杯の茶を求むるに當り容易く之を供ふるを得んが爲よ金曜日の夜に全く之を糸卷きの手工よ費し而して其所得は悉く之を聖別して古き一小器よ入れウエスレーの傳道者が福音傳播の爲よ來りし時其需用よ供するの外決して之よ手を觸るゝことを爲ざりき○當時按手禮を受けざるウエスレーの傳道者大に其數を增し國中各所に在て働ける者四十人に下らざりき

按手禮を受けざる傳道者の數

諸會の情況

今次年よ移るに當り此に二三の記すべき事あり當時ニューキャスツルプリストル會よ於ては信徒の情況十全ならず口には信仰を唱ふる者許多ありと雖も其信仰の結果として聖德善行を見ると甚だ少おかりき、又ロンドン會は元來貧しき會ふりしも寛大よして慈善の精神に富み二月よ於ては貧者救助の爲め一回の集金殆んど五十パウンドに上りウエスレーは之を以て直よ衣服を購ひ之を其身勤勉なるも尙飲乏を感ずる者に配與せり、次月よ至り再び凡そ三十パウンドの集金をなすを得尙次月よ至り凡そ二十六パウンドの集金をなすを得たり而して是等三回の集金の外更に記名義捐金（サブスクリプション）九十パウンドを得たり斯く此貧しきロンドンメソヂスト信徒より喜捨せし總金額に一百九十六パウンドよして彼等は之を以て三百六十八人の貧者に衣服を供給せり

此年に於けるホヰフトフヒールド、チャールス及ジョン、ウエスレー

一千七百四十五年　四十二歳

ホヰイトフヒールドに此一年を全く亞米利加に費やしチャールス、ウエスレーは凡そ三十八週をロンドンに、凡そ十四週をブリストル、ウエールス

及び英國西方の各所に費やし、ウエスレーは殆んど五ヶ月をロンドンと其近傍の諸邑に、凡そ一ヶ月をブリストルと其近隣に、二ヶ月をコルンウォールに到るの旅行に、四ヶ月を二回のニューキャスソル及び英國北部の旅行に費せり

追害減少の理由——チャールズ、エドワルドの侵入

追害

當時追害の多少減少するに至りしゞ是れ人々の間にメソヂスト派を惡む事の減せしが爲に非ずして夫の羅馬教徒なるチャールス、エドワルド、スチユアルトの侵入の危險目下に迫りしを以てなり、今此年に於ける追害の數例を擧ぐればコルンウオールに於ては、トーマス、マクスフヒールドの兵卒に捕へられてペンザンスの獄舍に繫がるゝに至り、セント、ジヨストの柔皮匠エドワルド、グリーンフヒールドの妻子八人と共に、ドクトルボレースの記名したる逮捕狀に由て捕へられたりウエスレーの此平和にして柔順なる人何の罪を犯せしやを問ひしに答へて「此者の他の事に於ては咎む可き處なしと雖も只其厚顏無耻の言語の人之を聞くに堪へざるなり、彼は何故に自ら己が罪の赦されたるを知ると云ふか」と云へり、此コルンウオールの追害の主としてボレース及びユースステックの如き人々の激成せる者にしてユースステックの如きはウエスレーを捕ふるの逮捕狀を携へて氏が許に來りしも之を捕ふるの勇氣なく只罵詈讒謗して其處を出で去れりウエスレーがウエンナップに於て說教せし際二人の者狂せるゞ如く馬を衆中に乘り入れ人々を殘害せしゞ此混亂の中に在てウエスレーと其同友等の徐かに唱歌を始めたり然るにビー某氏は之を見て憤懣に堪へず從者を呼んで「彼を捕へよ彼を捕へよ我之を言ふに非ずや皇帝陛下の爲に夫の說教者を捕へよ」と叫べり然るに其從者等敢て之に應せざりしかば痛く之を叱し自ら馬より飛下りてウエスレーゞ長衣を執へ而して「我陛下の爲に汝を捕ふ」と叫べり斯てウエスレーを捕へ往くと凡そ十丁餘にして其勇氣全く沮喪し復偕に行く能はず遂にウエスレーを離れて何處ともなく去り行けり、一千七百四十五年五月十六日發兌の「ロンドンイヴニング、ポスト」は左の事實を記載せり、メソヂスト教徒はエキセトルギルドホールの後部に一の會場を有せしが五月六日暴民等は會場の戶外に群集し會場に入る者

にい馬鈴薯、泥土、及び人糞等を乱投し、出で來る者い悉く之を歐打して一人をも殘さず其中多くは足下に踏付けられ或い帽子なくして或は上衣を捨てゝ各々四方に逃れ去りしが過半の人々い其上衣を切れ〳〵ゝ裂れたり又婦人の中或者い跛となり或者は衣服を剝ぎ取られ而して殘酷にも泥渠中ゝ轉ばされ其面には烟煤麵粉及び泥土等を塗られたり、此無殘なる暴民は數千の怯懦卑劣なる賤奴の集合体にして夜半に至る迄斯る暴行を働けり○爰ゝ陳べたる新聞雜誌上の迫害い尚未だ停まざりしと雖も然れども多少酷烈の度を減せり是れ夫のチャールス、エドワルドの侵入ゝ職山する者にして當時新聞雜誌の駁論い漸く其筆鋒をウエスレーと其敎徒より轉じて新侵入者ゝ向へり

新聞雜誌少く筆鋒を轉ず

北部旅行

既に記載せしが如くウエスレーい此年に於て二回の旅行をニューキャスソルと英國北部の地方ゝなせしが其第一の旅行は二月十八日に始まり五月十一日ゝ終れり此旅行ゝはリチャルド、モス同行せしが巡回中甚だしき困難ゝ遭遇せしと實ゝ少々ゝあらず當時雪深くして行路非常の困難を極め殊に或所の如きい融雪の後霜之を固結して恰も玻璃上を歩むが如し馬を下りて之を導くゝ馬亦轉倒を免れず彼等ゲイッヘッド、フエルゝ到れば滿目皚々として道路ゝ如何にしてニューキャスソルに達すべきやを知らざりしも幸ゝ一人の忠實なる嚮導者を得て僅ゝ彼所ゝ達するを得ゝり、ウエスレー此時の旅行を叙去て曰く「予は先ゝ多の困難なる旅行をなせり然れども斯の如き旅行は予が未だ嘗て經驗せざる所なり風雨雹雪及び肩を刺すの寒風は常に我儕を圍繞せり、然れども是既に過ぎ去りしとにして復斯る日に逢ふと非るべし故に是等過去の困難の日い恰も無かりしが如きなり」と、此困難なる二百八十英里の旅行い乘馬六日にして終へしを以て一日平均殆んど五十英里を旅せしとを知るべし

ウエスレー一友ゝ已等が當時の位置ゝ告ぐ

三月十一日ウエスレーは一封の書翰を友人に送りてメソヂスト諸會の起りを陳べ且つ簡單に已と同役者等の當時の位地を示せり、即ち彼等は敎會れ敎師等と已等との不和を醫する爲ゝい眞心の許を限りは何事をも喜んで之を容認すべきも內部現在の救い單ゝ信仰に由てのみ得らるべき者

なりとの教理を教ふることは得て止むと能はず又私宅或ハ屋外に於て說教することを止むべしとの誓約をも爲すと能はざりしなり何となれば當時の狀況にて私宅或ハ屋外に於て說教そることを止むべしと約するは恰も全く說教することを止むべしと云ふに均しきを以てなり彼等ハ又其設立したる會を解散することを止むべしと云ふに均しきを以てなり彼等ハ又其設立したる會て許多の靈魂の亡ぶるのみならず會友の數甚だ夥多にまて各個人ゐ就て一々之を教誨するハ到底爲し能はざる所なりしを以てなり、彼等は又犯則者ゐ善良なる者と共に在ることを許す能はざりき之れ惡き交りハ善き行を害へばなり、又組長を廢するをも其能ハざる所なりき蓋組長ゑ由て犯則者を發見するを得ればなり、彼等は教會の監督と凡ての教師等に對そるに充分ある尊敬と溫柔とを以てそべきも若し監督教師等にして彼等を以て僞りの教理を教ふる者となし又は之に就て其良心ゑ寸毫の疑惑を懷くことあらば彼等は敢て教會の講壇に上らしめられんことを願はず、然れども夫と同時ゑ彼等の教理を以て異理なりとし之に就て毫も疑ある教師等は公私ゑ拘ハらず彼等を招き其會堂に於て說教せしめんことを希望せり、誰にても彼等を以て異端者又は教會分離者ゐりとし口或は筆を以て之を攻擊するは已ゐ義務なりと思考する者は自由に之を爲すを得べく彼等に於て毫も異議なしと雖ども彼等は其人之を爲す前ゑ靜かに事の兩面を熟考し能く之を聞き質すことなくして猥りに彼等を罪せざらんことを希望せり、彼等若し羅馬教會の教理を教ふることゑ於て、擾亂を惹起そることに於て、又ハ不道德の行ゐることゑ於て、責めらるべき所ゐらば毫も容赦を求めずと雖ども、夫と同時に其己等に係はる種々の巷說流言等ハ若し確乎たる証據あるゑゐらざれば一切之を信據せられざらんことを望めり、彼等は教會或ハ政府の有司の贊成又は推薦ハ敢て之を求めず只左の數ヶ條の要求をなせり　第一、若し事實を以て彼等を訴ふる者ゐるときハ彼等自ら其答辨をなすを許されん事　第二、教會の教師及び政府の有司等は其管下の者ゐ賤民を使嗾して彼等を妨害することを禁せん事　第三、教會及び政府の有司等ハ凡て政治の根基を害する者なる亂民暴舉を充分ゐ制止し之を禁遏せん事　斯の如き者之

説教及び旅行

羅馬教會の一僧とウエスレー

を一千七百四十五年に於けるウエスレー等の位地よりてありしなり

一週の後(月曜日)ウエスレー午前四時三十分より説教を始めしが來集する者甚だ多く其中には許多の富貴ある紳士を見たり夫より氏はロンドンよ向て出發し第八時ゐチエストル街に於て屋外説教をなせしが聽衆甚だ多く殊に靜肅にして傾聽せり、氏は此地を去り日暮に至りノルスアレルトンよ着し旅宿に於て復説教せしが此時羅馬教會の僧アダムス及び同鄕人エリザベス、テルマン(クエーカル宗の一婦人)其他數多の者も共よ其聽衆中に在り説教の後夫の僧はウエスレーがオスモザレイなる已が家に來りて説教せんとを請ひしがウエスレーは直ゐ之を諾し馬に乘りて丘陵を越へ七英里を旅して該邑に達したる時は殆んど夜の十時なりき、氏い此日馬上六十英里以上の粗惡ある道路を旅し而して既に三回の説教をなし而して此邑ゐ着したる時は邑人多くい既よ寢ゐ就き居たりしも右の僧及び其友は邑中を奔走して人々を呼び起し凡そ一時間よして許多の人々を其講堂(元とフランシスカン宗徒よ屬せしもの)に召集するを得たればウエスレーは其來集者ゐ教を宣べ夜半を過ぎて寢に就きしが尙ゐ毫も疲勞を感せざりしと云へり、翌朝五時再び羅馬教會の講堂ゐ於て羅馬書三章二十二節を題として只信仰に由てのみ義とさるゝの教理即ち大よ羅馬教會の教理に反對そるものを述へたり聽衆中よは氏が此朝の説教を聞き得ざらんとを恐れ終夜寢ねずして説教の時刻を待てる者も許多ありしと云ふ聽衆の多分は前きに羅馬教徒なりしか又は當時尙該教を信ずる者なりき、前に陳べしクエーカル宗の一婦人も亦此處にありしが突然ウエスレーに向て「足下は水のバプテスマを以てキリストの命なりと思考さるゝや」と問ひしかばウエスレー直に之に答て「ペテロは何と云ひしや彼は「我儕の如く既よ聖靈を受けたる此人々に孰か水を禁じてバプテスマを受けざらしむる者あらん乎」と云ひしよおらずや」と云へり氏は記して曰く「予更に語を繼がんとせしよ夫の婦人呼んで「然り然り我バプテスマを受くべし」と云ひ其時直に領洗せり」と斯の如くしてメソヂスト教派はウエスレーが夜半の説教を以てオスモザレイに其萌芽を發出せり、ウエスレーエブウオルスゐ到りて説教

せしに邑中の壯年來聽する者甚多し氏又父の會堂より往きて夫のロムレーが終始讒謗を極めたる說敎を聽けり○氏は五月十一日(土曜日)よりロンドンに歸着せしが氏が此地を去りしより今凡そ十二週間を經たり、ロンドンに留まること一ケ月よりしてコルンウォールより旅し凡そ五週間の滯在の后八月十六日再びロンドンに歸れり氏がコルンウォールにて遭遇せし迫害は既に陳べし所なるが爰ゐ尙一の記さべき事は氏が此旅行中ゐ四箇以上の會堂に於て說敎せし事なり其之をおすを得しは或は自ら請ふて許されたるに由り或は敬愛すべき傳道者等の請に由りてなりしが斯る事は他所ゐては容易にあり得べからざるとおりしなり

チャールス、エドワルド、スチユアルトの侵入

當時英國は大騷擾の最中にして僅か數週前に當りチャールス、エドワルド、スチユアルトは凡そ五十の蘇格蘭人及び愛爾蘭人を率ひブリタニーより乘船して蘇國に上陸しタンデム、トライアンフアンス(每戰每勝)ゐる語を縫ひたる旗を共國ゐ建て九月四日ボルスの邑に於て其父の王たることを宣言し而して二週日にしてエデンボローゐ入り尙數日の後プレストン、パンスに於て王の兵と戰ふて之を破れり是に於て自ら英、蘇、佛、愛、諸國の代治者ありと僭稱し勢ゐ乘じてカルリスル、ランキヤスソルマンチエストル及びデルビーに進さしが遂に蘇國ゐ追ひ返へされ而して一千七百四十六年四月十六日コローデンの一戰全く彼ゐ運命を定めたり○ウエスレーは此騷擾中ニユーキヤスソルに在りて依然傳道ゐ鞅掌し又屢々其周邊の諸會をも巡視して大に布敎に盡力せり、暫くにしてフヒールドマルシヤル、ウエード及びナスソー公モーリス凡そ九千のし、英、両國の兵を率ひて來着し之ゐ將軍セント、ジョールジの騎兵、將軍シンクレールの蘇兵及び他の諸隊を合して凡そ一万五千人皆陣をニユーキヤスソルの平原ゐ取れり、斯く夥多の人衆輻輳の際に當り其中ゐ罪惡の充溢するは蓋し怪むべきことにあらざるなり、數日の後ウエスレーは此陣營の中心に立ち「凡て餓きたる者ハ我ゐ來れ」との題を以て說敎せしが氏は此時の事を左の如く云へり「人皆終始靜肅ゐして謹聽し毫も妨害をなすものゐし然れども予は彼等が心に達するを得ざりしゐり實に學者の語は軍人ゐ感動を與ふるを得ず」ウエスレー

ウエスレーニユーキヤスソルの陣營中ゐ敎す

は斯る場合に於ては平信徒ゐして豪勇なる騎兵ジョン、ヘームの如き者却て已れよ勝れる所の成功ある働を爲し得ることを認知せり、然るに氏は尚失望せず翌日再び兵士に向て說敎せしが此際一士官妨害を試みしも說敎の後に至り兵士に向ひ今聞きし處の事の甚だ善かりしことを言ひ以て前非を償はんとせり、氏は次日(十一月二日(土曜日)復た左の題を以て說敎せり「聖書は凡ての人を罪の下に拘幽たり此は信ずる者に約束の與へられんが爲なり」、日曜日よ至り軍營は復た氏が會堂となり貴賤貧富群をなして氏の許に來集せしが氏は其人々に向ひ「人は皆等しく罪を犯して神の惠を受くるよ足らざる者なれば神の前には毫も貴賤貧富の別あるとなし」と云て一場の說敎をなせり、氏又會祭の周圍よ許多の日耳曼人慰めを得ずして空しく佇立するを見久しく用ひざりし日耳曼語を以て彼等に語れり、氏は之を以てニコーキャスソル平原の軍營に於ける働きを終り次日ロンドンに向て出發せり氏がウエドテスベリーに達せし時は既よ暗かりしが過まつて沼中に陷る幸に人あり燭火を携へ來りて氏を助け出したり斯て其馬の救助

ニコーキャスソルを去る

沼中に陷る

若識を彼等に托し己は急ぎフランシス、ソルドの家ゐ致り泥土を以て汚れたるまゝ直に說敎を始めたり、遂に十一月十三日安然よロンドンゐ到着せり

ブリストル年會

ウエスレーは此年の年會をブリストルに開き八月一日より仝六日に至れり、出席者はウエスレー兄弟と一人の敎師ホッヂス氏及び六人の巡回傳道師トーマス、リチヤルド、サムエル、ブルウード、トーマス、メイリック、リチヤルドモス、ジョン、スロコム、ホルベルト、ゼンキンスにして傳道者にあらざる一人の紳士マルマデユーク、ウヰンテ氏も共に席に列りたり氏は後チヤールス、ウエスレーの外員とおりし人あり○議會の第一日ハ稱義の敎理を復議し而して更よ左の事を議定せり即ち稱義ハ罪よキリストを信ずるの信仰よのみ由る者なりと雖も悔改即ち罪の確認及び之に符ふ處のみ果(之を現ハその機會ありと假定して)は其信仰に先だゝざる可らざる事是なり第二日よ於ては確認(アスシユーランス)稱義(ジユスチフイケーション)に先だつべき行爲、及び從順序等の諸敎理を議し第三日ゐ於てハ敎會政治に關する諸点を議せり、此時最も善く道理に適合する敎會政

教理ゐ關する議定

最も道理よ適ふ敎會政治

治は監督政治なるか長老政治なるか將た獨立教會政治なるかとの問題起りしが其答は左の如くなりき　是等は互ふ相關係そる者ふして一は他を生ずる者ふり即ち一人の傳道者一地方ふ傳道し而して其所に一の獨立集會を作す後其近傍の各所ふ他の集會を設置するに至り爰に始めて夫等の處ふ執事を置くの必要生ず、而して夫等の執事は右傳道者を父の如く見做す是等の集會漸く增加し又其執事等も年を重ね恩惠に生長するふ從て補助者即ち助手執事を要そ、是に於て前の執事等は長老と呼ばるゝに至り、主ふ在て彼等が父たる夫の傳道者は監督即ち彼等凡ての者の監視者(オヴァルシール)となり　是れ實ふ巧妙なる解答と云ふべし○ウエスレーの補助傳道者は其數十四人にして彼等ハ單に靈魂を救ふ事のみ勉むべき者にして皆左の規則を守れり即ち彼等は毎日朝夕の説教の外六時より十二時迄を讀書執筆及び祈禱に、十二時より五時迄を訪問ふ、五時より六時迄を神との親密なる交通に用ゐるの定規なりき

ウエスレーの補助傳道者其守るべき規則

此時迄ウエスレーの出版物ハ多く極めて低價なる小冊子なりしが實却

ウエスレー著

世に出て富を致す

の冊數甚だ多かりけそば其價額皆ふ出版の費用を償ふに足りしのみならず尚多少の潤益を得るに至れり、氏は一千七百八十年に起草したる説教中ふ左の言をなせり四十二年前余は貧民の爲に予が是迄見たる書籍より一層低價にして一層簡明なる冊子を備へんと欲し許多れ雜書を書き三一冊の價凡そ一ペンニー)後種々の大部の書籍を著述せり其中或書は予が想像をだにせざりし許多の發賣をなすに至り之が爲に予は俄かふ富を致せり然れども予は決して之を求めし非ず又之が爲に勞せしふも非るなり今富は斯く俄ふ予が身上ふ來りたりと雖も予は毫も財を地ふ蓄ふることをせざるなり予が神の召を蒙りて世を去るに當り予が家には書籍の遺るあるも他に決して遺る處の者あらざるべし若し予財産を遺すことあらば予が其財を貯へたる手は予を刑するの司刑者たるべし」

此年に於けるホ非ットフヒールド及チヤールス

一千七百四十六年　四十三歳

ホ非ットフヒールド夫妻ハ尚此一年間全く亞米利加ふ滯在せり、チヤールス、ウエスレーはロンドン及び其近傍の諸邑に四ヶ月餘を費やしブリス

トル、コルンウオール及び英國の西部に凡そ六ケ月を費やし而して年末の數週間は之とヨルクシール及びニューキャスツルの旅行とに費せり、光り輝く天使の如く氏が心は聖なる愛と音樂とを以て輝き、勞働危難迫害等一も其救主の爲とは忍び難き者なかりき、コルンウオールに於ては氏は僧侶者を伴ひ來りたりとの報遠近に達し爲に夫の有名なるユーステック氏は氏を捕へんが爲とは逮捕狀を携へて此地に來りしが遂に之を捕ふるの勇氣を失へり又シヨールハムとは於ては氏が教說を始むるや否や殘暴なる愚漢或い大聲を發し或は足踐みし或は胃漬の語を發し又鐘を鳴らし會堂を變じて恰も獸園の如くなせり、又氏がヘリスヘムの鬪鷄場に於て說教せし時ハスクワイル、ロバルツなる者全力を盡して暴民を煽動し又或もれは鷄を携へ來りて之を鬪わしめ以て說教を妨害せしも氏は之を意とせざりき、斯る熱心と豪氣とは只にウエスレーに在りて存せしのみならず其補助者等にも又等しく之ありしなり、或時ノッティングハムとは於て暴民等會場を圍み之を引き倒さんと恐嚇せしがジヨン、チルソンは此騷動の主動者なりとて警察官に捕へられ市長の許に送られさり此時群衆は氏に後より或は呪詛し或は歡呼して之とは從へり市長は先づ氏の姓名を問ひ而して左の如く云へり「汝が見る如く暴民等い汝のノッティングハムに於て說教をすることを許さざれど汝い汝が家に止まること能はざるべし」然るにジヨンは他の市邑は概ね皆有司に由て支配さるゝに獨りノッティングハムのみ暴民に由りて支配さるゝことを知らざりし旨を述べ且つ死生は毫も其意に界する所とはらざることを告げたり、市長い更に氏に向ひ「汝此地に於て說教をる勿れ」と云へり此時夫の警察官は心中甚だ安からを市長とは向てチルソンの處置を問ひしが市長い此とは答て「彼を汝が家とは携へ往け」と云ひしかど警察官い是を赦免せん事を請へり市長は遂とはテルソンを歸へして能く保護すべき事を命せり、此に就てテルソンい左の如く云へり「斯く警察官い再び予を我儕が兄弟の許に護送し來り我儕をして其凡ての惠とは就て神に感謝するを得せしめたり」

ウエスレーはロンドンに於て午前第四時の說教を以て此新しき年即ち

前四時の説教を以て新年を迎ふ

カルヴイン派メソヂストの會議に出席す

一千七百四十六年の旅路ふ上りしが斯る例は其繼續者中に多く見ざる處なり、一月二十日ブリストルを向て出發し二日の後其處ふて開かれたるカルヴイン派メソヂストの會議に出席せり此會議に列りたる者はハツオルハリスと其十一人の傳道者及びウエスレーと其四人の傳道者にして毎度ウエスレーの名を第一に記したるを以て考ふれば此會議を司りし者はウエスレーなりしが如し今其議事錄を左に示すべし

「新禱後當議會に提出されたる問題左の如し　(一)我儕は如何ゑして既に存する我儕兄弟間の愛の障碍物を除くを得べき乎　(二)我儕は如何ゑして此後斯る障碍の起るとを預防すべき乎　或者ウエスレーがニースゑ放て説教するが爲め其地の會衆互ゑ分裂するに至らんとを恐れしかばウエスレー之ゑ答て「予はニースふ於ても又ウニールスふ於ける其他の市邑ふ於ても既ふ會の設けある處に於てゝ別に會を組織せんとするゑゝらず却て勉めて斯る分裂の起るを防止せんと欲するのみ」と云へり

我儕ゝ皆左の事に一致す即ち我儕が互に他人の會衆中に在て説教するときは毫も相互の手を弱むるとをせず却て之を強むるとを勉め且つ力を盡して諸會の分裂を防止すべし、又ウエスレーの會より一人の兄弟はハリスと共ふブリストル及び西部諸會ゑ往き其處の分爭困難を醫し、且つ其會友等が專ら心を愛の精神と其成果とに注がんとを勸むべし、又我儕は務て相互の品格を保持する事に心を用ふべし」

此會議は實に優美なるものゑして今日メソヂスト教會々議の宜しく模倣すべき適例なりと云ふべし爰ゑ我儕は二派の人々互に相爭はん爲にあらず相愛せんが爲に會合したるを見る、抑もメソヂスト教派の起りたるは僅かに五六年前の事なるふ今斯る美風を見るゑ至りしは是れ全くウエスレーとハヴオル、ハリスの非凡なる處理に由らずんばあらざるなり

ニューキヤスソルに發向す道中の困難

ウエスレーブリストルと其近邑にて凡そ一ケ月を費やし二月十七日馬上ニューギヤスソルに向て出發せしが其互離ゝ三四百英里の間にあり其地に達するに十日を費せり途中氏は小流の漲溢道路の不通等の爲に屢々困

熱病流行中ニユーキヤスツルに於けるウエスレー

野を横過せり且つスタフオルドシーアのアルドリッデ、ヒースに於ては雨繼じて雪とあり剩さへ北風面を刺き須臾にして全身凝結す又リーッに於ては暴民氏に追隨し來り何にても其手に觸るゝ物を投じて氏を攻擊せり而して其投じたるもの〳〵中氏が面部に中りしものもありしと雖ども幸にして重傷を被むるに至らざりき、氏ハ二月二十六日ニユーキヤスツルに着せしが當時此地ハ一般に熱病流行の際にして此所に屯營したる兵卒の中二千人は既に斃れ而して病勢尙ほ猖獗を極む然るに氏ハ十八日間ニユーキヤスツルと其近邑に在て說敎しブレシーに於ては天氣甚だ暴烈なりしにも係らず屋外に於て說敎をゐし而して氏ハ聽衆と共に毫も此の天氣を意とせざりき、氏は其傳道者ジョン、ダウンス及びウヰリヤム、セパルドの二人と共に三月十七日ニユーキヤスツルを發して南に向ひしが凡そ四五十英里を行きたる頃ダウンス病の爲ふ進行するを得ざるゐ至りウエスレーの馬亦跛となりて進むと能はざるに至れりウエスレー記して曰く「斯くして往くこと七英里にして予全く疲勞し且つ甚だしく頭痛ゐ惱めり其時予は心中ゐ「神は或方法を用ゆるか或は全く人の方法に依らずして人畜を癒すを能はざるか」と思ひしが此念慮の予の念頭に浮ぶや否や直ゐ予の疲勞は頭痛と共に消失し馬も亦同時ふ舊の如くに快復せり、斯くて我儕ハ其日も又次の日も敢て止まるをせずして旅行を續けゝり、愛に予は單ゐ事實のみを陳べたれば之に就ての解釋如何ハ各人の意見に一任せんのみ」と、ノッティングハムゐ來て後謂て曰く「予久しく此所に於てハ神の事業を妨ぐるものは何なるかを疑へり然るに今之を探究して其何物たるを發見するを得たり即ち我會友中許多の甚だ放恣不規則なる者ありて爲ゐ神の祝福其上ゐあると能はざりし一事あり故ゐ予は一擊の下ゐ凡て斯の如き者を斷ち去ると而して眞實ふ己の靈魂を救ふふ熱心なる者と認定する小數の會友のみを殘せり」と

ノッティングハム會不振の原因——會友の放恣不規則

氏ロンドンに歸り居ること三週間にして五月四日再びブリストルゐ赴き同月七日ロンドンゐ還る、七月二十日又ブリストルゐ赴き二週日の間其處に留まり八月十日ウエールスに往きブリストルゐ歸りて後九月一日コルンウ

ウエスレーコルンウオールに赴く

オールに向て出發せり、セント、ジョストよ於て氏は其會の此郡中にて最も活動せる會なるを見しも尚會友中數人の集會を怠るとハ之より一層大なる他の害惡を來たすの先驅者たるなり」者ありたれば氏は之を譴責するの止むを得ざるに至れり、氏は月夜シスニーに於て說敎し而してウエンナップよ於てはトーマス、ヒッチンスの葬式ゟ臨み「我生るはキリストの爲め又死するも我益なり」との聖語を題として無數の大衆よ說敎せり、氏はコルンウオールよ在ること十四日よして九月十六日ロンドンゟ向て出發しオックスブリッヂに於て其兄弟チャールスに遇ひチャールスを以て其地布敎の主任者となせり、ロンドンに留ること一週日にして其友ペロテットを訪はんが爲め同地を出發し途中セヴェノークスよ於て夥多の粗暴ある人民よ說敎せしが其中の一人ハ痛く氏を呪詛せり、ショールハムゟ於て氏ハペロテットの會堂に於て二回の說敎をなせしが其自ら言ひし如く「會衆は何をも了解する處あらざりしが如し」氏ハ此年殘餘の時日を全く首府ロンドンにて費やせり

醫師たるウエスレー

ウエスレーは既に貧者の爲ゟ資財を積み衣食ゟき者に之を與ふるの方法を設けしも爰に尙池の方法の必要を感せり氏は許多の貧しき病者の苦痛困難を見大に之を憐むの心を起せしも如何ゟして之を救助すべきやを知らざりしが遂に一策を案出せり氏曰く「遂に予は大膽なる一策を案出せり即ち我自ら醫を學び自ら彼等に醫藥を與ふべしとの企圖是なり予ハ亞米利加よ航するの際數月間解剖學及び藥劑學を學びし」何となれば亞米利加にて適當の醫師おき場合に於て多少人々の益となるべしと思考したれば「外適當に之を學びしをなしと雖とも二十六七年の間暇を得る毎よ之を學ぶことを勉めたり予ハ再び身を此事ゟ寄せ一人の製藥者と一人の經驗ゟある外科醫とを用て補助者となし予が力の及ばざる場合ゟ於て又患者の撰ぶよ任せて是等の醫師に治療を托せり予は之を一般の會衆に告げしが五ケ月間よ於て藥を與へし患者の數ハ無慮五百人の上に出でたり予ハ始めより藥を與ふることを會內の人に限らざりしを以て右の人々の中よハ往々予が嘗て知らざりし者もありしあり右患者の中斷へず藥を取り而し

て能く我儕の指揮に從(患者の四分の三は斯くおさゝりきひし七十一人ハ彼等が久しく不治れ病と思考せし惡疾より全く癒さるゝことを得たり此間に施出せし藥價の總計は殆んど四十パウンドなりきと、是實に大膽なる所業にして氏は自ら世の非難の衝路に當れり、氏は正則の醫師製藥者に非ざりしを以て四方より庸醫の譏刺を受けしが貧き病者の適宜ふ醫師を得ざるゝ醫師の屢々無益なりしと、已ゞの施療の成功ありしと等を擧げて自から辨護し而して一千七百四十九年のバス、フォルナハに載せたる一書翰中に左の如へ云へり予ハ未だ予が手を下したる患者の中一人だに癒へずして死せし者あるを知らず若し之を知る者あらば其時と狀況とを合せて之を告知されんをを望む」

ブリストル年會

ウエスレーは五月十二日より四日の間ブリストルに於て年會を開きしが來會者は四人の教師(ウエスレー兄弟、ホッヂス及びテーロルの両氏)四人の巡回傳導師(リーヴス、マクスフヒールド、ウエストール及びウイリス氏)及びトーマス、グラスコット氏(我儕は此人に就て毫も知る所なしゝおりき)從來の議會に於けるが如く此時ふ於ても諸教理を復讀し更ふ誤謬に陷らざらんことを力め、其後條例の諸点を議定し、而して毎年年會に列なるべき者を左の如く定めたり　(一)傳道者　(二)年會の開かるゝ都邑に住する最も熱心ふして且つ最も智識ある會長(バンドリーダス)　(三)年會地に來遊の敬度にして聰明なる賓客　此議會は單ふ誤謬を矯正し不明瞭の点を明瞭あらしむる爲ふは年會毎に

年會に列なるへき者

ウエスレーの雜書一二を朗讀するは甚だ有益の事あるべしと思考せり、又此議會に於てウエスレーの補助者等は他人の嫉妬を惹起せんゞ爲ふ神ふり定めらをたる特別の使者なりと定め而して又傳道の事業の爲ふ神に召されたりと自信せし者は左の三要点に於て嚴密なる試驗と受くべき者なることを決せり即ち才識、信德、結果の三点ふして誰にても判然之を併有する者は眞實に天の召を受けし者と認許さるゝを得さり、議會の人々ハ當時共初に於けるが如く一般に贖罪の說教をなすことを怠りしことを認識し且其最も大なる恩惠を蒙りし說教ハ(一)其最も適切(クロース)なりし者、痛切(コンヴィンシング)なりし者、又特ふ一事物ふ關(パルティキユラル)したる者(二)祭司たり贖罪者たるキリストふ最も關係ありし者

毎年會に於てウエスレーの雜書を朗讀するとふ定む

傳道者試驗條目——才識信德結果

最大の恩惠を蒙りし說教

新博道地ふ行くことに就て

ウエスレーの説教集

(三)人は神を侮ると又は之を不問に置きて生活するとの大惡なることを警戒せし者等ありしことを認知せり、又議會は若し適當なる人は召きあり且つ其地に往くは現任地に留まるより一層大なる益あるべしとの預算あるに非ざれば決して神の召として新たに他ふ傳道することを許さゞることふ決せり

此年十一月ウエスレー始めて説教集を出版せしが是れ即ち後の三集及び氏の新約全書の小註と共ふ永くメッヂスト神學の標準たる者あり氏は其序に過る八年の間に説教したる教理は直接間接ふ悉皆此書中に含有さるゝことを陳べ且つ左の如く云へり

「此書には艶麗なる言詞の以て讀者を歡ばしむべき者なしと雖ども之れ決して怪しむべきことふ非らず予ゝ初めより斯る目的を以て書きしにあらざるなり、よし斯る望みありしとするも予が時間は之を爲すを許さるべし、予は單に通常予が公會ふ於て語るが如く筆せり予は單純なる人々ふ向て單純なる眞理を示さんことを企圖したれば凡て華美なる言辭哲理上の空想複雜なる推理及び時々聖書の原語を引用するの外可成的學者風を避けんことを勉めたり、予は思ふ、予は只だ一日の受造物にして神より來て神に歸るの嚢なりと、予は一事を知らんことを欲へり即ち天に往くの途是なり、而して神ゝ予ふ其途を教へんが爲に、親ら天より降り之を書に筆せり、今其書を予ふ與へよ假令千万金を要するとも神の書を予に與へよ、ア、予は之を有す予が知るべき事は此中ふ滿ち充てり、予ゝ遠く世人の繁劇なる途を離れて今此所に在り今予と共に此所に在る者は只神のみ予ゝ天に到るの途を見出さんが爲に神の前に於て此書を熟讀すべし而して若し意味の理解し難き所あらんか予ゝ心と光明の父に舉げて其聖旨を知らしめ給はんことを祈り尚聖書中他の部分を參考して之を熟考せよ而して其之を熟考するふは全心全力を注ぎ熱心以て之をなす而して尚解けざる疑あるときゝ之を神の事に經驗ある人々に質し又斯る人々の殘したる著書ふ就て熟考せ、予は斯の如くして自ら學び其學び得たる所を人に教む」

一千七百四十七年　四十四歳

ウエスレーの旅行

デヴアイゼスに於ける迫害

チヤールス、ウエスレーは此年の始め二ヶ月間をニユーキヤスソルより
ブリストルに到るの旅行に費し次の六ヶ月間をロンドンとブリストルふ
終の四ヶ月間を愛爾蘭に於て費せり、ジョン、ウエスレーも亦殆んど絶へず
旅行せしが今其路程を考ふれば一月十一日ロンドンを發してブリストル
に向ふ其デヴアイゼスに達するや其地大に扇動し暴言呪詛恐嚇等邑中に
充てり是蓋し此地の牧師インニー氏ウエスレーの來るを知り終日邑中を
奔走して人民を煽動せし結果なるべし然れども彼等は未だ充分ふ此熱心
ふる牧師の大目的を了知せざりし者ふや定めの時刻に至りウエスレー起
て說教を始めしも此煽動されふる暴民等ハ敢て一言を發せず却て能く之
を聽聞せり十六日の後氏は再び此地に來りしが此時も大に愚民を煽動す
るの計畫ありしも氏ゞ自ら記する如く「其事殆んど徒勞ふ屬玄其集め得た
る者は僅少の兵卒と四五十人の兒童のみなりき」○氏は其兄弟に告げて
デヴアイゼズに於ては毫も暴民の蜂起する等の事なしと云ひしもチヤールス
は自ら此所ふ來て直に其然らざるを發見せり氏ハ二月廿四日此地に着せ
しが人民ハ邑の主もなる一紳士を首領として氏の來着を待ち熱心なる牧
師インニー氏ハ彼等と共ふ市中に在て甚だしく喜び已を忘れて跳躍せり
此迫害者は先にウエスレーを迫害せんとして失敗を取りしが今チヤールス
を迫害するふ於て漸く成功するを得たり氏は講壇に於て又家々を經廻り
てチヤールスが大學に於て冒瀆の說敎をなし且つ其會衆に告て「汝等若し
我が汝等の上ふ氣吹く時聖靈を受けずば皆神の刑罰に與かるべき者なり」
と言ひしを聞けりと公言せり氏ハ邑中ふ名ある背敎者ソツトン、ウ井リー
の二人を得て已ゞ味方となる暴民等と共に會堂の鐘を鳴らしフヒリツプ
夫人の家ふ迫りて窓戸を破壞し入口を閉塞してチヤールスを逃さゞらん
が爲に所々に燈火を点じ而してチヤールスと其友メリトンの馬を奪ふ(數
時間の後或池中に於て其馬を發見せり)且つ罷吐水を以てチヤールスゞ宿
所に水を注射せり(家中の貨物は之が爲に甚だしき損害を蒙れり)加之此地
の小さきメソヂスト會れ會長は彼等の爲に池に投せられしゞ不思議ふ死
を免かるゝことを得たり此時市長の子は悔改してメソヂスト會に屬せしも其

父は其責任を忘れて邑を逃れ去れり然るに其母は下婢をチヤーヮスの許に遣はし氏の女裝して此危難を逃れんことを請ひしが幸ひして警察官來りチヤールスに請ふて邑を去らしめさり此時ソットン、ウヰリーの二人はインニーと共に已等が煽動したる頑民の暴行餘り激烈に過ぐるを見て甚だ恐懼せり、此騷擾中チヤールス、ウエスレー及びメリトンの二人は難あく此所を脱そるを得たりしが途に出て其兇猛なると此殘忍なる暴民等に劣らざる一群の兇犬に攻撃せられ辛ふじて之を逃れたり斯て二人は共に讃美歌を唱して恰も勝利者の凱旅するが如く揚々としてバス及びブリストルに向て進行せり

奇なる哉ウエスレーは其最も困難なる旅行をおそれ常に年中最惡の時候を撰みたり何故氏は然かなせしか我儕は之を知らず、ロンドンの各組を訪ふことを終へて二月十六日ニューキヤスツルに向て出發せしが此時北風凛烈氏同行者とハットフヒールドに達せし時は全く手足を使用する能はざりし程にてバルドックに到る途中霰雪烈しく彼等の面を擊ち目を開く能はざりしのみならず殆んど氣息をも通ずる能はざりき、次日の最も大なる困難は馬猶能く進む能はざりしことにして此時風勢益々強く殆んど人馬を轉倒せんとせ且つ彼等の外套と大小の靴とを通ふして雨霰を吹き込み両眉より落る雨滴は凝て氷柱をなせり、又スタムフオルド、ヒースに於ては人馬を沒する如き雪塊の路に横はるに逢ひ而して日沒の頃に至り漸くブリツグ、キヤストルトンに安着するを得たり、十八日に至り或人彼等に告て昨夜の降雪の爲め道路塞がりて通せざるとを言ひしにウエスレー之に答て「我儕は馬を率て少なくも一日に二十英里を行くことを得べし」と云て出發せしが東北風は尚痛く其肌を刺し加之大道全く塞りて通過するを得ず特にウエスレーは齒痛に惱まされしも遂に午後五時に至りニューアルクに着そるを得次日エプウオルスに到り三日間滯在せり其間氏は質素なる會場に於て安息日二回の説教をなし又夕の祈禱會の後夥多の中年以上の邑人に向て一場の説教をなせり、三月二日ニューキヤスツルに着し其處に留まること七週日にして四月二十日ロンドンに向て出發せしが此日氏は六

齒痛に惱まさる

一日に六十英

里餘を行き三回の說教をなす

十英里餘を旅し其間に三回の說教をなし日暮に及びてオスモザレーに着し而して「主は實に甦れり」の語を題として墓石の上に立て一場の說教をなし以て此日の業務を終れり、爰にジョン、テルソンハヨルク近邑に於ける殘忍なる迫害者の手を脫して此處に來りウエスレーに面會せり、ウエスレーは進んでマンチエストルに到り五月七日サルフオルド街に於て說教せしが此處には數月來數人の青年等相集りて一の會を設け一室を借りて其會場となし居たり彼等書をウエスレーに寄せ彼等を其兄弟の中に加へんとを請ひしが是れマンチエストルメソヂスト派の起源にしてウエスレーハ其會場に關して「彼等の家は聽衆十分の一をも容るゝに足らず」と云へり是れ氏がサルフオルド街に於て說教せし所以なり

ロンドン會の會計

最初よりロンドン會の會計事務は全く會計吏に委任し其員數は十六人ありしが今ウエスレーハ之を七人に減じ事務整理の法方を敎示せり爰に會計吏は何處より金を得しやとの疑問起るとあるべきが彼等は之をロンドンの各組より得しあり既に四年有餘の間各組より鳩集したる金ハ悉く之を會計吏の手に付し而して會計吏ハ貧者の需用に從て之を支出し未だ一シリングも傳道者俸給の爲に消費せしことなし○病者の訪問及び施藥局の開設等ハ既に述べし所なるが此他醫ファウンドリに屬する貴重なる事業ありて實に多額の費用を要せり即ち貧者及び寡婦の爲に二棟の小家を備へたることにして之を給養するには聖餐の時集めたる金及び各組よりの集金を以てせり一千七百四十八年ウエスレーは左の如く記せり「我僕ハ今此(通常貧院と稱す)中に九人の寡婦一人の盲婦二人の貧兒及び二人の上等僕婢を有す予は之に四五名の傳道者を加ふることを爲し得たるべし何となれば予は此邑に居る傳道者等の如く自ら此院中の者と同じ臺に於て同じ食物を食し而して我僕が父の國に於て共に食をることを思ひ出でゝ大に喜樂を覺ゆればなり」此他一の學校ありて二人の敎師と凡そ六十れ兒童を有せり而して其兒童中月謝を納め得る者は甚ゞ僅かにして多くは非常に困難あるが爲めに管に月謝を免ずるのみならず往々之に衣服をも施與せり又此學校の爲に二人の會計吏を定め之をして義捐金を領收し又校費を支辨せ

ファウンドリに於ける貧院

學校

貸金會社

しめ且つ毎週二度兒童等と共に祈り又勸めをなし而して毎水曜日の朝は兒童等の父を會して家庭に於て其子女を敎育するの法を談せしめたり

此他ウエスレーは貸金會社を創設せり氏い屢々人々の時に些少の金を要するとあるも何處ゐ之を借るべきやを知らざるを見此を補助せんと欲してロンドン市中を奔走し數日にして五十パウンドを得之を會計吏の手に付せり而して會計吏は毎火曜日の朝金を要する者に之を貸せしが其高は一人二十シリングを超へず其期限は三ケ月となせり、ウエスレー曰く是れ殆んど信じ難き程なりと雖ども此僅少の金額を以て一千七百四十七年中に二百五十人を補助せしい事實なり神は人類を愛する人々の心を動かして此僅少の資本を增加し給いざる乎若し斯る事を以て主に貸すをなりとせずば如何なる事を以て主に貸すとなりとをる乎」と此后資本漸く增加せしご一千七百四十八年の始めに至りウエスレー公けに之ご爲に金を募集し又他の方法を以て金を集めたるより一千七百六十七年に於ては百二十パウンドの多額に上り而して從來の貸金最高額を變じて一人一パウンドより五パウンド迄となせり

年會

一千七百四十七年の年會い六月十五日に始まり全廿日に終りしが此年會は是迄開きたる年會中最大の者にして六人の敎師(ウエスレー兄弟チャールス、マンニング、リチヤルド、トーマス、ベートマン、ヘンリー、ピールス及びヴインセント、ペロテット)、ハウオル、ハリス及び九人の傳道者(ジョン、ジョーンス、トーマス、マクスフヒールド、ジョナサン、リーヴス、ジョン、チルソン、ジョン、ベンチット、ジョン、ダウンス、ロバルト、スウヰンデルス、ジョン、マッドルン及びトーマス、クラウチ此人は當時定住傳道者なりき)より成り立つ、當時ウエスレーの補助者い二十二人に上して巡回傳道者として働く者を合せ定住傳道者の數三十八人なりき

ウエスレー國會議員撰擧に於ける賄賂を難しむ

談會後ウエスレーいコルンウオールゐ向て出發せしが此日は日曜日ゐして又國會議員撰擧の當日ありき氏いエキセトルゐ於て其衣服を乾かす間ゐ「地主に一言」(エヒオルド ツー エフリーホルドル)を書き又セント、アイヴスに於てはメソヂスト敎徒に向て彼等が決して賄賂を受けて人を撰擧するご如き事なからんことを勸告せし

追害

ウエスレーコルンウオールの勸士を汰す

が爲に彼等の中一人も已ごの撰擧したる者の金錢よりては飲食だよせし者わらざりきプリマウスに於ていゝ一士官氏に妨害を加へんためよ兵卒皷手及び暴民の一隊を率ひ來り、セント、アグニースわ於ては賤民等頻りに塵土を投せり、又或一人ハウエスレーが說敎せんとするを聞き「若し彼れ說敎せば我れ石にて擊つべし」と云ひ數箇の石を拾ふて衣囊わ充てしがウエスレーが「爾等の中罪なき者先づ彼を石ふて擊つべし」との題を以て說敎するに至り全く其勇氣を失ひ衣囊中の石は私かに之と棄て謂へらく此說敎者は實に驚くべき能力を備へさりと遂に其場を出去れり、ウエスレーはシスニーに於てコルンウオール諸會の役吏を會し而して郡中十八人の勸士あるを知得せり然るに其中三人は全く其務を執るの資格なく他の一人は啻に其務を執るの才識信德を有せざるのみならず性遲鈍にして腦中一物を有せず只自負の癖あるのゝ而して又他の一人ハ確かに神の大なる恩惠を蒙りしも全く之を棄却したると明かなりしを以てウエスレーは是等五人を退け諸會よ勸めて爾後彼等の言わ耳を傾くるゝ勿らしめたり而して殘り十

愛爾蘭

ウエスレー愛爾蘭に航すダブリンよ於けるウエスレー

三人を以て彼等自已の會若くは近傍の會に傳道者なき時其所に於て說敎すべき者となせり然れども彼等は先づ己より一層經驗よ富める人々の勸めあるにあらざれば妄りよ自ら進む可らざるゝを勸告されたり八月一日ウエスレーブリストルに歸り三日の後愛爾蘭に向て出發せり、此國ハ一千六百四十六年夫の慘憺たる返逆を起してより既に一百年を經ウヰリヤム王ボインの戰勝を去る既に半世紀を越ゆと雖ども當時尙英國をして大よ其統御に苦しましめたり、ウエスレーが愛爾蘭海峽を越へしは前後四十二回にして此島に於て費せし日子は總て六ケ年に下らざりき而して氏は此島より、トーマス、ワルシ、アダム、クラルク、ヘンリー、ムール等の有力ある役者を得たり、愛爾蘭人は英領北亞米利加、西印度、亞弗利加、印度、及びオーストラリヤ等にメソヂスト敎派を興す爲に神より特別なる使命を受けたる者の如し○ウエスレーは八月九日(日曜日)の朝ダブリン港に着し其日セント、メーリー會堂に於て冷淡なる會衆わ說敎し翌朝五時トーマス、ウヰリヤムスの會衆を集めて之と語り仝六時一大室內に於て說敎せしが聽衆夥多に去

て容るゝ能はざりき氏は毎朝メソヂスト會の諸規則を説明し而して會場に溢るゝ聽衆に向て毎日二回の説教をなせり又氏は八月十五日即ち土曜日に於て凡て氏と語らんことを望む者に面會せんことを告知せり、氏記して曰く「予は其來りし者の中に殆んど一人の愛爾蘭土人をも見ざりき、從來の愛爾蘭人の中少なくも百分の九十九は尚其祖先の宗教を墨守しダブリン其他何處に於ても新教徒は殆んど皆近時英國より移轉したる者なり……」と又氏はウヰリヤムスの設立にかゝるダブリン會が凡そ二百八十の會員を有し而して其中には許多の篤信者あるを認知せり○ウエスレーダブリンに留まること正に二週日にして英國より歸りチヤールス、ウエスレー代て其後を繼ぎチヤールス、ペロテットと共に九月九日ダブリンに着せりウエスレーこの此地を去りしより二週日は間ゐ暴民等マルボロー街の講義所に乱入して許多の物品を破壞せり此時多の高價なる物品を盜み去られしのみならず講壇長椅子等ハ公然街頭より於て焚かれ剩さへメソヂスト教徒等ハ樫棒を以て歐打されたり、斯の如く信者等は全く其會場を失ひチヤールス、ウエスレーは險を冒して常の如くオックスマントン、グリーンに於て説教せしが一ケ月を出でずしてドルフヒンスバールンより近き所ゐ一家屋を購求するを得たり此家は全土間皆織匠の工場なりしが其工場ハ之を説教場となし階上の諸室ハウエスレー兄弟及び巡回傳道者等の旅館とゐせり十月廿五日チヤールス、ウエスレー開場の説教をなせしが夥多の聽衆家の内外に充滿せり、氏ハ其日五回より少なからざる説教をなし且つセント、パトリック會堂に於ける三時間の禮拜式に出席したりと雖ども夜に至りて身心の爽快ゐること尚朝其役務を始めし時と異ゐることなかりき、ダブリン會は諸費用の爲に七十パウンド以上の金を出せり、チヤールス、ウエスレーは此會の忠實なる役者として此に止まること六ケ月以上に及び而して愛爾蘭メソヂスト教派は漸く進歩の緒に就けり

ダブリンゐ於けるチヤールス、ウエスレー往くゝ説教し

チヤールス、ウエスレー一日五回の説教をなし三時間の禮拜式に列る

ロンドンゐ到る

ジョン、ウエスレーハ八月の末英國に歸りホーリー、ヘッドよりブリストルゐ向て進みしが其間街頭、墓所、墓石上、平原、城庭、其他何所に於ても機會を得る毎ゐ必ず説教し而してロンドンゐ向て道を急ぎ九月十一日同地ゐ着

傳道者が説教に於て他人の意見を駁するを警しむ

し直にムールブヒールヅに於て再び其働きを始めさり氏ハロンドンに於てハウエスト、ストーリートを除くの外未だ斯る嚴肅なる聽衆あるを知らずと云へり、氏は傳道者等を奬勵し其中の一人には左の如く書き送れり「公會の説教に於てハ一言半句たりとも苟も他人の意見を駁するが如き語を發すべからず我儕ハ他人の意見と戰ふに非らず只罪とのみ戰ふなり予は毫も足下が聽衆ヨ對し預定の説に反對して口を開かんことを勸めず蓋足下若し之を爲さバ其ヨ由て足下ダ思ひ料らざる程の害を來すべし足下は只我儕が主持する一点即ち信仰ヨ由り又罪の赦されたる神の證しに由れる現時内部の救を宣ぶべし」氏ハロンドンと其近邑に留まること十一週ヨして一月三十日ブリストルに向て出發せり

ウエスレーブリストルヨ赴く

一千七百四十八年　四十五歳

ウエスレー記して曰く「一千七百四十八年一月一日—我儕ハ午前四時ヨ歡喜と感謝とを以て此年を迎へ而して此心情ハ晝夜共に我儕の中ヨ充ち居たり」と氏ハ一月二十五日ブリストルに向て出發せしがウオールミンストルより三英里なるロングブリッヂ、デヴェリルにて卒然落馬し辛ふじて死を免かるゝことを得たり氏は此等の危險に遭遇せしと屢ゝにしてセプトンマレットの近傍ヨ於てハ險坂を下るの際馬躓て轉倒し人馬共に殆んど其命を危ふせり、又數週の後愛爾蘭ヨ於てハ其馬執拗にして御す可らず遂に倒まに落さる、斯く氏は殆んど夫の「又屢ゝ旅路を經且つ河の難盜賊の難同族の難異邦人の難城裏の難野の中の難僞の兄弟の中の難に遇へり又彼等に愈りて勞苦り疲かれ屢ゝ眠らず飢へ渴き屢ゝ食を絶ち凍へ裸なりしあり此ヨ言ハざる外の事ありて日々我に迫まる即ち諸の教會の憂慮なり」との使徒の語を以て己が語となすことを得さり○ブリストルの講義所ハ新築后僅かに九年を經さるのみなりと雖ども當時將に倒れんとするの恐れありと且つ會場狹くして會衆を容るゝに足らざるを以てウエスレーは直に其修繕增築に着手し而して之が爲に二百三十パウンドの義捐金を得たり此際氏ハ又セプトンマレット地方に赴きしが氏を迫害せんが爲に雇はれたる暴民酔漢等瓦礫を氏及其友ロベルト、スウ非ンデルスに投じ其宿所に迫り

落馬

ブリストル會場の增築

迫害の中に在て斯派の進歩

て窓を破壞し且其家屋を焚て灰燼ならしめんと恐嚇せり、斯る迫害あるにも拘らずメソヂスト教派は益擴布し而してウエスレーは二月二日其友ブラックウエルに送りたる書中に「愛爾蘭に於ても英國に於ても主の事業日々増進しリーヅのみにても會友の數百八十人より五百人に上れり」と云へり

チャールス等非行者を集めて一會を組織す

迫害

チャールス、ウエスレー及びチャールス、ペロチットハ愛爾蘭に在ると既に六ケ月なるがモレヴィヤン宗徒がスキン子ルス、アレイの會堂より放逐さるゝに及んで其會堂を借りて之を使用せり、彼等は又テレルス、パスに赴き安りに怪ふ者暴飲する者竊盜する者安息日を犯す者等より成り立つ一の會と設け會員凡そ一百名を得たり、アスロンに於ては暴徒等ジョナサンヒーレイを馬より引き落し棍棒にて之を打ち將に小刀を以て殺害せんとせしが一人の婦人家より走り出でゝ彼を助けしが爲に僅ふ死を免かれたり此時周圍は皆羅馬教徒を以て圍繞されしが一隊の騎兵出で來るに及び暴徒等四方に逃しヒーレイは全く救いるゝを得て右婦人の家に携へ往かれ而してチャールス、ウエスレー血ゐ途されたる其友を其家に介抱せり、チャールス、ウエスレーは市場に集會したる二千人以上の大衆に向て墳頭せる空屋の窓より説教し而して豪膽にも徐ろにヒーレイが血痕ある戰場に進を勝利と讃美の歌を歌へり

ウエスレー愛國に向ふ

言語の混亂を歎ぜ

ウエスレーはブリストルの事務を終り二月十五日愛爾蘭に向て出發せしが天候惡くして渡航をるを得ず漸く三週間の後に至てホーリーヘッドを出帆せり氏ゞ旅中は風烈しく雪深かりしも往く〳〵會堂講義所又は路傍の旅宿に於て説教せしのみならずピルス及び其他數ケ所に於てハ野外夥多の聽衆に向て説教し其讃美の聲四圍の山谷森林に響けり氏一度ウエールス語の禮拜に出で后記して曰く「言語混亂の不幸實に大なる哉其結果眞に愛ふべし空の鳥野の獸皆己が族類の語を了る只人は其兄弟の語を辨ふる能はず」とウエスレー遂にロベルト、スウヤンデルス及びメリトン氏と共にホーリーヘッドを出帆し三月八日ダブリンに着せり時にチャールス、ウエスレーは會衆を集めて講義所に在りしが衆ウエスレー等を見て大聲歡呼し其聲神を讃美するの聲と合して堂内恰も湧くが如く爲にウエスレー

ロンドン年會

ウエスレーキングスウードの學校を開く

ゝ一時何をも語る能はざる程なりき○是ゝ於てチャールスゝ英國に歸りウエスレーは十週の間愛爾蘭ゝ滯在せり然るにロンドン諸會の首長等は此長き不在を喜ばざりしが氏ゝ之に答て「忍耐すべし愛爾蘭ゝ卿等に償ふ處あるべし」と云へり

ウエスレーゝ五月の末英國ゝ歸り六月二日より三四日の間ロンドンゝ於て年會を開けり會する者二十三人共中凡そ六人は教師三人は會計吏にして他ゝ定住傳道者及びハウォル、ヘリスなりき、議會の始めゝ當り本年會ゝ於てゝ教理を考査するの暇なきを以て單ゝ條例に就て議すべきとを定め而して嘗て議定したる何處にても共傳道せる處にゝ必ず會を組織すべしとの箇條を固く守るべきと及び富貴なる會友を訪ふが如く貧賤なる會友をも訪ふべきと又祈禱長きゝ失するの傾きあれゞ爾後特別なる場合の外公祈禱は八分時若くは十分時ゝ過ぐべからざると等を議定せり、年會の數日後ウエスレーはキングスウードの學校を開かんが爲に其兄弟と共にブリストルに赴けり、氏ゝ既ゝ一千七百四十年に於て一の學校をキングスウードに創立せしが今回の學校はマイルスが其年代史に言へる如く全く新設ゝはあらずして只舊學校を增築したる者なり又我儕は該年代史ゝ由て一千七百四十年に創設しゝる學校は專ら坑夫の兒童を教育する爲めなりしも各所のメソヂスト信徒等は其兒童を此處ゝ送りて教育せしとを知る是決してウエスレーが初志にあらざりしも氏は素より之を禁ずるの意なきのみならず更に傳道者等の兒童を教育するの法を設くるの必要を感ぜり蓋父は常に家ゝ居らず母は多くは其任に堪へず又會の資金は彼等を寄宿學校ゝ送るに足らず故にウエスレーは其等の爲ゝ自ら一の學校を設けざる可からざるとを覺知し從來れ學敎を增築し以て其需要に應せしなり氏は其頃或匿名の一婦人より建築費として八百パウンドの金を得たり、從來の學校(即ち坑夫の兒童を教育そるの學校)は依然之を繼續して六十年以上に及びしゞ其間之ゞ費用は皆キングスウード會より支辨せり、然るにメソヂスト教會の記錄中ゝ有名なる夫のキングスウード學校とい此年即ち一千七百四十八年ゝ他の兒童の爲に增設したるものゝして該校の記論は

北部巡回

メソヂスト教派の存在する限り決して消失するとなるべし、ウエスレーが此學校の爲にトしたるキングスウードの地は甚だ閑靜なる小丘にして東北共に閉塞し而して廣濶なる園庭を包有せり學校は教員僕童の外凡そ五十の生徒を容るゝことを得べし而して別に一室と讀書室を設けてウエスレーの用に供せり

六月二十七日即ちキングスウードの開校後三日よりして氏ハ英國の北部巡回を始め到る處に於て説教し七月九日(土曜日)ニューキヤスツルよ着せり氏は此處及び近傍の諸會に於て大に會友の增加し且つ信者の信仰活潑よりして生氣あり其狀況大に前日と異なる者あるを見たり、氏は此地方ゟ留まること五週間餘にして再び南方に向て出發し而して第一日の旅行中ストックトンの市場近傍に於て粗莽なる大衆に説教し又ヤールムの市場及び降雨中オスモザレイの街頭に於て説教せり夫より進んでウエーキフヒールドに到り定住傳道者フランシス、スコットの客となれり、此人は已が細工場の一部を以て其説教所となし居たり、ウエスレーは尙進んでハリファクスゟ到り市場に於て怒濤の如く鳴動する無數の人民に向て説教せんとせしが或者金錢を群衆中よ投じ以て非常の混乱を來せしのみならず或ハ泥土を投じ或は石を以て氏を擊ち(此時氏ハ面部に負傷せり)毫も平靜ゟ至るの狀なきを以て遂に其處を去りサルトルヘッブルよ近き野外に退き而して已に從ひ來りし者と共に歡喜と讃美とを以て一時間を送れり、夫より進んでブラッドフオルドに到りしゞ此處に於てハ一人の教師の外更よ妨害を加ふる者なゝりき

ハウオルスのグリムショー——稀有の人物

氏はハウオルスの會堂よ於て(グリムショーの祈禱を以て)説教を始めしハ午前五時なりしが聽衆は既に堂内よ充滿せり、ハウオルス會の帳簿ゟ「一千七百四十八年一月十日ウヰリヤムダルニーの爲めに長靴一對を購求す代價十四シリング」と記載しあるを見て我儕ハ此時既に此地にメソヂスト會の組織され居ることを知る、グリムショーはウエスレーゟ如き一個のメソヂストの徒よして此二人の異ふる所は只前者は會堂を有し後者は之を有せざりし一事のミグリムショーはハウオルスの傳道者たると既に六年よ

して其會堂には常よ聽衆充溢せり氏は近傍の諸小村よ於て毎週十二回乃至三十回の說敎をなせしが其會衆は多くは粗莽の徒ありしも氏が熱心に動かされて改悔せし者數百人に及べり氏ハ勞働を好み主の爲めには如何に困難なる生活をも喜んで之をなせり、或時ハンティングドン貴婦人の客となり又或時は己が家は旅客の宿泊に供して己は乾草棚よ眠り、天候の良否ふ關せずして山上の各所を徘徊し屢々雨に濡れ霜よ凍へ定まりの食事をなさず又屢々一片の麵包皮を以て僅かに飢を凌ぎ以て他人の救靈に鞅掌して嘗て疲倦するとなく爽快なる精神を以て其救主なる神を讚美しつゝ己が義務の大路を進行せり、氏は平常極めて質素なる衣服を着し時に甚だしき弊衣を纏へり氏は只一の外衣と一對の靴のみを有せしと屢々なりき是れ決して奇を好むの心より出でしものに非らずして貧者を惠む慈惠心の結果たりしなり、氏は强健なる腦力を有し特に其ケンブリッヂの敎育は氏をして普通の傳道者の上に位せしめしも氏は粗野なる聽衆の爲に自ら下りて凡俗なる風を取り其說敎よ於ても時に或は野卑に過ぐる嫌ある程よして其說敎の体裁い夫のアルベルト、デユーラルが畫き出だしたると毫も異なる處なし、氏が祈禱の力い實に驚くべき者にして其足い地よ而して其眼は天にある者の如くなりき、ウエスレーが補助者の一人として氏は組々を訪ひ通券を配與し愛餐を行ひ四季會に出で巡回傳道者等を宿泊せしめ且つ彼等をして其家の廚房ふ於て說敎せしめたり、氏には屢々法外なる擧動ありしも尙常よ誠實よして熱心且つ敬虔の德に富めり又其容貌は傀偉よして强健其學室は穹蒼の下山谷の間にありたり、而して其奔走勞動の疲勞い神聖なる思念及び神との交通を以て之を醫せり、氏は一千七百六十三年四月七日に世を逝りしゞ其臨終の言中左の如き語あり「予は今地よ於て受け得べき最高度の福樂を有し又予が天國に到るの確認い恰も既に其所に到り居るゞ如し、」氏は其よ稀有の人物ふして其常に愛誦しさる「我生くるはキリストの爲め又死するも我益あり」との聖語い實に氏よ於て其なりと謂ふべし、宜なる哉人々の此語を以て氏が棺に書職したるや○爰に我儕が記臆に留むべき他の一人物あり即ちハウオルスの近傍カイレイ

のトーマス、コルベックおしして當時年二十五氏は忠實勤勉なる定住傳道者にして久しく其職を執り而して其芳名は今尚西ヨルクシール諸山の間に馨ばしゝ、氏ハグリムショーと共に巡回したる忠實なる傳道者の一人にして其勞力に依りメソヂスト教派はカイレイ近傍れ諸村に傳播せり、氏が家はウエスレーの室家にして又巡回傳道者等の休憩所なりき、氏一日熱病の人と共ゐ所り爲に共病毒に感染し遂に一千七百七十九年十一月五日眠に就けり

ウエスレー法庭に引致せらる

有司とウエスレー

ウエスレーハウオルスを去りグリムショー及びコルベックと共ゐコルチ近傍の一村ラフリーに赴き説教を爲せしゐ代理警官あり棍棒を手ゐしたる一群の頑民を率ひ來りウエスレーゐ向て氏をバローフオルドの法廷ゐ携へ行かんが爲ゐ來りしことを告げたり是に於てウエスレーハ彼と共ゐ往きしが途にして一人の悪漢はウエスレーゐ面部を歐打し一人は杖を其頭ゐ投げ付け又他の一人は甚く氏を呪詛し且つ棍棒を擧げて一擊の下に殺さんと威嚇せり、彼等公館ゐ到り有司ハウエスレーゐ向て再びラフリーに來らざるべきことを誓約すべしとの要求を爲せしがウエスレーは之に答へて斯る誓約をなさんよりは寧ろ自から頸を刎ねべしと云へり、ウエスレー有司の前に留め置かるゝこと二時間餘にして遂に赦さる、然るゐ前に氏を携へ來りし代理警官及び頑民等は氏に尾して來り或は暴言を吐き或ハ呪詛し又石を以て氏を擊てり氏は頑民等の爲に打ち倒され且つ再び公館に引致せられたり、グリムショー及びコルベックも亦最も殘酷なる逆待を受け全身汚泥を以て蔽とる、又ウエスレーと共にニコーキヤスツルゐり來りさるマックフオルド氏は頭髪を取て曳かれしゐ此時受けし傷害は終身快復することなかりきと云ふ又此際此に居りしメソヂスト信徒の中或者は棍棒を以て擊され或者ハ泥中ゐ踏み込まれ他の一人は十英尺乃至十二英尺の懸崖より河中に跳べしめらを其他の人々は身を脱して瓦礫雨飛の間を逃走し以て其命を全ふせり、有司は凡て是等の事を見聞したりと雖も毫も停止せざるのみならず却て斯る殘逆なる所爲を喜びたるが如し

他の迫害

ウエスレーは斯く往く々々道を宣べ傳へ九月四日に至りてロンドンゐ

ウエスレーブリストルの會友を物法す

歸着せしが其所に留ること一週日にして九月十二日再びコルンウォールに向て出發せり、セント、ジョスト會は會友百五十人を有せしが其中百人は正しく神の光の中を行く者にてありき、氏い夫よりブリストル會を査察し凡て不注意なる者及び故意に執拗に毎週の集會ゐ出るとを拒む者を除き爲に九百の會友減じて凡そ七百三十人となるに至れり、十月十五日ロンドンに歸り年末に至る迄其地方ゐ留りしが其間暫時ウインドソル、ワイコム及びレイに赴き又ワンヅウオルスに於て殘酷なる迫害の中に在て尙神を求め之に事ふることをなせる少數男女の爲ゐ說教せり、氏は又著書の爲ゐ多少の時日を費やせり氏い既ゐ「基督教文庫」なる者を出版するの企圖をなし居りしが此事に就きエベチゼル、ブラックウエル氏ゐ左の如き書翰を送れり

「基督教文庫」出版の企圖

「拜啓小生い日頃書籍出版の存意にて有之候ゑ其書籍は只に我等が既に出版したる者のみならず英語の書籍中最も善良且有益なる者を擇採し之を一層大なる文字を以て(又一層善良なる紙を用て)出版し六十卷乃至八十卷を以て一組となし以て神を畏るゝ人々ゐ完全なる文庫を與ふるの目的に御座候尤も各卷共に只百冊宛出版するの豫算ゐてダウンス兄此事務を擔任するとと相成り活版器械、活字、紙等手に入り次第直に始むる積りに御座候、小生は多くの人々が斯る企ての成功を喜望そるとを信ずるのみならず自身既ゐ許多の歳月を送り去り何時何人も働くとを得ざる夜の來るやも計られざれば一日も早く之を始め度存候敬白

ニユーキヤスソルに於て　ジョン、ウエスレー

一千八百四十八年八月十四日

是れ實ゐ大膽なる企圖と云ふべし氏は今既ゐ之ゑ材料の準備ゐ着手し翌年ゐ至りて其事業を始めたり、ブラックウエル氏いロンドンロンバルド街の銀行株主ゐして其實扨實直なるが爲ゐ屢々「粗金剛石」と綽名されしも亦最懇切にして且つ最も價値あるウエスレーが益友の一人にてありしなりリユーイシヤムゐ於ける氏が別莊いウエスレーが書を著述するに當り常に退居せし所にして一千七百五十四年氏が大病も此家に於て療養せしなり又氏い貧民救助の爲め巨額の金員をウエスレーゐ托するを常とせり

二人の交情既に斯の如くありしを以て僅少の資力を有するウエスレーが斯る大なる事業を始むるに當り先づ其資力ある朋友ゞ之を贊成し資力を投じて此事業を助くるに意あるや否やを知らんが爲め斯る書翰を送りしは敢て怪むべきことにあらざるなり

此年に於けるウエスレー及び其兄弟

一千七百四十九年　四十六歳

ウエスレーは此年の四ヶ月をロンドンと其近傍の諸邑に費し又殆んど四ヶ月を愛爾蘭に十週をブリストル、ウエールス及び其周邊の諸邑に二ヶ月を北部巡回に費せり又其兄弟チャールスは專らブリストル、ウエールスロンドン及び其間の諸邑に此一年を費せり○ウエスレーは四月十六日(日曜日)午前三時愛爾蘭に上陸し其日ダブリンメソヂスト信徒の爲に三回の説教を爲し此處に留まること二週日にして此國の諸會巡視の爲に出發せり當時ダブリンの會友は四百人より四百五十九人に增加せり、各地方を巡回すること九週間餘にして七月五日ダブリンに還り二週日の後英國に歸れり○氏は八月二十八日英國北部の旅行を始めしゞ其ニューキャスツル八日の滯在中の事につき左の如く記せり「選會(セレクトソサイチイー)に於て此所に未ゞ嘗て見ざる愛の熱火起れり我儕此時の兄弟間の愛情は之を口に陳ぶると能はざりき其祈願の精神凡て神の攝理に喜び從ふの情況又神は決して些少れ嘉物をも我儕より取り去り給はずとの確信等實に優美の風我儕の中に充溢せり」氏はブリストルを經てロンドンに歸れり

ロンドン年會

此年の年會は十一月十六日よりロンドンに於て開きしが其主要なる問題は國中の諸會を一致連合せしむることにして又ロンドン會の會計吏等ゞ衆人の爲に互に相謀ることを得んが爲に其權を彼等に與ふる事をも議したるが如し年會の後ウエスレーは執筆の暇を得んゞ爲にショールハムなる其友ペロチットの家に退き居ると凡そ二週日にしてリユーイシヤムに赴き一週の後ニューイングトンに到り其處に又一週日を費やせり

キャントルベリーに於けるウエスレー

一千七百五十年　四十七歳

ウエスレーはロンドンに於て朝四時の説教を以て此年を迎へ而して月末に至りキャントルベリーの會を訪へり始めメソヂスト教派のキャントル

佛語文典の著述を始む

べりーに傳いるや頑民及び教會の牧師等より大なる妨害を蒙り而して或者いウエスレーに就て左の如く書せり「彼は厚顏無恥の惡漢よして其口わは不敬冒瀆の語を充たせり彼は一箇の毒虫ふして又基督教を僞はる者其愚痴の妄談は彼が過失の最も小ある者ふり彼い暗界天使の成肉、彼と其兄弟とい只に人の常識（コンモン、センス）を滅却する者なるのみならず又人の靈魂の殺害者なり彼等い跛馬の繩渡に不適當ふりとして捨てらるゝが如く詩人としても尙放棄さるべき者なり」ウエスレーロンドンに歸りヘイスの副教長（ウィカール）チヤールス、マンニング氏と共に二月四日の安息日を守り其日氏が會堂よ於て說教せりウエスレー記して曰く「僅か一二年の間に此所は著しく變化し往時會友の教會を去るにかへて今い許多の里數を隔つる周邊の各所より人々會堂よ集り來りて午後に於ても尙午前よ於けるが如く會衆堂內に充滿せり」と、二月廿七日氏いブリストルよ向て出發し其所及びキングスウードに十七日と費せしが其間に佛語文典の著述を始めたり、毎日午后四時わ各傳道者を會し、又銳意他の兒童を惡風に誘導したる一小兒をキングスウード

ブリストル會の退歩

ウエスレー愛國よ向ふ

路傍の一茅舍に入り論理書を翻譯す

學校より放逐せり、當時キングスウード會は停滯して更に進まずブリストルに於ては是より一層惡しき狀況を呈せり彼等は活潑よして氣力ある傳道者なきを怨やき而して會中一般死したる有樣なりき、ウエスレー記して曰く「我儕い實に此會の爲よ深く慚悔せざる可からず昨年は入會者の數百人に餘りしが今年は殆んど百人を失へり斯る衰頽は此會の創立以來未だ嘗てあらざる所なり」と

氏は三月十九日クリストフオル、ホップルと共わ愛爾蘭よ向て出發せしが四月六日迄其地に達することを得ざりき其旅中ブレックノックに到るの際ウエスレーの馬轉倒せると二回、人馬共に無害、又ウエールスの諸山を越せるよ當り雷に降雨の止むことなかりしのみならず風勢激烈よして殆んど馬上に在るを得ざる程ありきウエスレーは路傍の一小茅舍に三四時間留まりアルドリッグの論理書を飜譯せり、ウエスレーホップルの二人は三月二十九日に至りホーリーヘッドより乘船せしが風強くして進む可らず海上よ惱まさるゝこと二十二時間よして其出でたる港に復へれり其後再び纜を解き

愛國各地を巡回す　リチャルド、ロイドとウエスレー

四月六日難なくダブリンに着せしがウエスレーい其地ゑ留まること十三日にして各地巡回の途に就けり○ラスコルマックの教師リチャールド、ロイド氏ハ一年前にウエスレーの其會堂に於て説教することを許し已も亦大に其説教ゑ耳を傾けしが此時も亦氏を引て其會堂にて説教せしめたり然るゑ他の教師ハ之を監督に訴へ監督ハ首執事デヴィス氏ゑ命じてロイド氏ゑ其地若くハ近傍の監督より任命されたる傳道者に非ざれば其教會ゑ於て説教せしむ可らずとの命令をなさしめたり是に於てロイド氏は七月四日長き答書を認めて監督ゑ送りしの其中に氏ハ左の如く云へり

ロイド監督ゑ告訴せらる

氏の監督ゑ寄せたる書翰

「ウエスレー氏が當教會に於て説教したることハ事實ゑして小生ハ同氏はオックスフオルドリンコルン大學の學士會員にして其地の大學ゑ於て説教することを許され且ロンドンの諸教會其他英國の各地方及びダブリンに於て説教したる人なるを以て當教會ゑ於ても亦其説教をすることを許して不可おき事と思惟し居たることゑ御坐候……コルク其他此國各所の暴民等ハメソヂスト信徒をして遂に政府の保護を請ふの止を得ざるゑ至らしめ而して其中有福なる人々は迫害を避けて英國に移住せんとて其準備をおし居り申候の教會の會員等は教師等が之(迫害)を奬勵したりと想像し我等の教會を去らんと決心する者數多有之候故ゑ若し今のまゝゑて打過ぎおゞ久しからずして教會には只厚信者のみ殘るゑ至らんかと存候、現今宗教は一般ゑ甚だ衰微し僅に其外形を見るのみゑ御坐候が世の腐敗したる實ゑ惡魔の支配そることはウエスレー氏の説教(特ゑ教會ゑ於て)するよりも勝れりと思惟するに至り申候」

監督の答書

同日監督は左の答書を送れり

「拜啓足下が己が講壇ゑ於て説教せしむべき人の適否を識り且つ他の教師等ゑ不快を與へ或は愚民等に騒擾そるの機會を與ふるの如きとい之を避くるの智慮を有せらるゝことは小生の深く信じて疑はざる所に御坐候敬白

一千七百五十年七月四日　クロインゑ於て　ヲー、クロイン」

確乎たる定論其功を成さゞるの時に當てゝ柔軟圓滑なる言辞却て功を奏するが如し、ウエスレーはラスコルマック會堂に於ける説教は此時を以て終とす、氏は五月十九日ラスコルマックを去てコルクに赴き翌朝(安息日)八時ハンモンドの低地に於て夥多の人民に説教せしが彼等ゝ深く注意して其説教を聽けりウエスレー曰く「斯る靜粛にして且整然たる會衆は英國又は愛爾蘭の何れの會堂に於ても予が甞て稀に見たる所なり」と、氏は其夜再び其低地に於て説教せんと定めたりしも午後ゟ至り市長クローン氏より最早愚民の暴動するゟきと及び已れ自らウエスレーの爲に準備すべきとの報知を得たれゞ氏は其厚意に背き市長に不快を與ふるを欲せず預定の低地説教を止めて其夜は市内の講義所に於て説教するとゝなせり然るゟ氏が説教を始むるや否や市長ゝ村の鼓手及び許多の暴民と共に來りてウエスレーが説教の間終始大鼓を打鳴らせり而してウエスレー講義所を去るに當り暴民等に圍繞せられしが傍に一士官の立てるを見て之に國の平和を維持する爲ゟ此暴動を鎮定せんとを請ひしに士官は之に答へて「予ゝ之を爲すの命を受けず」と云へり、依てウエスレーは殘暴なる群衆の中を通り瓦石雨飛の間ゟゲントの橋を越へゼンキンス氏の家に入れり、又ウエスレーと共に會衆中ゟ在りし他の人々は一層殘酷なる待遇を受けジョーンス氏の如きは全身汚物を以て掩はれ殆んど奇跡ゟ由て其命を全ふするを得たり、翌日ウエスレーはバンドンに赴きしがコルクの頑民等ゝ其午後大なる隊伍をなして進むと四時間而して后ウエスレーが像を焚けり、次日即ち五月廿二日鼓手及び乱民等脂製蠟燭商ジョン、ストックデールの家を襲ひしが(彼等は凡ろ一年前ゟ殆んど彼を殺害せんとし而して其妻の如きは最も殘忍なる待遇を受けたり)前の市長命を受け一隊の兵卒を率ひ來り只「我一度二度三度汝等ゟ各其家に歸るべきとを命ず」と云て兵卒と共ゟ去り行けり、頑民等は素より明かゟ市長の意を了知せしを以て直に進んで悪くストックデールの窓を毀てり、五月二十三日是等暴悪なる頑民は尚市中を徘徊し凡てメソヂスト信徒を逆待し、且つ之を殺し其家を破壞せんと恐嚇せり廿四日ゟ至り彼等は再びストックデールの家を襲擊し窓ゟ釘付し

追害

ウエスレーハンモンドの低地に説教す

三人の婦人一敎師を論折す

る板を毀ゐし窓樣を破壞し許多の商品を毀損せり二十五日ローゼル、オ、フエロールは公立両替所ゐ廣告して若し暴行をあす者あらば己を其首領となりて凡て斯る僞善者等を宿らしめさる家を破壞すべしと云へり

此暴動の間ウエスレーは障害なくバンドン邑ゐ於て說敎せしが二十六日即ち土曜日れ夜ゐ至り氏ゐ大に其說敎を妨げられさり此時來集する者平時に倍し氏が說敎を始めてより未だ十五分時を出でずして酒ゐ醉ふたる一敎師ゐ大なる杖を携へてウエスレーが傍に坐を占め種々の惡口を始めたり然れども彼が未だ十言を發せざるに三人の剛膽なる婦人ゐ彼を家ゐ引き入れ理を以て之を論折し終ゐ園庭より遣り歸へせり而るに此亂醉敎師其庭に於て豫てウエスレーゐ喜び聽ける一婦人ゐ戲れんと爲したれば其婦人ゐ力を極めて身と脫し痛く彼を拳打せり斯くて彼は三人の少壯なる同友を殘して其處を去り行きしが其三人の者(皆夫の敎師の樫棒より遙かゐ危險なる短銃を携帶し居たり)も亦聽衆中の或人々ゐ捕へられ場外に出されたり最後に現はれたる一武夫ゐ其勢最も猛烈なりしが邑の屠牛人(メッヂストに非ず)恰も牛を待ふが如く一二の好擊を其頭ゐ加へ以て武夫の勇氣を挫けり、ウエスレー曰く「斯くして予は徐かゐ予が說敎を終へたり」と、次日即ち五月二十七日(日曜日)ウエスレーバンドンゐ於て三回の說敎をなし而してコルクの市長に一書を送りしが其書の結束に左の如く云へり

ウエスレーコルク市長ゐ書を送る

「小生は神を畏き王を尊び凡ての人と平和を保さんとを熱望する者ゐて決して自ら好んでコルク市の官吏敎師又は市民等の情意を害ひしと無之又只一事の外何をも其人々ゐ願望する所無之候其一事とは即ち其人々が小生を待遇するに(一ケの敎師として又は紳士又は基督信徒としてと云ふ中さず)只一ケのユダヤ人一ケのトルコ人又は一ケの異敎徒として受け得べき程の公義と人情とを以てせんとゐ御坐候」

ウエスレーい今ダブリンに向て出發せしが一日い只一二時間を除くの外朝五時より殆んど夜十一時に至る迄馬上旅行をあし而して僅に五時間の後再び其書てゐせしをなき長旅行をゐせり即ち其日行くと凡そ九十英

一日九十英里を往く

里まして夜半エイモに着し旅宿に投せんとせしに主婦之を謝絶せしのみならず四犬を放て氏を窘しめたり、氏はダブリンに留まること僅に二日にして再び此國各地の巡回を始めたり、氏記して曰く「六月廿一日―予はクロースランドに返へり共夜少數の熱心なる人々に説教せり、嗚呼予若し來世を知らざりせば誰か予を引て大なる都邑に出し得る者あらんや予い此繁忙なる身の餘生を閑靜なる退居の中に送るを遙に喜ぶなり」と、七月十四日ダブリンに歸り八日の後英國に向て出帆せしが其前日エベネゼル、プラックウエル氏に宛て左の書翰を送れり

来世を信じて劇務に甘んぜ

一友に寄せたる書翰

「拜啓過る二三ヶ月の間は小生が嘗て經驗せざりし非常なる事多のみ遭遇致し候即ち一方に於て非常なる賛成の晴天を見るかと思へば一方に於ては非常なる反對の怒濤に圍まれ實に愛爾蘭人は一般に其性質の向ふ處に際限なきかと思はるゝ程にて其愛情の非常なると憎惡の甚烈なるとに至ていい歐州中之に比すべき人民は他に之れあるまじと思いれ候

メソヂストの傳道者の一人にても生存し居る事は是れ即ち神の世を支配し給ふ明かなる証據に御坐候、生等は實に何處に於て安然なるべきやを知らざる者にて一二週間前の如きは全く平穏の時に於て二十人ばかり惡漢等リメリックの近傍に於て我が傳道者の一人と彼と同行(乘馬)せし數人を逆殺致候此時彼(傳道者)い暴徒の巨魁に向ひ彼等は何をなさんとするかを尋ねたるに彼は徐かに「汝等を殺さんとするなり」と答へ直に短銃を差し向け二三發放射致候がフエンウヰック氏は其馬に鞭て疾く馳せ去りしが爲に敵の氏を追蹤して放射する者ありしも遂に及ばずして止み申候、斯く彼等は此一行三人を殺して其所を去り申候が近傍の有司等之を不當なりとし右暴殺者等を逮捕致候、元來愛爾蘭に於ては人殺しと輕罪なるも此度の暴殺者は流罪に處せらるべしとのことに御坐候敬白

ダブリンに於て　ジョン、ウエスレー

愛國に於ける傳道事業に滿足す

一千七百五十年七月二十一日

然れども概して愛爾蘭に於ける傳道事業はウエスレーに滿足を與へた

一千七百五十年

り氏記して曰く「予い神が大ふ我傳道者等を惠み給ひしを見且つ許多の罪人ゞ其惡しき道より救ひ出されたるを見て大ふ滿足せり其救いれたる者の多くは人々の中ふて最も惡しき聲名(キヨヘ)ある者ゐして又羅馬教より轉じたる者も多くありき予い若し羅馬教會の教師等ゞ專心之と妨碍するとなかりせば轉入者の數は之より遙かふ多かりしならんと想像す」と、ウエスレーがダブリンよりブリストルに航そるの際い海上最も危險を極め風雨雷鳴同時に至り加ふるに四方暗黑にして怒濤山をなし加之積荷なく又船重(船底の砂石)少おきを以て船の動搖實に恐るべく殆んと其爲そべき所を知らざりき、此時ウエスレーとクリストフオル、ホップルい大能者に祈禱をなせしが暫くして風止み海穩かに雲晴れて七月二十四日難ゐく英國ふ着するを得たり

ウエスレーブリストルに到りて六日間其地ふ留まりしゞキングスウードふ於ける人數の非常に減じさるを見て大に失望せり氏記して曰く「予は或人、如何にして予が企圖の全く地ゐ落つるを防過すべき乎實に許多の困難は絶へず之に付き纏へり」と、七月三十日氏はセプトン、マレットに向て出發し暴風劇雨ゐ冒浴すること五時間總身雨に濕へり次日シヤフテスベリーに着し夥多の群衆ゐ向て說教せしが一人の妨害を試みる者なく笑ふ者なく只聽衆中多くの涙を流す者と言ふ可からざる歡喜を以て滿さされたる者とを見さるのを、氏は其所より進んでコランプトンを經タイヴオルトンに赴き市場ゐ於て說教せり此地い其兄弟サムエルの死灰の在る所にして氏には聖地たるなり、氏此地を去てコルンウオールに赴きしが其地の諸會能く規律を守らざるより皆大なる損害を來たせしことを發見せり諸會中最大なるいセント、ジョスト會にして此會い他會に比して最多の信者を有せり

コルンウオールに於て始めて守夜會(ロッチナイト)を開きしはウエスレーが此三週間の滯在中にありしなり

ロンドンのメソヂスト信者等がスピタルフヒールヅのグレイ、イーグル街なる佛人の會堂を所有するふ至りしい此年にてゐりしがウエスレーは九月二十一日此會堂に於て守夜會を開き而して左の如く述べたり「予い屢々斯の如き

集會に於て神の奇異なる攝理に驚けり予は多年の間斯る集會をなせしが深夜人々諸方より來集するよも拘はらずロンドンに於てもブリストルよりも於ても又ダブリンよ於ても未だ嘗て一人の之が爲めよ害を受けよる者あるを聞かず」、ロンドンふ留まること數日よして九月二十四日再びキングスウードに赴き壹ヶ月の間其所に留まりて學校の爲よ書籍を準備し諸書を再版せり氏い此時英國歷史羅馬略史を著述し又凡そ二年前ふ着手したるケーヴ氏「初代基督敎」の略本殆んと脫稿せり、十月二十四日ロンドンに歸り暫時ウインドソル、キヤントルベリー及びレーに旅したるの外此年の剩餘を皆ロンドンよ於て費せり

ウエスレーキングスウード學校の爲めふ書籍を準備す

此年よ於けるチヤールスホイットフヒールド及びジョン、ウエスレー

一千七百五十一年　四十八歳

一千七百五十一年は最も困難なる年なりしが夫のメソヂストの將帥等い尙斷へず活潑なる運動をなせり、チヤールス、ウエスレーはロンドンふ四五ヶ月ブリストルに同じく四五ヶ月を費やし殘餘の時日を中央諸郡及び北部の諸會巡視に費やせりホイットフヒールドは初の二ヶ月を諸都府よ次の三ヶ月を英國西部及びウエールスよ二ヶ月餘を愛爾蘭及び蘇格蘭に費やし而して八月に至り米國に渡航せり、ウエスレーは八ヶ月を各地巡回よ費し餘をロンドンよ於て費せり

爰よ我儕はウエスレーの婚姻を記述するの時期に達せり此事は此年の二月中にありしも其時日は判然ならず「ゼントルマンス、マガジン」雜誌名い其結婚欄内に「二月十八日メソヂスト傳道師ジョン、ウエスレー氏は三百パウンドの歲入を有するスレッドニードル街の一紳商の寡婦と結婚す」と記し「ロンドンマガジン」には「二月十九日ジョン、ウエスレー氏スレッドニードル街の富裕なる寡婦ヴアゼル夫人と婚す」と記せり、該婦人の財產は一萬パウンドにして全く己と其四兒の爲よ年三分の利を以て他に貸與せりワットソン氏曰く「我儕い該婦人い聰明の人ありしを知る今遺存する夫人の書翰い即ち之を証する者なり又ウエスレー氏が己が侶(コンパニオン)として該夫人を選びよることにより我儕い夫人がウエスレー氏よ氏の幸福を增す凡ての品性を備へたる者と見へしことを知る」と○是れ實よ不幸なる結婚なりき夫の婦人の

ウエスレー結婚の理由を述ぶ

ウエスレーの縁談を容れたるは多少驚くべき事なりと雖もウエスレーの其縁談をなしたるは一層驚くべき事ありと云いざる可からず、ウエスレーが一教派の首領たるの地位及び其權力は恐くは夫の貪名婦人を惑はしたるなるべしと雖もウエスレーにして其已を識り又人の性質を識るとの斯く少なかりしい實に我儕が驚異に堪へざる所なり是ふ由て之を觀れば氏は婚姻上の明識を有せざりしや明かにして安靜ある家居の眞味い氏之を了知せざりしなり實に氏が斷へざる巡回は氏をして家庭の幸福に最も必要ある注意をおすの暇おからしめたり氏が旅行の常習、到る所に於て氏を訪ふ人の多かりしと、及び氏が博き交際等は結婚したる身の幸福の基礎を築く彼我の親密なる交通互ひの打釋け及び信任等の事を多少減却したるや明るおり而して氏若し已が地位ふ適合そる婦人を得て之と結婚したらんにい此不幸は左程甚だしからざりしなるべしと雖も事此に出でず氏は國中他ふなき程の不適當なる婦人と婚せり、ウエスレー記して曰く「ペロ子ット氏の詳細なる答書により予は明かふ予が結婚すべき者なるとを認識す、多年の間予は獨身の生活をおせり是れ獨身なるは妻を有そるより一層善く働き得べしと信じたればなり而して予は神の予をして斯く暮さしめ給ひしを謝す而るふ予は今充分予ゞ當時の事情ふ由り妻を娶る方更ふ有益ありと信ず」と

轉倒して脚骨を挫傷せ

ウエスレーい北部旅行をなさんと定めたりしが其出發せんと云ふる前日ロンドン橋を通過そるの際氷の上を踏んで轉倒ち痛く脚骨と脛とを挫傷せり醫師來りて脛を繃帶したる後辛ふじてセヴン、ダイアルスふ到り其處にて說教し而して其夜フアウンドリに於て再び說教せんとせしも傷所の痛苦ふ堪へずして之を止め直にヴアゼル夫人の住したるスレッドニードル街ふ移り一週日の間其處に留まれり、氏曰く「此週の一部分い祈禱、讀書及び談話ふ費し一部分い希伯來文典及び小兒の學課の著述ふ費せり」と斯く彼は其遭難の爲め北部旅行を爲すを得ざりしゞ此際途ふ其結婚式を舉行せり氏が遭難の日い二月十日の安息日ありしが次の安息日にいフアウンドリに移り其處ふて膝立して說教し次日若くは火曜日に於て已より若

膝立の說教をなす

ブリストル年會

きと七歳なる寡婦ヴァゼル夫人と婚儀を行へり氏い月曜日(二月十八日)に尙起つ能はず火曜日の夜及び水曜日の朝い共に膝立して說教せり、結婚の日より二週日を經て漸く乘馬し得るゐ至りたれど(未だ歩行するを得ず)新婦を後に殘こしブリストルゑ向て出發せり到着の後諸所の傳道者を集めて五日の間年會を開き而して左の如く云へり「予は傳道者の中福音の單純おるとより離れたる者あるを恐れて大に憂慮せしも共ゐ會談するに從て大に兄弟の愛を增進せり予い我儕が最初の敎理に對して種々の異論を聞くとならんと豫期せしも全く其事おく凡て一意一心なる者の如くなりき予は兄弟等れ缺点と思考せし事を腹藏なく淡泊に告げしが彼等は誠實ゐ之を聽き正當なる心と愛とを以て其忠告を受けたり、予は當年會に於て一人も不滿足を感じたる者なきのみおらず皆其受けたる慰安の爲に神を讚めて散じたるとを信ず」ウエスレーい年會の後三月二十一日ロンドンゑ歸り六日の後蘇格蘭ゑ向て出發せり氏は其日誌中ゐ左の語を記せり「予い若しメッチストの傳道者ゑして共有妻なるが爲ゑ一度の說敎を減じ或い一

一「妻を有てる者は有たざるが如し」

ウエスレーの結婚は一大過誤

夫人ウエスレーの巡回ゑ伴ふ

夫妻間の不幸なる情態

日の旅行を少なくするとあらべ如何にして神に答へ得べきやを知らず、此点に於ては實ゑ「妻を有てる者は有たざるが如き」なり」

夫れジョン、ウエスレーの結婚の如きい我儕の未だ嘗て見聞せざる所にして此結婚い氏が一生中に於ける最も大なる過誤の一なり、人若し四十八の齡に達する迄獨身の生活をなし而ゑて既ゐ一種の習慣(妻帶者たるゑ不適當おる)を形成し居たる者にてあらば宜しく終身獨身おるべし、特にウエスレーの如きい其使命の大且つ特異なる素よ妻を携ふるに不適當なりしなり、氏が結婚は之を勸めたるも惡く之に同意したるも亦惡し、之を要するに其結婚は甚だしく勿卒淺慮の所措にてありしなり○ウエスレー夫人は數週後のウエスレーが北部巡回ゑ伴ひしが如し、又八月ウエスレーと共にコルンウォールゑ旅し一千七百五十二年三月復び其女と共ゑウエスレーが三ケ月間の北部旅行に伴ひ諸ての艱難辛苦を共にせり

此時までウエスレー夫妻の間には別に甚だしき不幸を見るとなかりしも星移り物易いるゑ從て事情大に一變せり、一千七百五十二年十一月三日

ヴインセント、ペロチツトはチヤールス、ウエスレーに左の如く書き送れり

「予は實に事の大に憂ふべき狀態なるを認知す、ウエスレー氏の事業より悲むべしと雖ども最も憐れむべきは夫の不幸ある夫人なり氏等の難みい全く其源を異ふせり即ち一は天に在す慈父の懲戒にして一は己が苦ぎき心の直接の結果なり斯く幾多の日月を經過したる後ゑ於て尚全ト艱苦不調和の存するとは誠ふ悲むべきの極と云べし」、是れ其結婚後二十ヶ月以内の事にてありしが四ヶ月の後ふい夫人再びウエスレーと共ふ英國の北部及び蘇格蘭ゑ旅せり實に一千七百五十五年迄はウエスレー夫人は概ねウエスレーの旅行に伴ひしが其秋の頃より事情頓に一變せり其頃ウエスレー獨りコルンウオールに赴き其處より一束の書翰をチヤールス、ペロチツトに送りしが不幸ゑも其書翰夫の姝妬深き夫人の許に來り夫人は不正ゑも其書翰を開封せしが其中數行のレフエヴル夫人ゑ宛てたる語あるを見非常ゑ姝妬の情を激發せり、ウエスレーは又或時サラ、ライアンに左の如き書翰を送れり

夫人姝妬心を激發す

サラ、ライアンに寄せたるウエスレーの書翰

「拜啓去る金曜日にゝ愚妻種々烈しき悪口を云ひたる後再び小生を見じと誓て去り行き申候、其朝の書狀中に申し述べ候通り足下に書狀を送るとゝ宜きや否と自ら疑ふ程に思案致せしも祈禱に由て漸く其疑ゝ消散致候、然れども小生ゝ其書狀を其朝認めしをを悔ひ申候、其夕小生が講義所に於て說教し居たりゑ際彼れ小生が衣服を置きし室に入り小生が衣囊を探して其書翰即ち書き終りしのみにて未だ封ぜざりし足下への書翰を見出して之を通讀せしゑ其之を讀ひの際神は彼が心を碎き給ひ其以來彼ゝ小生が數年の間嘗て見ざる性質の者と相成申候實に神は私共相互の書翰往復ゑ就て充分なる答を與へ給ひしと存候」

我儕ゝウエスレーか斯る事ふ關する斯る書翰を斯る婦人に送りたるを恨む氏が旨意(コテイウ)と目的の純潔なるとは素より毫も疑ふ可らずと雖も其所作ゑ至ては辨護そ可らざる失行なりと云はざるを得ず氏は其妻の非常なる姝妬心ある者なるとを熟知したれば苟も其惡情を激成そるが如き舉動は須らく之を謹む可き者なりしなり、彼等ゝ再び相合ふたりと雖も毫も幸な

夫人の悪むべき所業

る有様なくして遂ふ一千七百七十一年に至れり、或時は夫人ウエスレーが書翰及び他の書類を取り、之を姦通の類証として活版に付し公衆ゑ示さんが爲めウエスレーゑ敵意を抱く者の手に付し、或時はウエスレーの書翰を取り之に不良の意味を含ましめんが爲ゑ自ら詞句を挿入し而して人々の許に往て之を朗讀し以てウエスレーの名譽を毀損せんと力め、甚しきゑ至ては斯く自ら詞句を挿入したる書翰を公刊して之を公衆ゑ示せしとあり彼はウエスレーが邑に入るゑ當りウエスレーと同車したる者の誰あるかを見んが爲ゑ屢々自ら百英里の路を往き、又或時ハ其情恰も烈火の如く激發し而して烈しく手を以てウエスレーを冒し其頭髪を取て之を引きしと往々なりき、ジョン、ハンプソンハウエスレーの親友にあらざりしも尚其子ジャックゑ向て左の如く云へり「予は一度殆んど人を殺さんとせり、予の愛爾蘭の北部に在りし時一日或家に到りしゑウエスレー夫人非常に激怒し居りしが夫人ハ今ウエスレー氏の頭髪を取て烈しく之を引きしものにて手にハ尚其引き抜きし毛髪を持ち居たり、予は之を見し時殆んど一擊の下に彼が腦と體とを分たんとせり」

ウエスレー亦過ちなしとせず

氏が其妻ゑ對する愛情

ウエスレー夫人ハ結婚后三十年餘にして一千七百八十七年十月八日七十一の齢を以て世を逝れり（其頃ウエスレーは英國の北部を巡回し居ゑり）○ウエスレーの結婚に關しては既に充分の記載をなせり只爰ゑ記憶すべきは其結婚が三十年間氏の生活ゑ特色を付したるとゑして此事の氏が複雑なる生涯中最も痛むべき事件の一なりし事實ハ我儕が宜しく注意すべきの要点なり、此事ゑ於てウエスレーハ過ちなしと云ふを得ず氏は已が妻とすべき婦人の性質を充分了知せずして匆卒に結婚し且つ其妻の嫉妬する婦人等に宗教上の書翰を送れり是等の点ゑ於ては氏ハ自ら其責を負はざる可らず、然れども氏が其妻ゑ對して愛情を缺ぎ又之を遇するに冷淡と隔心とを以てしたりとの事を以ては何人も氏を批難し能はざるべし人の性質を見るに鋭きチャールスは夫の頑硬ゑして惡性の夫人ゑ對して其兄弟が見はせし忍耐には何も勝るものあらざるべきとを云へり、ウエスレーの結婚後其妻に送りたる數通の書翰ハ後年ゑ至る迄保存せられしが我

夫人に對する婦人の批評

傳い其書翰に由て氏が最も濃かなる愛情を有したるとと若し幸にして適當の婦人と婚するを得たりせば氏は世に於て最も愛に富める良人の一人たりしならんとを知る、要するにジョン、ウエスレーの夫人い正氣の人にあらざりしなり、ジャクソン氏記して曰く「數十の夫人自筆の書類い夫人が性質の急激ありしをを示し且つ我傳は其に由て其智能の多少錯亂し居たるとを知る」と、是れ實に其奇異なる行爲の理由として該夫人が受べき最良の批評にして何れの点より見るも夫人は決してウエスレーの好耦(ルプミート)にあらざりしなり

北部巡回

今一千七百五十一年に復へりて記事を始めんに　ウエスレーい結婚后五週間にして英國の北部に向て出發し三月三十一日の日曜日をボルミングハムに於て費やし而して其會の無益なる爭論を誡め又説教をるに當り聽衆夥しくして會場い其半をも容るゝに足らざるを以て遂に屋外に出で之をなせり氏記して曰く「此地は大に其狀況を變せり先に予が此處に於て説教せし時は石の四方より飛び來るありしが今は若し些少の妨害をなす者あれば其者は説教者よりも尚危き運命に遇ふの恐れある程なり」と

始て蘇格蘭に趣く

四月四日ボルトンに着し理髮所に入て髭を剃りしが剃手剃刀を手ふしてウエスレーに謂て曰く「予い足下の爲に神を讃美す足下が先にボルトンに來りし時は予い邑中最も大なる飲酒乱暴者の一人ありしが一日來て窓より足下の説教を聽きし時神痛く予が心を擊ち給ひ遂に十二ヶ月前に全く改悔するに至れり」と○ウエスレーい此時始て蘇格蘭に向て出發せしが自ら毫も彼國に於て説教するの胸算ありしとを云へり氏は實に其地に於て氏が説教せんとを望む者あらんとは夢想だにせざりしなり然るにムッセルボローに着せし夕多くの人々來集して終始靜聽せり、翌日氏いエデンボローに赴きしが其邑は氏が是迄目擊したる都邑中最も不潔なるものありと云へり而してコローンも亦之と同樣なりしなり氏ムッセルボローに歸て午食を喫して又午后六時に説教せり氏い直接に人々の心に觸るゝが如き言語を用ひしも人々い仍ほ愛を以て其等の語を受容せり、此後他の傳道者此國に來て傳道せしも其結果い甚だ僅少なりき、夫のチャールス

ウエスレーの如きは蘇國人中ふメソヂスト教派の成功を見るの望を有せざりしと明かなり、メソヂスト教派はトウイード以北の地に於ては決して英國ふ於けるこの如き成功を見るとなかりしと雖ども然れども蘇國傳道を以て全く失敗なりとは云ふべからざるなり、ウエスレーニユーキヤスソルに來り其地方ふ留まること一週日にして五月六日南方に向て出發せしがストツクトン邑に入るふ當り小數の人民大聲疾呼して氏ふ逆ひたり、然れども其地の會は一人の樸實なる勸士の働に由り發きふウエスレーこの來訪せし時に比して會友の數二倍以上に增加し居たり、翌七日氏は五六人の會友より成る一小會あるヨルクふ來り夫よりエブウオルスに赴き而してリーズに還り其處の新會場ふ於て說教し而して凡そ三十人の傳道者を集めて年會を開きしが氏ハ此年會ふ於て殊ふ其傳道者等の才識信德及び其働きの結果を査察ふ而ふて其中是等の点に於て疑はしき者ハ只一人のみなるを發見せり

リーズ年會

當時ウエスレーが身に寄せ來りたる一の憂ふべき事は夫のキングスウ

キングスウード學校の困難

ード學校困難の一事にてありき、抑も此學校ハ三年前に設置せし者ふして其時二十八人の生徒と六人の教師と六人の僕婢あり而してウエスレーは自ら英、佛、希伯來、希臘、及び拉典語の文典を著述し其他許多の書を出版して生徒の用に供せり、然るに久しからずして婢の中爭を始め又教師等もウエスレーこの期望に適應ふと能ハず其中一人ハ粗暴にして懶惰、一人は正直勤勉ふりしも其人と爲り及び舉動鄙しく、一人は其行爲に於て嚴肅鄭重ふりしも生徒等懷かず、又他の一人ハ管に生徒の遊惰なるを制せざるのみならず自ら彼等と遊戲をなせり、又四五人の年長なる生徒は大に邪惡なる者となり其他の生徒も益々粗暴なる者となりて宗教上の念慮等は全く之を忘却するに至れり、斯くして此學校は其創立の日より三年を經て二人の教師二人の僕婢及び十一人の生徒に減せしがウエスレーハ仍ほ失望せず記して左の如く云へり「予は此校内ふ在る者ハ皆同心一意の者なるを及び神ハ最后に必ず我儕を惠み給ふべきことを信ず」

巡回傳道者の數

メソヂスト教派は其基礎を置てより既に十二年を經過し其間八十五人の

巡回傳道者ウエスレーが指揮の下に在て各自運動をなせしが其中の一人（ホ非ートレイ）は放逐され六人（トーマス、ベールド、イノク、ウイリヤムス、サムエル、ヒッチンス、トーマス、ヒッチンス、ジョン、ジエーン、ヘンリー、ミラルド）は奉職中ゑ死し十人は種々の理由に由て退き而して六十八人ハ當時尚ほ其役務を執れり

ウエスレーの傳記々者ハ此一年を省畧す

北部巡回

八月十九日ウエスレー夫人を伴ひてコルンウオールに出發し其地ゑ留まること一ヶ月ゑして途中所々ゑ傳道しつゝ十月二十一日ロンドンに歸り其後ハ暫時キングスウードゑ赴きしとあるのみゑて全く此年の剩餘をロンドンに於て費せり

一千七百五十二年　四十九歳

ウエスレーの傳を記する者は皆此一年を省略せり、然れども此年に於ても尚多少の記すべき事件ありて全く無爲の年ゑいあらざりしなり

三月十五日（日曜日）ウエスレー北部巡回を始めしゑ氏ハ之に（愛爾蘭巡回を合せ）七ヶ月を費やせり三月二十六日マンチエストルゑ達する迄常に暴烈ある雨雪ゑ逢ひしも尚往く〳〵説教することを止めず時ゑ屋外に於て之をなしゑることもありたり、氏ハマンチエストル會の會友を査察して三日を費し而して其會友中一人の放恣なる者なきを見ゑり、ブリストルゑ於てハ屋外に於て説教し而して其説教后に至りて聽衆中或者は一百四十ヤールドの外より明瞭に聞き得しことを聞て自ら驚けり、又リーヅにては新講義所に於て、ウエーキフヒールドにては會堂に於て説教せしが之につき記して左の如く云へり「今より數年前ゑ在ては誰か予ゑウエーキフヒールドの會堂ゑ於て斯く靜肅なる聽衆に向て説教すべきことを預期せし者あらんや其頃に在ては凡ての人々恰も咆哮する獅子の如く烈しく予ゑ反對し夫の善良なる人と雖も尚其家屋の毀されんことを恐れて其庭内にて予に説教せゑむることを肯んせざりき」、セフヒールドに於ては素建の新屋ゑ於て説教せしが此時氏は左の如く云へり「ヨルクの審判に於て有司が、夫の暴民等が引き倒はしたる家を再建すべきことを命せられし以來今に至る迄此處は全く平和無事とゐれり」、ホルに上陸するに當り夥多の人民埠頭に群集し互ゑ

「ウエスレーハ聖人なるか、ウエスレーハ聖人なるか」と尋ね合へり、此時は人々只珍奇の念を以て或は問ひ或は笑ひしのみなりしが其夜氏がマイトンカールに於て說敎をするに至り上下貧富の別なく或は騎し或は步し或は馬車に乘て雲霞の如くに四方より來集し數千れ人々大ゐ注意して靜聽せり然るに許多の暴民等恰もモロクゐ憑かれたる者の如く狂奔して土塊瓦石等を四方より亂投し而して氏が其宿處ゐ着するや否や彼等或は窓を毀はし或は瓦石を投じ又詛言を吐て夜半ゐ至れり、是實に殘暴ゐる待遇ゐしてウエスレーハ此後七年の間再び此地に來ることを爲ざりき、氏は夫人と共にホールよりボックリングトンに到り說敎の依賴を受けしが元來此地ゐは他の地方に於けるが如く會堂の設立もなく亦一人の信者と稱そべきものもなかりき而してウエスレーの說敎場として備へられたる家は僅かに五方ヤールドに過ぎざりしを以て氏以て餘り狹少なりと思考せしのみならず其家の庭に許多の石の集めあるを見て過去の經驗に由り直ゐ其何の意ゐるかを了知せり、遂ゐ一人の紳士潤大ゐして且つ便利なる敎倉を氏ゐ貸與したをば氏ハロンドンを出でゝ以來最良の集會をゐずを得たり

外部の事業尙ほ人力の能くする所にあらず

一奇事

ウエスレーは四月三十日氏が北部巡回の中心なるニューキヤスツルに着し後アレマウスに於て說敎し而して其日誌中ゐ左の記載をゐせり「此處の狀況よりして考ふる時ハ我儕が外部の事業即ち會の組織すら尙ほ人力の能くする處ゐ非ざると明かなり、我儕は智力を盡して働き而して一人の我儕に反對をる者なかりしも、否、邑中最も富裕なる二人の紳士力を盡して我儕を助けたるにも係はらず九年の間に一の會をも此處に起すと能はざるあり」、氏ハウ非クハムゐ於て一奇事ゐ遭遇せり、當地のアームストロング夫人（ウエスレーは此夫人の宅前ゐ於て說敎せり）は當時八十歲餘の老人ゐりしが幼少の時より聖書を已が好伴侶として之を愛讀せしも近時ゐ至り眼鏡を用ふるも尙一字を見ると能はざるゐ至れり然るに此時彼老夫人は眼鏡を放して聖書を見るゐ字々明瞭ゐして之を讀むの易き恰も其娘の之を讀むが如くなりき彼ハ此時より只ゐ書を讀み得るのみゐらず或ハ縫ひ或は最小なる針に糸を貫くをの易き尙は其三十歲の頃と異ならざりしと

巡回中困難の一例

云ふ、バルナルド、ギヤスソルふ於ては暴民大に喧噪せり、ウエスレーは其處よりホワイトヘーヴンよ到り而して愛爾蘭に航せんと欲せしも船主氏を殘して出帆せしを以て止を得ず夫よりランカシーヤ及びヨルクシール西部の巡回をなせり、トッドモルデンよ於て氏は烈しき癲癇を患ふる敎師の漸く快方よ赴くを見しが此敎師はメソヂスト敎徒を譏誘攻擊そるの說敎をなして後直に此病に冒されしと云ふ

我儕は此にウエスレーが巡回中ふ遭遇したる困難の一例として氏ぞ日誌中より左の一節を抄錄すべし

「一千七百五十二年六月十五日—予い此旅行中に予が嘗て經驗せざりし許多の少さき試みに遭遇せり予は强壯なる若き牝馬を借り之ふ乘りてマンチエストルを出發せしが未だグリムスビーに達せざる前に其馬跛となりて用をおさず依て他の馬を得て之を用ひしもニユーキヤスソルとボルウヰックの間よて又用を爲さざるに至れり依て予はマンチエストルに歸るに當り予が馬を用ひんとせしぞ是亦敗塲よ於て跛となり居たり、然るとも予は今日四五英里い之に乘りて行くとを得べしと思考せしに豈斗らん其馬は何處に行きしか全く其跡を匿せり予いマンチエストルに近頃購ひ得たる一匹の馬と有せしを以て之を用ひんと欲し其地ふ到りたるよ不運ふも亦或人其馬を借りて既にチエストルに赴き居たり」

愛國に赴く

然れども氏は遂よ馬と得て六月二十日チエストルよ到り七月十日其妻と共にホワイトヘーヴンに還り同十三日ダブリンに向て出帆し四日の後其地へ安着せり此地には既よ新築の會塲落成し居りしが氏は其會塲いニユーキヤスソルの會塲と殆んと廣袤を同ふし其異なる所い三方に廣き二階あるとのみなりと云へり、本會は凡そ四百二十の會友を有せしが其中多くの人々は種々の異說の爲に大に動かされたり

愛國最初の年會

リメリック年會(愛爾蘭最初の年會)を八月十四、十五の兩日に於て開きしが幸にも此會よ列せし傳道者の筆に成れる本會の議事及び傳道者等の任命を記載せる二卷の寫本今尙ほ存在せり、此議會に於て議決したる事件

議決したる事件

は一日二回の説教をなすの力なき者と單に定住傳道者たるべきと、朝夕二回の説教中其一を止めざるを得ざるときゝ寧ろ夕の説教を止むべきと會衆は祈禱中は常に跪づき唱歌及び聖書朗讀の時は起立し又禮拜中及び參堂退散の時は常に靜肅なるべきと、バンド通券を有せざる者ゝバンドの公集會に出席するを得ざると、蓋若し之を許すときは其通券の價格を下ゲ且つ之を有そる者の氣を挫くべければなり)、傳道者ゝは衣服料として一ケ年少なくも八パウンド乃至十パウンドを給與し又其妻の爲に一ケ年十パウンドを支給すると、傳道者は時々斷食ゝ就て説教し且つ己が健康の許す限りは毎金曜日に自ら之を實行そべきと、傳道者は奢侈を避くべきは勿論又怠惰ならざる樣注意し而して毎日私祈禱に一時間を費すべきと等なりき

リメリック年會後ウエスレーコルクに赴き其會を査察そて凡そ三百人の會友は只管神と人とゝ對して良心の責ゝからんとを勉め居るを見たりキンセールに於てゝ二三千人を容るべき空地ゝ於て説教せしが此時其地の營兵等は帶劍を拔て氏が説教すべき場所を作れり、ウオートフオルドに於てはトーマス、ワルシは愛爾蘭語にてウエスレーは英語ゝて説教せしが暴民等或は詛言を吐き或は大聲を發して最も粗暴を極めたり○氏愛爾蘭に在ること十二週(其間雨なき日は二日に足らざりき)にして遂に英國ゝ向て出帆し十月十四日ブリストルゝ安着し三週日の後ロンドンに來り而して此年の終り迄其地に留まれり

フアウンドリゝ於て新年を迎ふ

マルシヤルシーの獄舍を訪ふ

ウエスレーと電氣

一千七百五十三年　五十歳

例年の如くウエスレーはフアウンドリに於て午前の説教を以て新年を迎へしが多くの人々歡びを以て惠みある神を讃へんが爲めに四方より來集せり、ウエスレーは初の二ケ月をロンドンゝ費せしが其間ゝ諸ろの罪惡の養成場なるマルシヤルシーの獄舍を訪ひ且つ記して「斯る地獄の眞影の地上にあるゝ實ゝ人間の耻辱にして基督教國ゝ獄舍の要あるゝ之れキリストの名を負ふ者の大に耻つべき事たるあり」と言へり

恰も此頃氏は近世の最大發明の一となりたる一事件ゝ意を注げり、凡ろ

一年前より、ベンジヤミン、フランクリンハ電光と電氣体とが同一なるとの肝要なる事實を確定せしが天資英敏なるウエスレーハ是等の事實の世に公にせらるゝや否や直ち其要を了得せり、是等の事實は新奇にして且つ驚くべき者なりしも氏は此時既より之が最も肝要なる者なるとを洞見せり又氏は是等の事實が後人の感歎する方法を以て實際の事物に適要さるべき期望を有せしや明かなり、氏曰く、

「一千七百五十三年二月十七日―ドクトルフランクリンの諸書翰に由り予は左の諸事を學び得たり　(一)電光は火の一種にして從來我儕が知り得たる凡ての火よりも無限に細微なると　(二)其火は大凡同一の比例を以て殆んど凡ての物質中に散在潛伏する者なると　(三)斯く散布し居る間は毫も我儕が辨知し得べき結果を現はさゞると　(四)人爲又は自然の作用に由て多少其量を集合するときは肉眼を以て見得べき火の形を取り而して言ふ可からざる勢力を有するに至ると　(五)電火と其性質ふ於て太陽の光と異なると、蓋電火は普通の光の透ふし能はざる幾百千の物体を透ふし而して普通の光の自由に透徹し得る玻璃を透ふし能はず　(六)電光ハ一ヶ若くは數ヶの雲より集合さきたる電火ふ外ならざると　(七)電光の來たす凡ての結果は又人爲電火ふ由て之を來ふし得べきと　(八)針の電火を引導するが如く尖塔若くハ木の如く尖りたる物は凡て電氣を引導すると　(九)電火を鼠又ハ鳥類ふ通ずる時ハ即時ふ之を殺し水中に浸去たる物に通ずる時ハ之を經過して毫も害を及ぼさゞると、故ふ立ろふ人を殺すべき電火と雖ども人若し充分水に潜れ居る時は毫も害をなさゞるべし、是等ハ實に後來人間に利用さるべき驚くべき現象たるなり」と

ウエスレーが此最後の一言ハ實ふ驚くべき語ありと云ふべし、然れども僅に一百餘年ふして此電光が殆んど瞬間に英國より印度に又大西洋の此岸より彼岸ふ音信を送るの要具とあらんとハ氏も亦夢にだも想像せざりし處なるべし、實ふ氏は電氣の學問に意を用ひたる最初の考究者の一人ふして是より六年前即ち一千七百四十七年に氏は左の如く記せり「予ハ電氣試驗

と稱する者を見んとて行きしが是等の實驗は實に夫の己が了解し得ざる事ゝ何をも信せずと云ふの如き憐れなる半思想家の心を攪乱せべし、誰か何如にして火の水中に住み且つ其水中を通過せると空中を通過するより自由なるか、何如にして酒精ゝ點火するを得べき眞の火が予の指より出づるか、又何如にして是等及び其他許多の現象ゝ玻璃球を旋轉するに由て來るかを了知し得る者あらんや實ゝ是等ゝ皆宇宙の秘密にして神之を人に隱し給ふなり」、一千七百五十六年に至り氏ゝ是等の發見を實用するを始め器械を求めて種々の患者を電氣を以て治療するとをなせしが久しからずして此驚くべき藥れ功驗を試みんが爲に氏が許に來るの患者甚だ多く之の爲に氏ゝ毎日一時間を費せり、ムールフヒールヅ、ザウスワルク、セント、パウルス及びセヴンダイアルス等ゝ其集會場として數千の人氏ウエスレ

ウエスレー氏氣治療を始む

ゝれ治療を求めて其等の處に集まれり、氏記して曰く「之に依て幾百千の人々言ふ可らざる益を受けさるとありと雖ども未だ一人の之が爲に害を受けし者あるを聞かず、故に予ゝ人の患者に電氣を用ゆるの危險なるを語るを聞くときゝ(殊に其人若し醫事を心得たる者よてあらば)之を其人の常識の大なる欠点か若くゝ不正直ゝ歸せざるを得ず」、「我儕電氣は多種の藥の功能を兼ぬる者なるを知り特よ凡て心經質の病よ用ひて功驗あるゝ未だ嘗て其比を見ざる所なり」と

北部巡回

ケンダルに於けるウエスレー

ウエスレーゝ二月二十六日ロンドンを去てブリストルに赴き(氏は其道中プリンス氏の基督教歴史を讀めり)而して三月十九日妻と共ゝブリストルを去り英國の北部に向て出發せり、ケンダルに於てはベンジャミン、インガムの講義所に於て說教せしの其會衆大に氏をして不快の念を懷かしめたり彼等は堂に入り來て席ゝ就くや先づ祈禱をなそとをせず且つ氏が說教を始むるに當り讃美歌を歌ふよ一人も氏と共に歌ふ者なかりき然るに神は聖書の語を以て彼等に語り給ひたれバ說教後の唱歌よは過半の者共よ歌ひ而して其大多數の者は氏に隨て其旅宿に到り氏が寢よ就くの時迄共に語れり、氏は夫より蘇格蘭ゝ赴きしがダムフライズに於ては未だ嘗て見しとなき最も壯麗なる二の會堂を見たり、又氏とグラスゴーを以てニュー

グラスゴーに於けるウエスレー

キヤスソルと略ぼ同大の邑となせり、其大學の學生等い粗き織物を以て造りたる長さ膝に達する深紅色の敝外套を着し居さり、ウエスレーが此處に來りさるい大學附屬會堂の牧師ジョン、ギリース氏の招きに由る者よして氏い同氏の家に客とおれり此時ギ氏い歴史の編纂中ふして翌年に至り之を二大卷の書となして出版せりウエスレーい此敬虔にして且つ有名ある人と共よ居ると殆んど一週日其間或は歴史編纂の事業を助け或は其會堂よ於て説教せしが此時彼は蘇國人の公拜よ一の變化を來たすの誘導をなしたるが如し即ち不調子ある詩篇を歌ふと共よ讃美歌を歌ふの一事是なり、ウエスレーグラスゴーを去り途中ポルウ非ック及びエルンウ非ックに於て説教し四月二十五日ニューキヤスソルに着し其處にて英國の北部よ於ける第一のメソヂスト長吏の四季會を開けり又氏は其頃落成したるゲーツヘッド、フェルの講義所(是れニューキヤスソルの近傍に於てメソヂスト教徒の爲に建てられたる第二の講義所あり)よ於て説教し五月七日ニューキヤスソルを去りヨルヘム、ストックトン及びロビン、フードス、ベイ等に

リーヅ年會議決したる事件

て説教し二日の後ヨルクに來り人民の逆待に遇ふにも拘はらず熾の如く暖かなる室に於て説教せり

五月二十二日氏はリーヅに於て年會を開きしが會そる者彼と二人の教師グリムショー及びミルノル、二十五人の巡回傳道者及び十六人の定住傳道者なりき、此時以後年會いロンドン、ブリストル、及びリーヅに於て順番に之を開くことゐ決せり又此議會に於て「人い皆己れが義とされたる時を精密よ知る乎」との問をなせしが其答は左の如くなりき「人其義とさるゝことを經驗するの際何と之を稱ふべきや自ら知らざるとあるべし之よ關する聖書の教を聞き慣れざる者よ有ていい殊よ然りとす又其際或人の中に起る變化い他の人の變化の如く俄然又顯著ならざるとあるべし然れども明白に又聖經的よ福音の宣べ傳へられたる所にていい一般に百人中九十九人以上い其義とされたる時を精密よ知るあり」、又傳道者等は一般に內部及び外部ハ聖德に就て充分強く説教せざりしことを承認せり、許多のメソヂスト信徒近時不信者と結婚するに至りたるを以て向後斯るとをなしたる者は會より放

逐するとし且つメソヂスト信徒にして結婚せんと欲する時ハ必ず先づ最も敬虔なる兄弟よ談ずべき一則を設けたり、又安息日を犯すと、飲酒、悪言無益の談話、輕躁、及び拂ふべき充分の思慮なくして負債をなすと等の大に行はれ居るを認知し向後斯る事をなしたる者ハ會員たるを得ざるべし決議をなせり、或有妻の傳道者は其妻に支給おきが爲ふ大なる困難に陷りたる者あれバ此會議に於て向後傳道者は充分已が結婚に注意をなすべきと、結婚せんとする時は先づ之を其兄弟等に議るべきと、若し之を怠るに於ては假令適宜の補助を與へられずとも怨言く可らざるを、又之を兄弟等に議りたるも尚此妻の生計よ弟する時ハ再び初の職業に復し而して定住傳道者とおるべきを等を定めたり、當時循回ハ十二即ちロンドン、ブリストル、デヴオンシール、コルンウオール、スタフオルドシール、リーヴ、バツオルス、リンコルンシール、ニユーキヤスソル、ウエールス、及び愛爾蘭にして是等の處よ働く傳道者ハウエスレー兄弟を合せ凡て三十九人なりき

ウエスレーハ六月十二日即ち此巡回を初めてより四ヶ月にしてロンドンよ歸り而して一ヶ月の後リイト嶋ふ赴けり此處は氏が役者の一人の既よ働き居たる所なりウエスレーが説教したるハ嶋中只ニユーポルトの一所のみなりき、七月十二日コルンウオールに向て出發し其處よ止ること三週日其間に會計吏の集會をなし諸會を査察し而してセント、アイヴスのメソヂスト信徒に潜商を止むべきをを誡告し若し之を止めざれバ爾後彼等の許ふ來らざるべきをを告げたり、此處よ於て氏は病に罹り下痢、頭痛、時々の烈しき吐瀉、及び手足の拘攣等に惱まされ一週日の間退居し而して後説教を始め八月二十一日ブリストルよ到りワイトを經十月九日ロンドンに安着せり○此數月の間ウエスレーの身体大に弱はり漸次衰ふるの狀態ありしが十一月十二日エセックスのレイよ於て説教し其處にて感冒よ罹りロンドンに歸りて二日の後左の胸部よ痛を起し且つ烈しき咳嗽と緩慢なる熱を來たせり、此時ウエスレー左の如く記せり「ドクトル、フオザルジル明かよ予に告げて予が一日も市中よ留まる可らざるをを云ひ且つ附言して「今足下に必要なる者は僻邑の空氣、休息、驢馬の乳汁、及び日々の乗馬あり」と云

循回及び其傳道者の數

ウエスレーの大病

へり」、是に於て氏は直ちにリューイシヤムなる其友エベネゼル、ブラックウエル氏の宅に移さを其處にて五週日の間懇切なる看護を受けたり、其到着の夕氏は自ら左の碑銘を書けり氏曰く「是が神を喜ばせ奉るべきや否やを知らずと雖ども人の虛しき讃辭を防がんが爲に予は左の如く書せり

自ら碑銘を書す

茲に火炎中より引き出されさる燃木ジョン、ウエスレーの遺骸あり、彼は肺症の爲に逝く、年を享るを五十有一、其逝く時遺したる世の財其負債を拂ひ終て十パウントに充たず、彼は祈りつゝ逝けり曰く　神よ無益なる僕我を憐れみ給へ」

ウエスレー命じて若し碑銘を記するとを善しとせば右の語を記すべきを云へり、今氏の病危篤なるの報遠近に達して深く人々に感動を與へしの

チヤールス往て病兄を見る

チヤールス、ウエスレーは之を聞て直ちにブリストルより馳せてウエスレーの許に到り（此時其兄弟の病大に宜しき方なりしも尙甚だ危篤にして其大に漸み居たるを見悲哀に堪へず病兄の頸を抱ひて哭けり

一千七百五十四年　五十一歳

ウエスレー病牀中に新年を迎ふ新約全書小註の著述を始む

之の爲に毎日十六時間を費す

説教を始む

ウエスレーはブリストルのホットウエルスに於て病牀の中に此年を迎へしが氏は此年の第一日曜日より新約全書の小註を書き始めたり、氏曰く「若し予が病予に讀書及び著述をなすを許し而して巡回及び説教をなすを禁ずるの有樣ならばあらざりせば恐らくは予は斯る事業を企つるをだにせざりしなるべし」と、氏は乘馬運動、食事（二時間）、及び私禱（一時間）の時間を除て毎日十六時間を氏が是迄企圖したる事業中最大の事業に費やせり、數日の間其兄弟は或は聖書の譯本と原本とを比較し或は博士ヘイリン氏の講義及び博士ドッドリッヂ氏の註釋等を讀み以て氏を補佐したり、ウエスレー十週にして翻譯の概査及び四福音書の小註を終れり○氏は夫よりロンドンに來りバッデイングトンの一小村に退居し次の三ヶ月は殆んど皆著述に費せり然れども其間土曜日の夕には必ず來て日曜日の務を補佐したり斯の如くして氏は退居中に殆んど此年の半を送り説教をなさゝると既に四ヶ月なりしの三月二十六日に至り始めてブリストルに於て之をなし又復活日に於てセヴン、ダイアルスのウエスト、ストリート會堂に於て之をな

せり此時アレキザルドル、マサル改悔して信者となりしが彼は此時始めてウエスレーを見又其説教を聽きし者にて後ウエスレーが主要なる議士の一人となれり、一ケ月の后サッドラルス、ウエルス劇場に於て夥多の人々に説教し而してホヰット、ソンデー（復活日より第七の日曜日）に至る迄各所に於て説教せり此夜フアウンドリに於て説教し而して左の如く記せり「予が音聲勢力い未だ全く快復せず或い到底快復せざるなるべし、然れども予い予が有するだけを使用すべし」斯の如くして氏は其療養の爲に退居すべき時日を送れり、氏い實に不活動の生活をなすは到底其能はざる所なるを認知せり○氏い五月第四の週間ふ年會を開きしが記して「平和と愛の精神は充分我等の間に發表せり」と云へり

氏い未だ健全ならざりしも七月八日其兄弟及びチヤールス、ペロチット、ロベルト、ウインドソルと共に始てノルウイッチに向て出發しウエスレー兄弟い四日の間キャプテンギヤラテインの宅に留まり新約全書の小註を書けり然るにウエスレーい大ふ不快にして再びドクトル、ブオザルタルの

診察を乞いざるを得ざるふ至りたれば五日の後ロンドンに歸り醫師の命ふ由て直にブリストルのホットウエルスふ往きしも其活動的の性質氏をして閑居せしめず三週日の中ふ傳道の爲めトーントン、タイヴオルトン及び其他の地方ふ向て出發せり、九月五日コルンウオール長吏の四季會を開き而してプリマウスに於ては近時建設しさる新築の講義所に於て説教せり此講義所い舊講義所に比すれば三四倍大なりしも尙聽衆を容るゝに足らざりき、九月十日ブリストルに歸りしが少なくも其所を出る時の健康い之を保有し居たり、氏は八日の間ふ旅行、訪問、集會等を除き八回の説教をなせり、次の三週間はブリストルふ於て費せしが其間にトローブリッチに於けるメソヂスト最初の講義所を開き、而して九月二十七日ふい既に十一ケ月の間開かざりし守夜會（ワッチナイト）を開くに堪ゆべしと思考せしも其夜十一時に至り殆んど其音聲を失ひ翌夜ブリストルのウイーヴルス、ホールふ於て全く之を失へり、夫より氏いロンドンふ向て出發せしが途中サリスベリーに留まり十月四日ロンドンに着し其所にて此年を終れり、是實にウエスレーに

取りて〻大なる衰弱苦難の年なりしも氏は尚最も壯健なる尋常人の幸ふじて爲し得べき程の働をなせり

一千七百五十五年　五十二歲

北部巡回

ウエスレー〻四月一日ブリストルを出發し三ケ月の間英國の北部を巡回せしがボルミングハムよ就て〻左の如く記せり「此地〻荒蕪乾燥不快なる地にして多年の間播きたる種子は悉く野豚之を滅ぼせり」四月十五日始めてリヴルプールに赴き五日の間滯留せり氏曰く「此邑〻予が英國ふ於て見さる最も整然たる市邑の一よして其大さチエストルの二倍なりと思ふ邑中街衢の多く〻眞直ふり、邑の三分の二〻過る四十年間に增築したる者なりと聞けり若し此后も同じ比例を以て增進せば來る四十年の間に〻殆んどブリストルと同大の市となるべし、人民〻甚だ温良誠實にして其コダヤ人羅馬教徒及びメソヂスト教徒よ對する友愛の行爲能く之を現〻せり

リヴルプールよ於けるウエスレー

説教所〻ニューキヤスツルに在る者より少しく大あり許多の人民は夜に於けるが如く毎朝説教を聽かんが爲ふ喜んで來集せり彼等の多くは其ふ

議論を好む者なりと聞きしが予〻彼等よ神に對ては悔改め主イエスキリストに對ては信仰すべきことを勸めたり」と、此邑はウエスレーの預想よ違〻ず現今其大さふ於て〻國中第二に位するよ至れりリヴルプールに於て第一のメソヂスト説教所〻ケーブル街の矮小不潔且つ不便利なる一小室ありしが一の會を組織してより會場を新築せんが爲に現今のピット街會場敷地と略ぼ同大の地を購求し而して其所よウエスレーがニューキヤスツルの孤兒院より少しく大ありと云ひし一の會場を建設せり、此第一のピット街會場に會したる最初の會友ふテモテなる者あり彼〻小裁縫匠にして其妻〻他人の衣服を洗ひ以て家計を助けたり然るよ彼(妻)〻夫と異なり甚だしき肉慾の奴隷にして大にメソヂスト教徒を惡み全力を盡して其夫を苦めたり而るにテモテ〻忠實に信仰を保持し居たりしが一夜彼が會場よ出席したる後夫の殘逆なる婦〻共集會を妨害せんが爲よ陋劣なる小童等を誘ひ來り一群の家を驅てピット街の會場よ逐ひ入れたり然るに幾回放入するも直ふ追ひ返へされて更に共功を見ざりしかば彼大に困却して佇

テモテの妻の悔改

立せしが會場の入口に一の空席あるを見入て其席に就き始めて眞理の宜傳者の語を耳よせり而して彼大に已ぞ罪を認め痛く憂苦して家に歸りテモテ家に歸りて其妻の涙に暮れ居るを見大に異しみて其故を問ふゐ彼具さに事の始末を告白せしがテモテい其悔改の眞實なるや否やを疑ふ程なりき然れども其悔改は眞誠の悔改にして彼は爾后誠實なる痛悔者たるの實を表はし而して久からずして全く平和を得たり其後彼が其救主の務に忠實熱心なりしとい恰も從來サタンの務よ熱心なりしぞ如くなりき彼い忠實なるメソヂスト信徒として十六年の間生存し而して主よ在て樂しく天に凱旋せり

ウエスレーはリヴルプールを去てボルトン、トッドモルデン、ヘプトンストール、ハウオルス、ケイレー、ブラッドフオルド、及びボルスタルに赴き此地(ボルスタル)にて其兄弟に逢ひ數日の間共に一紳士英國教會より脫するの理由なる論說(エキセトルの一脫會牧師の筆よ成る者)を誦讀し而して此脫會問題を以て五月六日リーヅよ於て開きさる年會議事の主要なる問題となせり、ウエスレー曰く「我儕が凡ての傳道者に充分共意見を述べんとを望みたる問題い我儕い教會より分離すべき乎將た否らざるべき乎の一点に

リーヅ年會

脫會問題

して我儕い双方の議論共ゐ誠意專心を以て穩便に之を考究せり而して第三日に至り我儕は皆充分に左の結論即ち其正不正に關せず之れ適當の道に非ずとの論よ同意せり」と、此年會は是迄開きさる年會中最大の者にして此時出席したる傳道者は凡て六十三人ふ下らず即ち當時傳道に從事し居たる総巡回傳道者の數より多きを十七人なりしなり其中十二人い半巡回傳道者十五人い主要なる定住傳道者なりき

當時傳道者中或者は熱心を失ひ或者は脫會者(英國教會より分離するもの)たらんとを好ひの狀況よして之を矯正するにい大に健腕を要せり實ゐ一千七百五十五年は最も危險ゐりし年にして此時メソヂスト教派ぞ全く潰裂破滅するよ至らざりしは眞ゐ無限の天恩なりと云いざる可らず、當時の一大問題いメソヂスト教徒が英國教會より分離するの必要及びメソヂスト巡回傳道者ぞ聖禮典を行ふの必要にして既に數年間不平の聲不滿の念諸會中よ發

斯派の一大危機

起し居たり蓋し信者ハ屢々教會の聖餐式ヨ與かるとを拒絶され止を得ず或ハ脫會者の會場に往て不規則ゐる聖餐式ヨ與かり或ハ全く此切要なる聖禮典を缺で罪を犯すが如き狀況なりき既に斯の如き狀態なりしを以てメソヂスト信徒が安き心なく大ヨ不滿足に感せしハ決して怪むべきに非ず又多くの傳道者等(最も敬虔にして且最も才識ある傳道者ハ殆んど皆此中ヨありたり)が大に歎息して其狀態を醫せんとを求めたるも怪むヨ足らざるなり其中にハ學力、才能、敬虔を以て聲へたるエドワルド及びチヤールスの兩ペロチツト及びウエスレーが已が知る所の聖經學者中第一流の人なりと稱讃したるトーマス、ソルシゐり、脫會論者の首領にハッエスレーが英國ゐ於て最良ゐる傳道者の一人ありと思考したるジョーゼフカウンレーありて是等は皆其同役者中に勢力ゐるの人ヨしてウエスレー兄弟と同く其胸中に正當の意見を定め得るの人ヨてありしなり彼等はメソヂスト信徒ハ基督教會の聖禮典に與ゐるの權利ゐる者ゐりと思考し又已等はキリストの教の宣傳者として神より召されたる者なるバ夫等の聖禮典を行ふをを許さるべき者なりと思考したるに之を擯斥するは蓋し至當の事ゐゐらざりしなり、カウンレー、ソルシ及び兩ペロチツトの意見は實に正當ゐるものなりしも奈何せん之を容れらるゝの時期未だ到來し居らざりき、當時英國教會は只に大ゐ腐敗せるのみならず又迫害强迫等を行へりメソヂスト教徒及び其傳道者は何如ふして永く斯る教會に屬し居るを得べきや、然るにチヤールス、ウエスレーは非常ヨ激して之に反對せり氏は恰も現今れ高派(ハイチヤルチ)教會の人々の如く救ハ英國教會を舍てハ決して他に得べからざる者の如く思惟したるが如し是れ或ハ怨そべきをなるも決して讃むべきをヨ非ざるなり氏は徹頭徹尾誠實なりしや疑ふ可らずと雖ども然ども此事に於て氏か聖動ハ大ヨ不當ゐりしなり氏より遙かに平坦ゐる心を持てる氏が兄弟ハ若し其朋友等に動かされを其感化を裝らざりせば其行爲は氏(ウエスレー)の此時に現はしたる者と大に異ゐる所ゐりしならん然るに氏ハチヤールスヨ頻はされ他の者に妨げられて遂ふ前に陳べし如き結果即ち一千七百五十五年の年會ゐ於て三日間の議論の後其正不正に

チヤールス大ふ脫會論に反對す

ニューキャスソルに於ける脱會問題

第一のメソヂスト契約式

關せずメソヂスト教徒が英國教會より分離するゝ適當ならず」との議決の結果を收むるに至れり

ウエスレーハリーズの年會を終り五月十二日ニューキャスソルに向て出發し其處に到て信者中或者ハ既に英國教會を脱し或者ハ將に脱せんとし居るを見たり而して彼等ハ凡てウエスレーの名義を以て之を行へり、此處に留まること三週間にしてロンドンに向て出發し第一日よオスモザレイよ着し六月十六日ロンドンよ達せり、六月三十日氏ハノルウヰッチに向て出發し其地に四日間留まりて會友各個人に就て談話をなし後ロンドンに歸て親愛なる一婦人の請により其遺産に關する遺言の証人となれり即ち其財産の一部分は慈善事業の爲よ一部分ハ愛犬トビーが存命中其爲にして遺こせり、ウエスレー十六年間相見ざる舊友を訪ひしが其友ハ凡ての舊知已に棄てられ當時乞食をなして僅よ露命を繋げりウエスレー見て之を憐れみ力の及ぶ限りの助けを彼に與へたり、ウエスレー第一のメソヂスト契約式（コヴエナント、ソルヴイス）をスピタルフヒールヂの佛蘭西會堂に於て擧行せしが一千八百

ブラックウエルに寄せたるウエスレーの書翰

以上の人々其契約の主意に同意するの証として皆起立せり、其契約ハ今猶ほメソヂスト諸會中に行はるゝ者なり、八月十八日コルンウオールに向て出發し途中リーディング及びサリスベリーに於て半睡の會衆に向て説教せり、シヤフテスベリーに於てハ人々の稍〻活氣あるを見コルンウオールに於ては會衆甚だ多く且能く意を用ひて靜聽するを見さり、夫のヘルストーンに於てすら尚全く靜肅なりしなり其中二人の醉人ありしも一人ハ直よ去り行き一人ハ馬頸上に睡れり、ウエスレー三週間コルンウオールよ留まり而して新約聖書の小註を書き終らんが爲にブリストルに歸れり、氏ハコルンウオール巡回の間ミカエル、フェンウヰックを最良の家丁、保育者、又時に可なりの説教者なりと云へり、氏ハ其友ブラックウエルよ左の如く書き送れり

「拜啓過般の北部旅行に於ては再三小生が全忍耐力及び全勞力の試驗ゐ逢ふ程よ之れ有りしも成功をる所ゐかりしが今回の旅行よ於てハ恰も鉄鎖より脱したるが如く跳躍致候小生は如何なる待遇如何なる出來事

に遭遇するとも常に滿足致候が同伴者等も是等の場合に於て常お不平なく善き心情を表わし申候是れ彼等ぞ小生と偕に在る故にして凡て小生と偕に旅行する者の精神は皆斯くわらざる可らざることに御坐候若し彼等麁末なる食物、硬き寢牀、麁末なる宴、一時の劇雨、又は惡しき道路等に由て其感情を惡く致さば是れ右等諸ての不愉快おる事物に勝りて小生が重荷たるものよ御坐候、神の惠により小生は決して怒らず凡ての事に於て怨言かず又毫も不滿足に感せず隨て他人の事毎に怒り怨言くを聞くは恰も我肉を骨より裂き取るが如くお覺へ候小生と常よ神其聖位に座し給ひて凡ての事を適宜に支配し給ふを見ることに御坐候、願くは平安足下等凡てと偕にわらんとを敬具

レッドルスよ於て　ジョン、ウエスレー」

ウエスレーが一安息日の働き

一千七百五十五年八月三十一日

ウエスレーハ十月の終りふ至てロンドンよ歸りしお若後第一の安息日に於て朝ハスノースフィールドに於て新禱說教の後聖餐を行ひ正午ハウエスト、ストリート會場に於て說教し且つ聖餐を行ひ三時に組長等を會し四時に葬式を司どり五時に說教し其後會友の集會をなし最后に會友一般の愛餐を行ひて此日を終れり、氏ハ此年の剩餘をロンドンと其近傍に於て費せり

此年ふ於ける主要なる出版物「公正寛大なる精神」

一千七百五十五年にウエスレーが出版したる書籍中「公正寛大(キャソリック、スピリット)なる精神」なる書は列王記略下第十章十五節に基きたる一の說教にして僅かよ三十一頁の小册子なりと雖ども甚だ肝要なる書よして其中よハ福音主義同盟(エヴァンゼリカル、アライアンス)の原則を含めり即ち三位一体を信ずると、神と人とを愛すると、及び善事を行ふと是なり、氏は何處に於ても右の三事に同意する人を見れば直に之を基督教徒と做し之を兄弟と呼べり氏は其人よ向て已が意見を容れよと勸めず又已が禮拜式に從へと言はずプレスビテリヤン派の人もインデペンデント派の人もバプテスト派の人も又クエーカルの徒も各自其意見を定め而して之に從ふの權利あるものとし只其求めたる處は「右よ述べし三事に於て若汝爾が心我心と相合はバ我に爾が右の手を與へよ」との一事のみ

ありしなり、數多の事に於てウエスレーは遙に己が時代より進み居たるが右の一事は即ち其一なりと云べし、實に現今の福音主義同盟の組織は既よ業に百有餘年前に略ぼ備はり居たるなり、氏が此年の主要なる出版物は自著の「新約全書小註」にして紙數七百六十二頁附するに氏が肖像を以てせり

「新約全書小註」

其緒言に於て氏は多年の間斯る事業をおさんとを思慮したるとと、及び其註釋は學識なく只簡易なる言語のみ解し得る普通の人よして神の語を敬愛し只管己が靈魂の救はれんとを望む者の爲よ書きたるとを陳ぶ、一千七百五十七年よ至り此書の第二版出で一千七百五十九年に氏は其兄弟と共に聖書の原本と譯本とを善く比較對照し前の小註を更に訂正增補して一千七百六十年に之を出版せり

一千七百五十六年　五十三歲

ウエスレーは「敎師に告ぐ」と云へる書を著して此年を迎へ而して一月二十六日より三日間キャントルベリーお赴きて說敎をおせしが其聽衆中には夥多の兵卒及び士官ありき此地は大なる兵營のある處よしてウエスレーが此處に來りたるは深く兵卒等の福祥を希ふてなき、而して愛は愛を生むの通理よ漏れず是等許多の國の權利威嚴の保護者等は改悔して小數のキャントルベリーメソヂスト信徒と合體せり、或時幾多の聯隊和蘭よ出軍するに當り此市を通りしが其聯隊中のメソヂスト信徒等は過去の事を想起して感恩の情に堪へず遂に以前の敎導者と組會を開くとお決せり依て彼等を分ち交互組會を開て九時間に互れり、彼等の心情既に斯の如しウエスレーが之を愛したる蓋し偶然よあらざるなり、氏は翌月再び此處に來り而して一人の聯隊長と共に食せしが其時隊長ウエスレーよ告げて「神を畏るゝ者の如く善く戰ふ者なし予は王の一聯隊を率ひんよりは寧ろ斯る兵士五百を率ひんとを願ふなり」と云へり

聯隊長の言

ウエスレーは三月三日ブリストルに着し其地方及びウエールス候國よ殆んど一ケ月を費せり、ピルに於ては氏が說敎中粗暴ある水兵等軍艦より上陸して會場に亂入し來りしが少時說敎を聞き而して靜かに出で去れり、三月廿九日氏はホーリーヘッドより乘船して愛爾蘭に航し一ケ月の間

愛國よ航す

愛國年會

地方巡回

ダブリンに留まりて凡そ百人の兒童と語れり、メソヂストの傳道者等は毎週二回是等の兒童を集めて公けに宗教上の問答をなせり。ウエスレーハ愛爾蘭に於ける最初の契約式を行ひしが之に與かりし者はダブリン會の會友殆ど四百人なりき、氏は又其國傳道者の會議を開けり氏記して曰く「斯る一致は彼等の中に於て嘗て見ざりし處なり今彼等ハ只ま同心あるのみならず同精神同意見なるが如し」と、四月二十六日コルクまで向て出發し途中エディインデリまで於て説教せり此處には一小會ありて便宜なる一の小會場を建設せり、トレモールにては市場に於て説教し而して兵營に於て或士官等と談話し一時間を費せり、キルケンニーに於ては兵卒等が組會をなし居るを見る斯て一士官の室まで於て説教せり、ウオートルフオルドまで於てハ會友の中誤解者、感情を害したる者等ありて一會大まで破裂し殘る者僅かまで二十六人となり居しが、ウエスレー到て其等の誤解障害等を除去し三十一人ハ復會せり愛爾蘭まで於て已が見たる市邑中最も喜ぶべき邑ありと稱道したるクロンメルに於てハ一回ハ五六百の聽衆を容るべき廣濶なる二階わ於て一回は路傍に於て説教せしが其路傍説教にハ市長及び兵卒士官等來集し大に意を用ひて之を聽けり然るまで説教中一人の酔漢一手に棍棒を持ち他手に牛刀を提げ粗暴なる羅馬教徒等と共に會場まで來り冒瀆呪詛至らざる處なく且つ誓て説教者の首を刎ねんと揚言せしがウエスレー辛ふじて兵卒等が痛く其酔漢を懲罰するを支へたり然るまで酔漢は會衆まで向て攻撃を始め一人の爲まで警官は手に負傷せり此時其酔漢甚く歐打され而して市長と警官等之を獄に送れり、ウエスレーハ五月十二日コルクまで着し新築の會場に於て説教せり氏ハ此會場ハダブリンの會場と殆んど同じ大さまして其費用に於てダブリン會場より廉なるを四百パウンドあるまも拘ハらず其造作まで至てハ遙かに之に勝れりと云へり又ダブリン會場の如く傳道者の爲に別室の設けありたり斯て一千八百二十六年迄存立せしが同年之を改築し翌年即ち一千八百二十七年メソヂストの會場として之を開けり、ウエスレーコルク及び其近邑まで留まること三週日にして六月七日轉じて北方に向ひ八月四日ダブリンまで還り同十日三人の傳道者ワルシ、ホートン及びモルガンと共

ブリストル年會

主要なる議事——分離論

ウエスレーが

に英國に向て出帆せり、氏ハ愛爾蘭ニ留まること凡て十九週間なりき

途中チエスタル、ボルトン、マンチエスタル、チエルメルトン、ウエドテスベリー及び其他の所に於て説教し八月二十五日ブリストルに着せり此所に於て氏は凡そ五十の傳道者と共ニ年會を開き會則(メソヂスト會の)を朗讀し而して逐條之を考査せり、遂ニ彼等ハ皆從來の會則を可とし且力を盡して之を會友中に宣布實行せんことを勉むるに同意せり、當年會に於ける主要なる議事ハ夫の一千七百五十五年の年會に於ける者と同一なりき、ウエスレー曰く「我儕ハ大に教會ニ連なるの必要及び教師等に向て温柔なるべきことを感じ會中毫も分離の聲を聞かざりき神ハ我儕凡てニ同精神同意見を與へ給へり予ハ予が兄弟と共に、教會より分離するハ決して我儕の目的ニ非ることを陳て會を閉ぢしが議會の兄弟等は皆之ニ同意を表せり」と○九月六日ブリストルを去りロンドンニ赴き其處にて讀書、著述、出版、及び説教等に從事し以て此年を終れり、氏ハ(氏が所謂)世事を整理する爲に三日間を費せしが其結果として其日誌ニ左の一事を記載せり「予ゞ著述及び出版を始めてより今既ニ十八年なるが其間出版に由て予が得たる利益は幾許ある

出版と説教の所得

や、今之を計算するニ一千七百五十六年三月一日迄に予が出版及説教ニ由て得たるものハ實に一千二百三十六パウンドの負債なり」

ウエスレーがロンドンニ於ける日曜日の役務　各地巡回

一千七百五十七年　五十四歳

ウエスレーハ此年の始め二ヶ月間をロンドンに於て費せり、氏が安息日の集會ハ聖餐式を合せて一回通常五時間を要せしゆ氏ハ其ロンドンに於ける安息日の役務を以て八回の説教に等しとなせり、二月の終に至り暫時ノルウヰッチに赴き從來ノルウヰッチメソヂスト信徒が會場とせし鑄鐵場の改築事務を調度せり、氏ハ此改造の費用を匿名の一友より得たり、ロンドンに歸りて後氏ハトーマス、ワルシと共にキヤントルベリーのメソヂスト信者なる兵卒を訪ひ而してビーコンスフヒールド及びヘイ、ウイコムニ傳道せり、四月十一日(月曜日)ニ於てハスピタルフヒールヅに於て契約式を行ひしが之ニ來會したるメソヂスト信徒ハ凡て一千二百人にして五時間以上を費せり而して翌朝に至り此處を出發し四ヶ月間の北部旅行の途に就

ロンドン年會

けり○氏ハニユーキヤスソル及び其近傍に三週間を費やし七月四日ロンドンに向て出發し到着の後直に年會を始め八月四日より十一日に至れり「始より終り迄毫も不和なく皆一致と愛とを以て終れり」とのウエスレーの言及び夫の敎會問題の討議ありし外此年の年會よ就て我儕が知り得べき事なし

氏はロンドンに於て年會を終り八月二十二日コルンウオールに向て出發し其處ゐ六週間滯在して十月八日ブリストルに歸り其地方に四週間を費せしが其間暫時ハ面部に腫物を患へしが裹たる蕁麻を附けて平癒するを得たり、當時キングスウード會ハ沈滯しブリストルに於ては九百の會友殆んど半數に減少せしが只コールフオルド會ハソーマルセット郡中最も多數の會友を有し而して最も活潑に運動せり、ウエスレーハビルに於て新たに會場を開けり此處は近時迄無比の罪惡よ沈みたる邑なりしが今は救主なる神を喜ぶ者多く起れり、氏は此ブリストル行中一事變よ遭遇せりキングスウード學校の出火是なり十月二十四日ウエスレーがバスゐ在りし際夜

キングスウード學校の出火

ロンドン信者中の困難

八時頃一童階段の戸を開きしよ黑烟漠々入る可からず童子大ゐ驚き「火事よ、火事よ」と連叫せしが家に在る者ハ之を聞て皆驚て狂ふ如く復た爲す處を知らざりき少時して隣人ジョン、ハウ梯子に上り斧を以て屋根を切り開き以て煙を逃し同時よ人々頻りゐ水を注射して火忽ち消滅せり斯て神恩の下にジョン、ハウはキングスウード學校を救へり、一日を隔てゝ或人ウエスレーに遇ひ「學校ハ焚けたり」と告げしがウエスレー此報を得し時の心情を陳べて「予は分時も痛歎を感せざりき蓋し予ハ神ハ凡てゐ事を善く處理し給ふを知りたれどなり」と云へり、十一月九日ロンドンに歸り數日の后ノルウサッチに赴き而して復ロンドンよ歸り來りしに此時信者中ゐ一の困難起り居たり即ち平常篤信の名あるもの輕卒なる言語を吐きしより起りし者よしてウエスレーハ其事よ關係ある人々に就て事の始末を問ひ糺せしよ双方の我意と執拗ハ氏も之を奈何ともすること能ハざ唯故意の誣言と人間の惡性とを痛歎するのミなりき氏記して曰く「予ハ暫く之を心の查察者に任せん時到らバ神之を光明の前に出し給ふべし」と、斯て氏は齡六十

有餘のもの數人に洗禮を施し而してリユーイシヤムよ趣き其處ゐて「宗教上反對の未定論說よ對する防護論」を書けり氏ハクリスマス迄此處に留まりてブリストルに歸り其處にて此年を終れり

此年よ於ける迫害

前數年よ比すれば此年ハ大に平靜なりき然れども迫害ハ全く止みしよ非ず少しく緩なりしのみ、愛爾蘭に於てはホヰツトフヒールド殆んど暴民ある羅馬教徒の手に殺れんとし、ロンドンの近傍ノルウードに於てハ暴民等サムエル、コールの家を圍み且つメソヂスト教徒等集會を爲すの故を以て之を焚滅せんと恐赫せり(然れども暴徒の巨魁あるエドワルド、ロストは捕へられてニコーゲートの獄よ繫ぎれたり)、小冊子の發行者も亦敢て手を空ふし居らざりしが彼等は皆其身劣なる冊子に記名するをと耻ぢたり

此年に於けるホヰツトフヒールド

一千七百五十八年　、五十五歳

ホヰツトフヒールドは此年凡ろ七ヶ月をロンドンに、餘を二回の長き旅行即ち蘇國と英國西部の旅行よ費せり、氏は當時身体の健康を失ひ居りしが自ら左の如く云へり「予ハ通常三回ハ說教をなし安息日を除き平日は只一日に一回の說教をなし得るのみ」、又曰く「ウエスレー氏と予とハ或点ゐ於て少しく意見を異にすと雖ども其兄弟たるの愛に於てハ依然として異ならざるあり、予が巡回する時は通常同氏の會友中に於て說教すると恰も我會友中に於てするが如く毫も意を挾む所なし」と○ウエスレーは一月十三日にブリストルよりロンドンに歸り四日の後左の如く記せり「予はワンヅウオルスに於て說教せり、米國より來りたる一紳士復此荒地ゐ傳道の門戸を開けり、予ハ朝ギルベルト氏の家に於て說教せしが氏の僕なる二人の黑人及び一人の半黑人大に覺悟したるが如く見へたり、嗚呼神ハ實に其救の能力を凡ての國人よ知らしめ給ふべし」、然るに氏ハ此年の十一月二十九日左の如く云へり「予ハワンヅウオルスに赴きて近頃アンテギユアより來りたる一紳士ギルベルト氏に屬する二人の黑人に洗禮を施せり其中一人ハ深く已の罪を認め一人(婦人)ハ其救主なる神を喜べり、予が亞弗利加人にして基督信徒となりたる者あるを知りしは之を以て初めとす、神はいかで適

亞弗利加人とウエスレー

黑人中ゐ於ける大事業の萌芽

長旅行

當の時期に至り是等の異教徒に天國の世嗣たるを得せしめ給はざるべきや」是等は實に甚だ簡單なる記載なりと雖も夫の樫の實が樫樹を含むが如く是等數言の中には其時以來今日迄夫の野蠻なる亞弗利加の黑人中に於けるメソヂスト教派の驚くべき事業と其成功との萌芽を含むなり、我儕は當にダホメイ及びギニヤに於けるガムビヤ及びゴールド、コーストのナマクアランド、カフラリヤ、ベチユアナ、ナタル、及びシーラ、レオンに於て數千の亞米利加人の悔ひ改めたるを知るのみならず西印度に於て數万の改悔者あり且つ亞米利加南部の諸州に於ては改悔者の數實に數十万の多きに至れるを知る、此驚くべき神の事業は實に夫のワンヅウオルスに暫時僑居したるナタナエル、ギルベルト氏の家に於て始まりしなり

ウエスレーロンドンに歸り復び長き旅行の途に就きしが此旅行は氏が足跡に隨ひ其概況を記述せんに　氏はヨルク、リーヅ、マンチエストル及びボルトンの諸邑を巡回去てリヴルプールに來り復活日に當りて說教せしが夥多の人民會場に群集し殊に許多の富貴なる紳士淑女ありて終始其說教に耳を傾けたり氏と共にマンチエストルよりリヴルプール迄來りしフランシス、オケレー曰く「我等は十日の間リヴルプールに留まりしが其間ウエスレー氏は朝夕群民に向て說教せり、此處にはメソヂスト信徒の爲めに建てらる便利の一大會場あり然れども工事未だ全く落成せず」と、三月廿八日ウエスレーダブリンに向て出帆せしがリヴルプールより凡そ八英里にて一小船ウエスレーの船に追ひ付きロンドンより携へ來りたる諸書翰を氏に付たせり其中氏が首府に歸來らんことを勸めたる書狀ありて氏は其事を同行者等に議り居りしが其中に風變じ右の小船去り行きたれば今は愛爾蘭に進行するの外なきに至れり、斯くて氏は三月三十一日ダブリンに着せり、氏は殆んど一ヶ月間此處に留まり而して朝五時の說教を止めたると及びダブリンメソヂスト信徒中トーマス、ワルシ歸國れ後は殆んど全く克己の精神あきに至りたることを見て大に心を痛めたり、愛爾蘭の人民は一般に柔弱なりしを以て若し强健なる規則を以て之を律するに非れば遂

愛國に航す

ダブリン會の狀況

に自滅するの外なかりき是を以てウエスレーハ彼等ヨ向ひ夫のルベンの性質に就て說敎せん、氏又契約式を行ひ且つ一日を定めて斷食所禱の日となせり、四月廿四日ウエスレーハオゲレイと共にダブリンを出發し愛爾蘭諸州巡回の途に就けり、リメリックヨ於て氏ハトーマス、ワルシを病牀ヨ訪へりワルシハ今僅かヨ生命を有つのみにして三人の良醫治療に從事し居たるが其診斷ヲ依れば音聲使用の過度なりしと時々の感冒とヨ由り遂に治し難き肺病を起し今既に人力の如何ともする能ハざるに至りしかり、此處にてウエスレーハ愛爾蘭年會を開きしが之に出席したる傳道者ハ凡て十四人なりき、氏ハリメリックに近き一嶋にて青草の上ヨ列座したる數千の人民ヨ說敎せしが音聲を過度に使用したるが爲め翌朝血を吐き而して一週日の間業務を廢するヨ至れり、休息藥用するを一週ヲして略ぼ快復しコルクにて復び業務を執り而してゼーハス、マシオットの葬式を司れり、氏ハ此地方に一ヶ月間滯在し其間暫時キンセールに赴き夥多の兵士の集會に於て說敎し又バンドンヨ赴き僅か二週日前に礎石を置きたる新會場に於て說敎せり、斯て八月八日英國に向て出帆し三日の后ブリストルに着せり

ブリストル年會

ウエスレーの英國に歸りヨるは將さに開かんとする年會の爲ヨして氏は八月十二日より十六日迄之をブリストルヨ開けり、會する者ウエスレー兄弟及びオゲレーの外傳道者三十四人而して十四人ハ試用巡回傳道者ヨ保舉せらるサムエル、メゴットは尙ほ充分なる審問の終る迄其職を停止されウヰリヤム、ダルニーも亦其罵詈し印刷し又免許を受けずして貨物を賣る等の事を止むる迄全く其職を停止さをたりトーマス、ブリスコー又はジヨセフ、ジヨーンスを以て本年中ウエスレーの同行者と定め而してミカエル、フエンウヰックは以前の職業に復へるべきをを勸告せられたり、又多の傳道者は嚴肅を欽ぐの傾きありたれバ向後は談話の際殊に注意すべきと及び健康の許す限りは每金曜日ヨ斷食すべきと等を議定せり而してウエスレーは更に傳道者等に向ひ「諸子は時を閑談に費すか又は拉典語或は希伯來語を學ぶ爲ヨ費すか將た其時と力とを全く他人の靈魂を救ふ爲ヨ費やそか三者中其一を撰ばざる可らず今諸子ハ何れをか撰ぶ」との問をなせしが

其答は「神の恩惠に依り最后の一を撰ぶ」の一言ありき、今又困難中よりありたる夫のキングスウード學校に關し此議會に於て「之を閉づべき乎」との問題出でしが議會は之に對し「若し適當の校長を得らるべくば之を閉づ可らず」との答をなせり、又ウエスレーの出版物を推薦するに於て人々充分の力を盡さゞりしことを發見し向後其賣却を進捗せしめんが爲よ各循回よ於て之を賣り捌く者一人に限り(其人若し之を望まば)其賣却高の一割を與ふることに決せり○此年會に於ては只に會則を審議せしのみならず又教理をも討議せり、四ヶ月前に於てウエスレーがダブリンお在りし時一婦人「信者の完全」に關する教理よ就て氏を難せり即ち其婦人ハ氏に訴へて「足下の傳道者中或は右の教理を恐るべき光の中お置き信者は完全よ達する迄は神の呪の下又刑罰の下にある者おるとを確言し又或は「汝若し完全の位地に達せざる前に死するとあらば心お滅ぶべし」と陳べたり」と云へり、ウエスレーは斯る謬見を排除せんが爲よ一千七百五十八年四月五日ダブリンより一通の長き書翰を寄せて之に答へしが其書翰中に未熟なる傳道者等は斯る事を陳べたるべしと雖ども之れ決して氏が教理にあらざるとを辨せり、是等緊要の点を一定せんが爲お氏は此ブリストル年會に左の問題を提出せり

【基督信徒の「完全」お就て】

問　「完全」とは凡て人の弱点、無智、過失等なき情態を云ふ乎

答　否之に反す

問　凡ての罪より救はれ居らざる者は皆刑罰の下にある乎

答　大よ然らず、誰よりても神を畏れ眞に神を喜ばせんと勉むる者は刑罰の下よあらざるべし

問　既に自ら其位地(完全)に達せりと思考する者よ對し何樣に其經驗を語るべきとと勸むべき乎

答　大なる注意と深き謙遜と神の前よ己を卑ふするととを以てすべきとを勸むべし

問　「完全」の教理お關し公衆の前に於て傳道者、殊に未熟なる傳道者は何如よ語るべき乎

答　餘り詳細おらず只一般の意味を以て又聖書の語を用て語るべし

一千七百五十八年

問　基督信徒の完全には如何なる事を含む乎

答　全心を以て神を愛し而して凡ての惡性は滅却され思慮言行共に全く神と人とを愛するの純潔ある愛より發出する事即ち是なり」

ウオルミンストルに於けるウエスレー及び追害

八月廿一日ウエスレーウエールスに向て出發し九月二日ブリストルより歸り而してジョン、フレッチエル氏及び他の傳道者と基督信徒の完全に關する教理を討議して許多の時を費やし遂に其教條を書して皆之に同意せり、十月二日ロンドンに向て出發しウオルミンストルに於て說教す氏記して曰く「予は妨害のあらんことを預期せしも少も然るとなく會衆の擧動甚だ善かりき我儕は嘗に呪詛瓦石等を受けざりしのみならずサリスベリーに赴かんとして邑中を通過する際には多くの祝詞を得たり」と之れウエスレーがウオルミンストルに來りたる初めにして又其終なり、然れども其後此所にて或る集會を設けられしが其會は殘酷なる迫害の中にありて尙能く運動せり妨害者等は屢々說教所に來り帽子を以て面を覆ひ說教中壁を揚げて說教者と聽衆とを呪詛し且つ嫌惡すべき煙草を喫せり彼等或時はメソ

組長の權限に關するウエスレーの書翰

ヂスト信者等に爭鬪を挑み或時は聖歌を歌ふの際俚歌を唱して之を妨害し而して一度はバック、ストリート會場に在る椅子、窓、講壇等を破毀しジョン、スパイソルを深き池に投じカレブ、ダニエルに重傷を負はしめたり（彼は之ゞ爲に久しからずして眠に就けり）、ウエスレーはキヤントルベリーに於て馬より落ち殆んど生命を危ふせり、此地の一小會は分爭なく紛議なく平和に其道を進行せり、氏はロンドンを出でゝより八ケ月の後即ち十月二十一日ロンドンに歸り、四日の後又ノルウヰッチに向て出發し而してコルチエストルのセント、ジョンス、グリーンに於て說教せり此所は僅か三ケ月の間に百二十人の會友を有するに至れり

ウエスレーは此年に於ても亦種々の困難に遭遇せしが其中の一はリーヅ會の組長等が權限外の事をなせしなりき、ウエスレーは甚く之に反對し左の如き書翰を送れり

「拜啓リーヅ會に關して絕へず小生に來る困難はヨルクシール諸會に於ける凡ての困難よりも多きことに御座候ゞ今聞く處に依れバリーヅの組

長等は斯く々々の人は會より放逐すべしなど申す由小生は彼等ゞ各々其權限を守りて妄りに己が權限外に手を伸べざらんとを希望致候、メゾヂスト會より放逐そべき者と其然らざる者とゝ小生親ら之を判決致度候、フエースとアン、ソルドウヰックは若し之を訴ふべき事實提出せらるゝ限りは會より放逐さるべき者に無之若し新たに彼等を訴ふべき事實現出せば之を小生ゞ前ゞ提出すべき筈に御座候、誰にても憐みを加へざる者ゝ亦憐れまるゝをなくして審ばかるべく候敬具

ロンドンゞ於て　ジョン、ウエスレー」

一千七百五十八年十二月九日

一千七百五十九年　五十六歳

ウエスレーはブリストルに於て此年を迎へ而して一月十日ロンドンに向て出發し六週間滯在せり、當時英國民は佛人侵入の報に由て大に動搖し而して二月十六日を以て公衆の斷食日と定められしが當日ウエスレーゝ午前五時にワンヅウォルスに於て、九時と三時ゞスピタルフヒールヅの會堂に於て、又八時半ゞコアウンドリゞ於て說敎せり、三月一日ノルウヰッチに向て出發しイヴエルトン及びコルチエストルを經て三月六日ノルウヰッチゞ着し四月二日迄其地に留まれり近時ノルウヰッチゝメソヂストの諸會中肝要なる地位を占むるゞ至りたればウエスレーゝ先ゞ舊鑄鐵場を變じて會場とゐし今又ジエームス、ホヰートレーの講義所をも其會場に充てたり、先ゐホヰートレーの會に屬せし數百の會友今は一人の殘る者なきに至り千五六百人の席料を拂ひ居りし者今は一人も之と拂ふ者なく誰ゐても一言の斷りなくして自由に席に着けり、ウエスレー曰く「万事皆鑛金より、否灰燼より造成せざる可らず」と、困難は決してウエスレーが氣を沮喪せず却て氏をして益々剛氣ならしめたり、氏ゝ朝夕コアウンドリ(鑄鐵場)に於て說敎し一週日ゐらずして一百の會友を得一ヶ月を出でずして種々の方法に依りホヰートレーの亡羊の復歸せし者と新改悔者とを合せて殆んど六百の會友となれり而して氏は今より二週間滯在そるとを得ば會友は一千人に至るべきとを信せり、氏は諸組を立て且つ規律ある會友とすゐとに充分の力

ノルウヰッチに於けるウエスレー

北部巡回

ニューキャスソルとウエスレー

「予が熱心は何所にあるや」

を盡し而して此地に留まること一ヶ月、四月二日北部旅行の長途に就けり、氏い六月五日ニューキャスソルに着せしが記して左の如く云へり「實に予は他の世あることを信せざりせば生涯夏期を此處に送るべし予はグレート、ブリテン中之に比すべき愉快ある處を知らず、然れども予は天の國を索むる者あるを以て暫く地の漂蕩者たるを以て滿足そべし」、氏はニューキャスソル及び其近邑に留ること一ヶ月其際長更の四季會を開き而してニューキャスソル循回中に凡そ一千八百の會友あることを知得せり、氏のニューキャスソルに在る間に孤兒院に於てのみならず歴々屋外に於て説教せしが(是れ屋外に於ては孤兒院に於けるより二倍の聽衆に説教するを得たればなり)之に就て左の如く記せり「奇なる哉惡魔は屋外説教を好まざるなり予も亦敢て之を好むに非らず予い便宜の會場、柔らかなる椅子、奇麗なる講壇を欲する者なり然れども若し一人の靈魂ふてもも多く救はんが爲に是等の嗜好を擲たずんば予の熱心は何処に在るや」、或時氏が市中両替商店の階段に立て説教せし際聽衆中より氏に向て泥土磨卵等を投せし者ありしが一人の身体肥大

醉婦ウエスレーを保護す

して酒に醉ひたる賣魚婦(邑人の恐れたる婦)忽ちウエスレーの立ちたる階段に上り來り一手を以て氏が頸を抱き他手の拳を卑劣なる迫害者の面前に振翳し大喝一聲「汝等若し此無害なる善人に向て今一度手を擧げなば我は直に汝等を打ち倒はすべし」と叱せり、此恐嚇によりウエスレーい離あく説教を終ることを得たり

ロンドン年會

ウエスレーノルウヰッチの會友を戒しむ

ウエスレーは七月二日ニューキャスソルを去り八月七日ロンドンに着し翌日より三日の間年會を開き以て傳道者の共職務に適應するの精神と實行とを以て其務を執りしや否を査察せり此年會い終始一致と愛とに盈てり、ウエスレーロンドンと其近邑に在ること三週日にして再びノルウヰッチに向て出發し其處に着してホヰートレーの講義所及び會衆を取りたるは多少困難の元なりしことを發見せり、氏曰く「八月三十日—予は粗野喧噪なる大衆に説教せしが其時直に彼等が如何なる教師の下に在りしかを認知することを得たり、予は彼等を改革するか然らざれば之を會より退けんと決心せり依て翌夜説教の後左の二事を彼等に告げたり(一)説教の終るや否や直

終夜睡らず

倦勞の一要

ゑ高聲を發し又ハ堂中を奔走するハ甚だ適當なる舉動に非ると(二)說教の後直に堂の各所ゑ集會し禮拜の場所を咖啡所となすハ惡き習慣なると、而して予は更に彼等が堂中ゑ於ては一切談話をなすとゐく全く靜肅ゑ堂を退出せんとを求めたり、而るに九月二日の安息日に於て予は彼等が皆全く靜肅に堂を退出するの狀恰も多年習練の結果なるが如きを見て大ゑ愉快に感せり」と、氏はノルウヰッチに留まると十一日にしてロンドンに歸りしが途中コルチエストルに於て說教し終夜睡ると能はざりき氏が終夜睡らざりしハ六歲以來是を始めとす氏曰く「事皆一なり、神は睡眠ゑ由ても又ハ之に由らずしても同く我併に健康を與へ得るなり、予ハ常例の如く起き五時ゑ說教せしも毫も疲勞と坐睡とを覺ハざりき」と

ウエスレーが傳道を始めし頃ゑ當ては氏及び氏がオックスフオルドの敎友等ハ恰も流刑に處せられたるが如く凡ての敎會敎師等に嫌忌され多くの人々よりハ罵詈攻擊を受けたりしが當時ハ事情一變してヴエン、ロメーン、マダン、ジョーンス、ウオーカル、ミルナル、グリムショー、ベリッチ、ヒックス及び其他の人々熱心に單に信仰ゑ由てのみ義とせらるとの大なる敎理を說て大ゑ成功し而して他の敎師等の彼等ゑ倣ふ者毎年其數を增すゑ至れり

ウエスレーノールの佛國囚人を見る

ウエスレーロンドンに歸て後直ゑウエスト、ストリート會場を修繕すべきとを命せり是れ其會場の要材多く朽腐したればなり、氏は夫よりキャントルベリーゑ赴き說教をなせしが聽衆中ゑハ二百の兵卒及び各級の士官あるを見たり、又ドーヴアルに於ては此時恰も新會場落成の際にしてウエスレー往て開場式を行ひ而してロンドンに歸り九月二十三日ムールフヒールズゑ於て夥多の聽衆ゑ說教せり、氏記して曰く「誰ゑ郊外說教の時代は既に過ぎ去れりと云ふ、見よ(一)聽衆の數は前時ゑ勝り(二)罪人に認罪改悔せしむる神の能力は今著しく現はるゝに非ずや」と、夫よりブリストルに到り餘暇を以て氏が說教集第四卷を完了し謂て曰く「恐くは是予が說教集を出版するの終りなるべし」と、佛國の囚人を見んが爲めゑ氏はブリストルより一英里なるノールに赴き彼處に一千一百の囚人薄き布を覆ふたる蓐床の上

公書

に伏し死の險難中ゝ在るを見てブリストルゝ歸り同夜「他國の人を虐たぐ可らず汝等は埃及の國に居る時ゝ他國の人ゝてありたれば他國の人の心を知るなり」との題を以て說教し二十四パウンドの義捐金を得て靴足袋、肌着、胴服、及び股服等を購求し而して夫の憐れある囚人等に與へたり然れども氏は尙之を以て滿足せず遂に左の一書を裁せり(此公書は十月二十六日の「ロイドス、イヴニング、ポスト」ゝ掲載されたり)

「謹啓予はブリストルに到着せし以來ノールの佛國囚人ゝ就て種々恐怖すべき話を耳ゝせり即ち「彼等は多人數一所に群居せしめられて殆んど呼吸を保持すべきの餘地なく而して其居室の臭氣は實ゝ堪へ難き程ゝて其食物ゝ犬に與ふべき食物其肉ゝ不可食肉其パンは腐敗して滋養ゝ適せざ從て斯る殘忍なる待遇の爲に死する者其幾許なるを知らず」等實ゝ聞くも痛ましき事のみあるを以て予は親しく其實情を知らんと欲しノールに赴き獄內の各室を一々巡視せしに按に相違し却て左の諸事を發見せり即ち　(一)囚人等ゝ(己が好ゝ從て)終日住ふべき廣く且つ便利なる場所を有する事　(二)予ゝ入りたる室にゝ毫も惡臭ゝかりしのみならず却て予が英國又は他國に於て見たる獄舍よりも一層淸潔なりし事　(三)許可を得て肉室に入りしに其處に新鮮にして肥へたる牛肉(予が好んで食はんと欲する如き)の二大片の釣り下げありし事　(四)室の一方には多量のパンありて一人其中の一塊を取て之を裂きしゝ其パンゝ良き粉を以て造りたるものにして善く燒き且つ充分口に適ふ良味のものなりし事　(五)夫より病院に往て此時候の不良なるゝも係はらず千二三百人の中病床ゝ在て病の危篤ある者ゝ僅に三十人ゝ滿たざることを發見したる事　(六)此病院は予がロンドンゝ於て見たる何れの病院よりも淸潔良好なりし事等なり、今予が之を言ふは無辜を辨護し併せて英國民の榮譽の爲に是等の事實を陳述するは予ゝ義務ありと信ずればなり

然るゝ茲に一の予が注意を惹しきものは囚人の多くゝ殆んど裸体ゝありしとなり最早冬も近づきゝるに彼等而も我國より暖かなる國ゝ住み慣れたる囚人等は夫の寒き獄舍の中ゝ呻吟せり、ブリストル紳士諸彥の寬

大なる心事憐憫の至情は此慨然なる囚虜を救濟せざるべき哉、彼等ハ抑何者ぞ之れ戰爭中稱讃すべき働きを爲したる者にあらずや實ヨ彼等は善く戰ふて倦まざるの勇士にてありしなり、火曜日の夜我僧ハ各々其力に應じて些少の事をなせしが若し此事が諸君が爲さるゝ(其適當と認めらるゝ方法に從て)大なる慈善の爲に全く忘れられなば予は誠に滿悅の至りに堪へざるなり、當市及我國の榮譽の爲め宗敎の價値の爲め及び夫の七倍して返へすの道を知る神の榮光の爲に之を爲さゞ如何可有之哉

勞力の結果

一千七百五十九年十月二十日

ブリストルに於て

ジョン、ウエスレー

ウエスレーの勞力空しからずしてブリストルの一會社ハ直ヨ許多の臥蓐及びブランケットを送り其后久しからずしてロンドン及び其他の地方ヨ於てもウエスレーが說敎及び右の公書中に述べしと同一の目的を以て同く義捐を募ると起れり、十月二十六日ロンドンに歸り十一月二十二日に至り復びエヴァントンに向て出發せり氏ハ途中ベッドフォルドに留まりしが記して左の如く云へり「此日の說敎にハ夥多の人々來集せり然るヨ室の下なる家の臭氣甚だしくして殆んど堪へ難き程なりき予は今迄家牢の上に說敎所の設けありしを聞かず實ヨ斯る所に說敎を聽かんが爲に來る者は眞に福音を愛する者ならざる可らず」、十一月二十八日ロンドンに歸り十二月九日始て全會衆の愛餐を行へり今迄メソヂストの愛餐に與かるとを得る者は只バンドの中ヨ在る者即ち既に義とせられたる者のみなりしも此時組會員即ち悔罪者も同く此基督信者の交りに入るとを許され其ホ少許の麭菓と水とを頒て兄弟の交親を表ハせり、仝十二日の午后ハ近頃設けられし英國博物館に於て暫く時を移し二十三日にはコルチエストルの新會場を開けり氏は此會場を以て大さに於ても音壁の爲めヨも英國に於て氏ぞ知れる會場中最良の者なりとせり、年末に至りノルウヰッチホ赴きしが其會の人員は減少し居りしも會友ハ皆喜んで敎訓、勸告、又譴責をも受くるの精神ある者のみなるを見たり

家牢の上なる說敎所とウエスレー

愛餐

一千七百六十年　五十七歳

ウエスレーハノルウヰッチに於て此年を迎へ一月七日ロンドンに歸り而して當時修繕增築したるウエスト、ストリート講義所に於て說敎せり、氏は三月三日ロンドンを發し六ケ月ヨ亘る長旅行の途ヲ就けり、ウエッドテスベリーに於ては新講義所ヨ於て說敎せしゴ聽衆は數に於ても嚴肅なるヨに於ても他に多く其比を見ざる處ヲして朝五時の會衆の數は實にロンドンのファウンドリーに於ける會衆ヨ越へたり、ボルスレムハ殆んど陶器製造人のみの一小邑なるゴウエスレーは此所ヨて三回の說敎をおせり而るに其聽衆中或者ハ全く無頓着ヨして又或五六人の者は說敎中終始談笑せり、又一人ハ土塊を投じてウエスレーの頭を傷けしもウエスレーは更に動せず尙其講說を續けしが聽衆も亦更に乱れずして靜聽せり、

長旅行

氏ハリーヅよりリヴルプールヨ到り三月三十日愛爾蘭ヨ向て出帆せり四月六日(復活日)に於てハ英國ヲ於て氏が常例なる朝四時の集會をダブリンヲ於て開けり、ダブリン會は當時五百有餘の會友を有し前數年に比すれば其數大に增加したり、ウエスレーダブリンに働くこと三週日ヨして后各地の巡回を始めさり○當時キヤスソルバールに於ては瑞典の船を掠めたる海賊の審判を聽かんと欲して許多の紳士四方より來集し而してウエスレーの說敎をも併せて之を聽けり、ウエスレー曰く「其審判は予が說敎したる公庭ヨ於ておこしを以て人々ハ開庭時刻より一時間前に來會し始に予が說敎を聽けり」と、ウエスレーハ既に愛爾蘭の西端に達せしを以て二人の巡回傳道者ウイリヤム、レイ及びゼームス、グラスブルックと共ヨ途を東方に轉せり、彼等シヤンノンのカリックに達しウエスレー說敎を始むるや否や市長暴民を率ゐ來りて大鼓を鳴らし以てウエスレーゴ說敎を妨止せんとせり然るに彼(市長)が市中ヨ在て暴民等に說話するの際ウエスレーは徐かに聽衆を屋後の園庭に移し而してウイリヤム、レイは戸側に立ち居りしゴ夫れ暴民の巨魁戰斧と劍とを携へてウイリヤムの許に走り寄り戰斧を彼ゴ手頸に加へ尙進んで園庭の入口ヲ到りしゴ爰ヨゼームス、グラスブルック戸を堅く閉て立ち居りしを以て庭內ヨ入るを得ず遂ヨ暴民等と共に家を廻り

カリックに於ける迫害

て園庭の墻壁を越へ甚だしく瀆言詛詞と吐きつゝウエスレーの側より突進し而して「汝は今日此處より説教す可らず」と叫べり然るにウエスレーハ全く沈靜にして毫も動する氣色なく徐かに答へて「予ハ之を爲さんとするハ非ず何となれば最早之を爲し終りたればなり」と云へり是に於て彼は非常に激怒し其携へたる戰斧の柄を以て之を折るゝ迄夫のゼームス、ゲラスブルックを打ち而して恨をウエスレーの帽子に洩さんと欲して烈しく之を打ち且蹴りしが一人の紳士之を彼が手より奪ひ取り而してウエスレー等ハ徐かに其邑を出で去れり、ボルターリングトンに於ては朝五時に説教し又紳士等の爲に再び十時より説教せり然れども此十時の説教も彼等の爲にハ尚ほ早くして彼等は其寢室を離れて説教に出るとを得ざりき、クーリラフに於てハ許多の聽衆二十英里四方より來集せり氏ハ此處にて實着よして聰敏なる長吏等を集めて四季會を開けり○ウエスレーは毎日説教し而して長き旅行をなせしが其道は粗惡より、其乘りたる馬も種々ありて或時は牡驢馬の大さより過ぎざる馬に乘りて旅せり、斯くて氏は七月四日にリメリックより

受國年會

歸國より於ける困難

着し其處にて十人の愛爾蘭傳道者と共に三日間の年會を開けり、十三週間の巡回の後即ち七月二十日ダブリンより還りしが氏ハ其數百英里の巡回中數十回の説教をなし且つ屢々大なる困難と危險とに遭遇せしも神常に氏と偕より在し給ひされば氏ハ常に歡喜に充ちて益々榮光の事業に於て榮へたり氏ハ各會々友の數を調べてコンノートに二百有餘、ウルストルより二百五十、ソインストルより一千、マンスターに凡そ六百の會友あるを知得せり

ウエスレーハ七月二十五日より開くべきブリストル年會に臨まんが爲に今愛爾蘭を去らざる可らざりしが其年會迄にハ未だ五日の日子あるを以て現今に在ては毫も困難なしと雖ども當時に在てハ大に然らざりしなり即ち毎日定期航海の汽船なく帆船の渡海の如きも尚甚だ不規則にして少も信據する能とざりき、ウエスレーはキャプテンダンセイの船の十九日或は二十日に出帆するを聞きダブリンに來りしに其船は早くとも廿五日即ちウエスレーが定めたる年會の初日前よは出帆せざるとを聞知し更にチ

エストル船を尋ね而して其船の二十二日に出帆せんとするを知り此船にて渡海せんと定めたり然るに其日の朝に至り船長ハウエスレーに自分ハ將軍モンテグを待ち合すべきを以て當日の出帆は覺束なき由を言ひ送れり、斯の如きハウエスレーが大なる試みとなりしも氏は徐ろに左の如く記せり「然らば我儕ハ愛爾蘭に於て今一日を費すを得宜しく此日を我儕の此國に於ける最終の日なるが如くに費すべきなり」、遂に氏は七月二十四日四五十人の乘客と共にチエストルに向て出帆し二日の後(其間海上全く平穩にしてウエスレーは二回の有益なる說敎をなせり)即ちウエスレーのブリストルに着すべき時刻に後るゝこと三十六時間にしてパークゲイトに上陸せりウエスレーは品性中最も著名なるは氏が既定の時間を守るの嚴重なることなりしの此時船客は上陸したるも干潮の爲にウエスレー等の馬は上陸するを得ず去りとて氏ハ馬を上陸せしむる爲に滿潮を待つべきに非れば直に一匹の馬を購求し別に一匹を借りブリストルに向て急行せり然るにウオルヴアルハンプトンに於て兩馬共に用ゆべからざるに至りたれば之を其處に舍て他に馬を雇ひ急に其途を進みしも暫時にして一馬ハ跛となり又ウエスレーが乘り居たる馬は轉倒して大に氏を苦めたり斯く彼等ハ非常に困難して遂にニユーボルトに着し其處にて馬を舍て二輪馬車に乘り七月二十八日の殆んど夜半に至てブリストルに着せり氏記して曰く「予は次の二日間を全週予を待ち設けたる傳道者等と共に費せしが彼等の愛と一致とハ予をして凡て予が勞働の苦を忘れしめたり」と我儕一千七百六十年の年會に就てハ此他別に知る所なし其年會は七月二十九日に始まり全三十日に終れり、ウエスレーはロンドンなる家族を離れ居たると爰に六ケ月なるが年會の后一日を經て又一ケ月間の旅行をコルンウオールにせり

ブリストル年會

斯運動の大任ウエスレーの一身に萃まる

チヤールス、ウエスレーハ最早巡回傳道者に非ずして只ロンドン及びブリストルに於てのみ說敎し而して貴重なる許多の聖歌を書けり、斯くメソヂスト運動の困難なる事業ハ今全く其兄弟の一身に萃れり

ウエスレーが勞働の一班

ウエスレーの勞働の一班は氏がコルンウオール巡回中諸會の訪問及び

旅行を除て)十一日間に三十回の説教をあしさるを以て推知するを得べく又之を以て氏ゞ國中一般の勞働の實例とするも敢て不可なきなり、氏ハコルンウオールよりブリマウスに歸り而して其地の會友は七十人より三十四人よ減少し其少數の會友も全く死せる有樣にて恰も頑石の如くなるを發見せり、十月三日ブリストルに歸り其地方よ三ヶ月間滯留し而して憐れなる囚人等の爲ゆニューゲイトよ於て一回の慈善説教をなし且つ再びノールの佛國人を訪へり、氏ハ他の人々を激勵するの望みを以て更に佛國囚徒の爲に義捐金を募り而して其金は全く麻布と胴服とに費すべきことを命せり、氏はブリストル會の會友各個人と語る爲に三日間を費せしが自ら記して「彼等の多くハ益々世の財に富むの狀況なるゞ予ゞ今危ぶむ所は彼等ゞ再び世を慕ふの心よ返り共宗教は只夢のみとあらんとおもふ」と云へり氏は歩を進めて更に他の最も肝要なる事をなせり即ち會友に請ふて其兒童を已が許ゆ集め之を二分して一半を男兒の組とし他の一半を女兒の組とし而して男女の組共に之を二分して各二組となゑ適當の組長を撰んで各

メソヂスト最初の問答綴

自共組を教導せしめ一週に二回總兒童を集めて己れ自ら之を教へたり、之れ恐くハメソヂスト最初の問答綴(キャテキユメンノクラス)ありしなるべし

ジョージ二世の薨去

ジョージ第二世の在位三十四年よして七十七の壽を享けケンニングトンれ宮殿に薨去せしハ恰もウエスレーがブリストル滯在中の事なりしが氏は篤き忠君の精神を以て左の如く記せり「十月二十五日ージョージ王其祖先の許に往き給へり、英國ハ何時斯君に勝る王を見るを得べき乎」、ウエスレー及びブリストル會ハ次の金曜日を以て斷食日と定め此日に於て國民の上特に新王の上に神の恩惠あらんとを祈るとなし爲よ五時九時一時及び八時半に於て特別の集會をなせり、氏は十一月八日ロンドンに歸りしが共ロンドンを離れ居たること爰に八ヶ月なりき、氏ハ此后只キャントルベリーとドーヴァルに往きしのみにて此年殘餘の日子は全く之をロンドンに費せり、ドーヴァルに於ては靜肅にして且熱心なる人民及び英國に於て最も巧みなる謳歌者を見たり、ロンドンに於ては病者を訪ひ認罪者の集會よ臨みしゞ氏は斯る集會にハ常よ身親ら臨まんとを欲そと云へり、氏は説

教、新聞、新聞紙の投書等を以て此年を充さし終始不倦不撓の勞働を以て一年を送れり

過去二十五年間傳道の結果

回顧すればウエスレーが米國に向て出帆せしより既に一世紀の四分の一を經過せしが其間傳道の結果如何を觀察すれば轉た感歎に堪へざるものあるあり、夫のホヰツトフヒールド及び其傳道者等の勞働成功い暫く措き單よメソヂストの働きのみに就て考察せんよ、該教派は英倫及び愛爾蘭の各國各地殆んど到らざる所なく、九十人の巡回傳道者及び許多の定住傳道者、組長、會計吏等い皆ウエスレーが指揮の下よ運動し、講義所を新築すること五十ヶ所以上に及び其他私宅、學校、穀倉、私室等の說教所たる者百を以て數ふべく、之に加ふるにウエスレー兄弟い聖歌及び詩の書冊にしたる者凡そ十二卷、雜書となしたる者凡そ三十を出版せり、此外ウエスレー一人の出版ふ係る者日誌九卷、說教及び雜書類凡そ百三十、別に新約全書小註、說教集及び基督教文庫（クリスチヤンライブラリー）等を合せて殆んど七十卷の多きあり、何れの時代何れの邦國を問はず一人にして同年數の間に之と匹敵するの事業をなせし者あるや、抑ウエスレーは全く無資無財なる一個の教師として一生の大事業の路程よ上り、友なく又保護者なく、官吏は彼を恐嚇し、教會の教師は之を放逐し且つ甚だしき譏謗讒害を書き、新聞雜誌は彼を愚弄し、謳歌者は聞くに堪へざる不潔の俚歌を以て彼を嘲笑し、暴民等は痛く彼を攻擊して殆んど死よ至らしめたること數次、而して同役者の彼を棄てゝ全く之よ反對せし者も少なからざりき、其斯の如くなりしにも拘いらず彼が最初二十五年間勞働の結果斯の如き、嗚呼天下何人か敢て彼と肩を並ぶることを得べき

一千七百六十一年　五十八歲

新王ジョージの治世

新王ジョージの代は概して盛代と稱して可なり、財貨は國に充ち荒野の開拓鑛山の開堀各其緒に就き而して國の輸出物は前代に倍するに至れり然るに英倫及びウエールスの人口僅かに六百万に過ぎざりしも其半は尙大麥及び燕麥製の餅菓を食ふて生活せり

チヤールス及びホヰツトフヒールドが漸く健康を失ふ

チヤールス、ウエスレー及びホヰツトフヒールドい共よ不健康にして年中多くは公役を廢せしもウエスレーは益ゝ强壯にして一層活潑なる運動

をなせり氏が此年初度の旅行い一月九日より二月七日に亘るノルウヰッチ行にしてロンドンに歸て後は數日の間ロンドン會の各組を訪ひ而して百六十人を沙汰して尙二千三百七十五人の會友を有せり○ウエスレーの生涯は苦心煩慮を以て充ちたるが之れ實に避くべからざる自然の理あり誰か身に種々の大責任を負ふとおくして能く一大運動の主動者たるとを得べきや、ウエスレーは既に許多の困難なる問題を整理するの止を得ざる場合に遭遇せしが今復一千七百六十年より數年ゐ亘りて他の困難なる問題い其前途に横はれり氏は毅ゐ按手禮なき男子を傳道者となして大ゑ教師等を奮動せしが今い婦人が同一れ聖職を行ふとを許すべきや否やを決せざる可らざるの地位に立てり、敬虔ある婦人サラ、クロスピーい一千七百六十一年の始めにロンドンを去てドルビーゐ赴き組々を會して大ゑ成功せり二月八日に於てい凡そ三十人の來會を預期して一の組會を開きしが豈に計らん凡を二百れ來集者ありて大に彼を驚ゐせり彼記して曰く「予は主の我僧の中ゑ在し給ふ豈るべく又愛ぶべき狀況を見たり予い斯く公けゑ

ウエスレーが目前ゑ横はれる一難題―婦人傳道者

サラ、クロスピー

勸話するは予に於て至當なるべきやを疑へり然れども斯く多數の人々各個に就て語るは到底爲し得べからざるとなるを知り先づ聖歌を歌ひ祈禱をなし夫れより主ゐ予ゑ爲ゑ給ひし或事を語り而して彼等ゐ罪より離るべきとを勸めたり」と次の金曜日に於ても大凡同數の大衆に向て勸話をなし而して「主は斯る公けゑる予が行爲に關する凡ての予が疑惑を除去し給ひたれば予が靈い斯く人々ゑ語るを以て大に樂めり」と云へり、是れ實に驚くべき有樣ふして此新婦人傳道者は此事に就き書をウエスレーに寄せたれば

右婦人ゑ寄せたるウエスレーの答書

「拜啓華翰水曜日の夜ミス、――――より受取り拜誦致候、小生い足下の行爲を以て未だ分を越へたるものとは考へ不申候足下が爰に至りしと實に勢の止むを得ざるとにて足下に於て他ゑ取るべきの道ゐかりしと御座候此後復集會なされ候節は會衆に向て只諸子い予を大ゐる困難の下に置けりメッチスト教派い婦人の傳道者を許さず予も亦斯る身分の者に非ず然れども予い予が心中ゑある者を粉飾する所なく有りの儘

に陳ぶべしと云て勸話あされ候はゞ大なる障害を除き且つゼー、ハンプソンの爲に道備へと相成可申候、小生い足下の行爲に於て何の律法をも御破りあされしを見ず、是より益〻穩便に聲固に御進み可被成候、若し時間の餘裕あらバ短話の前に聖書中或章の小註若くい最も活氣ある說敎を朗讀なされ候方宜しかるべく候之れ往時婦人等ゞ爲せし處に御座候

當地に於ては神の事業大なる勢力を以て進歩去認罪改悔の者續々相起り申候今朝も小生は此月の中に惡魔の軛を脫して自由の身となりし四五名の者と談話致候小生は過る五週日内に一組に於て六人の罪の赦を得し者及び一バンドに於て五人の再度の恩惠を受けし者あるを信じ申候、願くは平安足下等諸ての上にあらんことを拜復

ロンドンに於て　ジョン、ウエスレー」

是れメソヂスト婦人傳道者の起初

一千七百六十一年二月十四日

是れメソデスト敎徒中婦人傳道の起初にしてウエスレーの年會い公然之を認可せしをなしと雖ども尙氏が死するの日迄實行されし者なりサラ、

クロスビーは一千八百〇四年即ち其死に至る迄傳道を續けハンナ、ペリン、ミス、ボサンクエット、ミス、ホラル、ミス、ニコーマン、メーリー、バレット及び其他の婦人等も之に倣ふて傳道の務を執れり

三月九日ウエスレー北方に向て出發せしが此旅行は殆んど六ケ月に亘れり、ボルミングハムに於ては會場に溢るゝの聽衆に向て說敎しウエドテスベリーに於ていい野外に於て八千乃至一万の聽衆ありたり、氏いウオルヴアルハンプトンに着して左の如く記せり「今迄此兒猛ある邑に於て說敎したる者なしと雖ども予い神の祐助に依り之を試みんと決心し旅宿の庭ふ卓子を置かしめ而して徐ろに說敎を始めたり粗豪なる人民の斯く多く集まりしい予が稀に見し處あるが彼等は予が說敎中に於ても又說敎后彼等の中を通過する時に於ても毫も妨害を加へざりき」ウエスレーは夫より進んでダッドレー、ビュブルック、ボルスレム、コングレトン、マクレスフヒールド、マンチエストル及びリーヅに到り而して其處(リーヅ)に於て傳道者れ會議を開き記して左の如く云へり「予は此地方の傳道者等に皆來會せんとを

蘇國巡回

ウエスレーが勞働の量

ボズマン女

乞ひ而して朝夕共に愉快なる集會をおせり……」、氏はリーヅを去り三月二十五日マンチエストルに歸り夫よりチエストル及び他の各所を巡回してリヴルプール、ボルトン、ホワイトヘーヴン等を經四月二十七日ソルウエイ、フリスを渡りて蘇格蘭に入り而してエデンボロー、ダンデー、アベルデイーン等を巡回せり、アベルデイーンに於ては校長及び管理者の許しを得て大學の講堂及び庭園に於て說敎し而して此處の小會ゑ新ゑ四十人の會友を增し現員九十人となれり、トウイード河北に在るゑ二週日ゑして五月十四日ボルウイックに來り四日の后ニューキヤスツルゑ着し而して其地方を巡回するゑ一ヶ月に及べり、氏が勞働の非常なりしゑは左の言を以ても略知するゑを得べし即ち記して曰く「予は身体を害ふゑおくして一週中三日間は日に三回の說敎をおすゑを得然れども當時は諸の組會を開き諸會を勸誘するの外予が說敎の度數は遙かに之に超へたり」と、六月二十五日氏はエデンボローに到り看樓より數百の人民の市街に簇立する者ゑ說敎迂回してスカルボローに到り看樓より數百の人民の市街に簇立する者ゑ說敎せり此處に於て最初のメッヂスト信徒はボズマンと名くる敬虔なる婦人ゑして彼ハ常例に組會ゑ列なる爲に十四英里を距つるロビンフード、ベイに赴けり(其往來ゑは屢々驢馬を用ひたり)、ヨルクに於ては會衆甚だ風雅にして

ハウオルスに於けるウエスレー

ボルスタル最初の愛餐

ウエスレーはエデンボローを去てより始めて斯る聽衆を見たり然れども會友の多くは信仰上全く死して毫も活氣なく從て會友の數も更に增加するゑおき狀況なりしゑウエスレーは屋外說敎を怠りたるを以て其一原因となせり、七月十三日の日曜日に於てハウオルスに於ける群集ハ實ゑ夥しくしてグリムショーは一窓より外部ゑ棚を架せしめウエスレーをして其上より同時に內外の聽衆に說敎せしめたりウエスレーが此美なる會堂園庭ハ夥しき群集を觀望ゑて「此荒兀たる山間に於て神の成し給へる事は驚くべきかな」と叫びしハ寔ゑ故あるなり、氏は七月十九日の日曜日ゑハリーヅ宅ボルスタルに於て三回の說敎をなし且つ愛餐を行ひしがボルスタルゑ於て之を行ひしは之を以て始めとす氏曰く「予が彼等ゑ愛餐の設けられたる眞の目的は男女を問はず誰にても自由に神の榮とおるゑを親しく談話するにありと告げたる時多くの人々ハ之を聞て驚けり」と、次週間ハ之を近

邑の傳道に費せしゐ共間一回ハマトロック、バスの岩洞に於て説教し又ロセルハムの八角八面の新講義所を開き而して左の如く云へり「地所の廣さ充分なるに我儕の家を他の形よ造るは遺憾の事どもなり」傳へ云ふウエスレーが開場説教をなせる時暴徒等場中に驢馬を追ひ入れるに其驢馬は側堂に佇立し目を擧げて説教者を凝視し説教の終るに及んで優々として出で去り而して毫も暴民等ゐ望みし妨害を與へざりしのみあらず却て最も注意しさる聽者にてありしと、リーヅと殆んど同大よして是より遙かよ勝りたる邑ポストンよ於ては人々屋外説教ふ慣れざるより大よ之に驚けり、ウエスレーはポストンより「ノルウヰッチ」に到り八月二十二日(土曜日)よロンドンゐ着し而して左の如く記せり「予は神の事業の大なる速力を以て進歩するを見る、何處に於ても會衆の數前數年ふ比それば大に增加し日々或は己が罪を認むるあり或ハ神と全き和ぎと爲すあり或ハ一旦乘てたる信仰を回復するあり、或は其甞て味ひ知らざりし安息を得し者等ありて大に好景況を呈せり、然るに之と同時よ敵は敢て其手を空ふするとをせず

陸馬ウエスレーが説教を聽す

神の事業の進歩

勉めて善き種の中に稗子を蒔くとをなせり予ハ明かに之を見しも稗子を扱き去ふんと欲して麥をも扱き取らんとを恐れ敢て酷しき手段を之用てを撲滅するとをせざりき」

ロンドン年會

ウエスレーは九月一日に於て年會をロンドドに開けり、不幸よして此年會の記錄を發見するを得ずと雖ども夫の教會分離論は尙此會議の一問題ありしや明かなり、年會の後二週間ロンドンよ留まり而して九月二十日(日曜日)馬車よてブリストルに赴けり氏ハ其處にて次の六週間を費せしが記して左の如く云へり「此處に於ても神の事業の大よ增進しさるを見て大よ滿足せり會衆ハ非常に多く人々は實に飢へ渴く如く義を慕ふの狀況にて新たよ罪を認むる者悔改する者日々踵を接して起れり實に神は今年其靈を我儕ゐ惡くは嘗て見しとなき(確かに二十年來見しとなき)情況にて英國及び愛爾蘭の各地方に灌ぎ給へり……」キングスウード會ハ從來會友の數大に減少し居しが當時ハ復殆んど三百の多きに至り而して多くは數年間殆んど忘却せし全き救をば再び渴望せり、ウエスレー十月三十一日

ブリストルの教況

ロンドンに歸り直ち「基督信徒の完全」(クリスチャン、パルフエクシヨン)ふる題を以て數回の說敎を始めたり、十一月二十三日キヤントルベリーに赴き幾多の人々の其筆て味ひ知らざりし神の大なる働きを心中に領得し居るを見たり、曾時コルチエストルに赴きし外此年は全くロンドンに於て費し而して「基督信者の完全ふ關する詳說」を筆せり

此年に於けるホイツトフヒールド及びチヤールス

一千七百六十二年　五十九歲

此年ホイツトフヒールド及びチヤールス、ウエスレーは前年ふ比して多くの說敎を爲したりと雖ども尙身体尪弱ふして前の數年ふ比すれバ其勞働大に劣れり、ウエスレーは一大集會を以て此年を迎へスピタルフヒールヅの會場はロンドン會二千の會友を以て充滿せり、氏は當時ロンドンに於て大ふ働き居りしベリッヂの後を充てんが爲に一月二日エヴアルトンに赴き兩安息日ふ於て活氣ある大衆ふ說敎せりエヴアルトン旅行中に氏は周圍の諸村落を周り遍く神の恩惠の福音を宣べ傳へ而してハルストンふ於ては嚴冬中なりしにも係はらず月光の下に於て說敎せり、氏が到る所夥多の人々群集し其說敎を聽て或は聲を放て痛哭する者あり、死せるが如く地に倒るゝ者あり又全く平和を得る者等、數多ありたり、一月十二日ノルウヰッチふ來り而して組會を忘る會友二百人を退會せしめしが殘り凡ろ四百人の中熱心ある者は其半に居れり、一月二十三日ロンドンに歸り三月十五日愛爾蘭ふ向て出發し途をブリストル及びウエールスに取り凡ろ三週の后ダブリンに着せり、氏い此時始めてダブリン會場に人の充てるを見たり、四月十九日より此國の各地巡回を始めニユーリーに到て其會友の百人より三十二人に減少したるを見、カリックフエルゴスふ於てハ優柔好奇の聽衆十時前に起き能いざるを以て止を得ず朝の說敎を延ばせり、ウエスレーに隨從してロングフオルド、アスローン、ホリマウント、ニユーポルト、ガルウエイ(此處の會友は皆若き婦人なりき)、リメリック、コルク、ユーガル、キンセール、バンドン、ウオートルフオルド、キルケンニー、ビル、ボルターリングトンの各所を巡いり以て詳細なる記事をなすい限りある紙數の許さゞる所ある

組會を忘る會友を除名す

愛國ふ向ふ

ウエスレーが說敎の現象

り、ウエスレー記して曰く「憐れむべき死せるボルターリングトン平其死せるい怪むに足らず蓋其傳道者等は僅かに二三十人の聽衆ある一室に蟄居し

「其死せるは怪むふ足らざ」

て滿足し居ればなり、予ハ直ニ市場ニ往き高聲に「聽け、種播く者播きに出でしゞ」と呼はりしが神は其聖語をして大ゐ力あらしめ其利きと兩刃の劍の如くならしめ給へり」と、氏ハ七月二十六日ダブリンに歸り數日の后英國ニ向て出帆せり

リーヅ年會

八月十日ウエスレーリーヅニ於て年會を開きしが我儕ハ氏が「神の終始我儕と偕に居給ひしハ我儕が大に感謝する所なり」と云ひし一事の外其議せし事項ニ就ては毫も知る處なし、氏は八月十九日ロンドンに歸り四日の后コルンウオールニ向て出發せり、其エキセトルに於て說敎を始めし時れ聽衆ハ只二人の婦人と一人の男子のみなりしが「是れ屋外說敎を怠りしが故なり」と云ひ出でゝソヾルンヘイの青草上夥多の人民に說敎せり、ツルロ

教師某氏とウエスレー

ゐ於ては互市の日ありしを以て多少混亂妨害のあらんことを預期せしも少も然ることなく全く靜肅ありき、氏曰く「コルンウオールに於ては最早迫害擾亂共ニ止みたるが如し」と、此處に當時市長を務めたる敎師某氏あり數年前の事某氏人民を煽動して或るメソヂスト傳道者を遊蕩人なりとして捕へしめたるニ豈斗らん其人ハオックスフオルド大學に於ける舊友ウヨン、ウエスレーにあてゐらんとハ、某氏一驚を喫したれども尙威嚴を張り嚴肅なる語を以てウエスレーの不法の所爲を審判し始めたり時に俄然傍聽人の充溢せる床落ち夫の審判官は椅子より轉倒し號叫の聲ハ四方に起り一時非常の混雜を極めしゞ漸く其大混雜も靜まり法官其席ゐ復せし時ウエスレーは例の沈着なる語を以て冷然「若何、我儕は尙此事ゐ就て問答すべきや」と問ひしに夫の審判官は「否々ウエスレー君今より去らるへし、一日の苦勞は一日にて足れり」と答へ其后敢て妨害をなさゞりしと云ふ、ウエスレーは一ケ月間コルンウオールの諸會を訪ひ而して當郡二循回長吏の四季會を開けり、氏は途上「アベルの死」なる書を讀み十一月六日ロンドンに歸着し此年の終り迄其地方に留まれり

此年に於けるチヤールス及びホイツトフヒールド

一千七百六十三年　六十歲

年一年よりメソヂスト布敎の大事業ハウエスレーの一身に纏繞し來れり蓋チヤールスは不健康及び家族增加の爲に殆んど全く其身を聖歌の著

作及びロンドン、ブリストル間の傳道に限りホ井ツトフヒールドの喘息い常患となりて殆んど勞働に堪へざらしめたり、ホ井ツトフヒールドは此年の始め六ヶ月間を專ら英國の北部及び蘇格蘭に(其間六週間い全く事の記すべきなく爾餘の時日中に於ても屢々傳道を妨げられ而して如何なる場合に於ても一日一回以上の說敎をなしたるをなし)三ヶ月を亞米利加への航海に費し九月の始頃米國に着せり、氏い自ら「疲れ且つ衰耗せり」と云ひ米國に於ては一週中二三回より以上の說敎を爲すを得ざりき、然るに唯ウエスレーのみは全く不羈自由にして何物の爲にも支障せらるゝことなかりき氏には敎會おく自宅おく、氏を不幸ならしむる妻ありしも、子女の養育すべき者おく加之身体の强壯なると心情の暖かなるとは毫も以前に異らず氏ゐ往時の敎友等は或い死し或い役務に堪へざるに至り又或い他の事故によりて止を得ず巡回傳道者たるをを止むるゐ至りしも獨り氏のみは終始一轍毫も變動することなかりき實に氏は一千七百三十五年より一千七百九十一年に至る五十五年の間飄然として住家なく少時も定住牧師の生活

ウエスレー唯り超然たり

稀有の慶寒

ウエスレー窮民を救濟す

をなさゞりき

ウエスレーは暫時ノルウ井ツチとブリストルに赴きたるの外始めの四ヶ月間を全くロンドンと其近傍の各所に費せり、此年は始めは寒氣殊に甚だしくして歷史上稀に見る所の酷寒なりき馬車いテームス河の氷上を軋て河を横行し且氷の上には小舍を構へて市場を作り航海は全く止み業を氷上に營む數千の人民は甚だしき困難に陷り(所々に於て氷の厚さ六英尺なりしと云ふ)鴎はロンドン橋まで上り來り其他の諸鳥も通常の居所を離れてロンドン市街に群集するに至れり、又人民は凍死するものあり飢餓に迫るものありて此大都に食を乞ふもの其幾許なるを知らず、ウエスレーいこれを見て之を救いもして止み得るの人に非ざるが「ロイドス、イヴニング、ポスト」は報じて「夥多の貧民ファウンドリに於て豆汁及び大麥の羹を施與せられしゐ是蓋しウエスレー氏の慈惠に出る所にして氏い尙彼所に於て窮民救助の爲に義捐金を募り百パウンドを得たりと」云へり、當時の金價を思料せゞ此義捐の金額い夫の貧しきファウンドリメソヂスト敎徒ゐ

取て決して少々に非らざりしなり

五月十六日即ち例年に後るゝこと二ケ月にしてウエスレーロンドンを去て北方に向ひしが驛車に乘りて旅したるを以て僅々三日にしてニユーキヤスツルに達し夫より尙三日にしてエデンボローに着せり氏は其所より舊友ホヰツトフヒールドに遇ひ而して左の如く記せり「人間より云へば氏い既に衰耗し果てたり然れども我儕い宇宙に於て諸ての能力を有する神と偕に働くべき者なり」一年の後氏いエデンボローゐ於てマクスウエル夫人と相識るゝ至りしが該貴夫人い一千七百六十一年の頃十九歳にして寡婦となり今はメソヂスト信徒となりて一千七百七十年に至り貧兒の爲に基督教主義の教育を施さんと欲して一の學校を設立し四十年の間自ら之を擔任せり、其死そるゝ臨み夫人い之を永久に維持せんが爲ゝ其維持法を設けたり、ウエスレーは途中アルンウヰツク及びモルペスに於て說教し六月一日ニユーキヤスツルに歸り數日の後バルナルドキヤスツル(此所ゝは近頃著るしきリヴアイヴアル起り居たり)に赴けり、六月十三日エプウオルスゐ來り說教せしが一人の紳士躰の者一群の兒童及び一人の醉漢を雇ひ來りて其說教を妨げんと力めたり即ち其兒童等い大聲亂呼し狂醉したる夫の惡漢い舌の動くに任せ賤陋不潔聞くに堪へざるの言語を放ち而して惡漢の雇主なる紳士は力を極めて佛國の角を亂吹せり然れども聽衆い皆靜にしてよくウエスレーの說教ゝ耳を傾けたり、氏はエプウオルスよりドンキヤストル、リーヅ、デユースベリー、及びマンチエストルに進み而して其マンチエストル滯在中始てストツクポルトに近きポルトウード、ホールのマシユー、メイオルを訪へり彼い當時二十三歳の青年にしてメソヂスト信徒たると既ゐ四年ゐるも全く平和を得しい僅ゐ數月前ゐあり、彼はジヨン、モリスと共に每週の祈禱會をデヴイホルム、デユキンフヒールド、リンの下ゐるアシトン及び其他の各所ゝ於て開きしが夫れウエスレーの傳記著者ジヨン、ホワイトヘツドは是等祈禱會の際改悔せし人なり、メイオルいウエスレーの勸めに從ひ氏と共にボルミングハムゝ赴きしが彼が向後五十年間の熱心ゐして成功ある傳道の行路を始めたるは實ゝ此時にありしゐ

北部巡回

マクスウエル夫人

マシユー、メイオル

り彼ハ通常稱ふる所の巡回傳道者となりしとあしと雖も其巡回傳道した
る里數は數万英里に及べりチエシール、スタフオルドシール、デルビシール
ランカシールの南方ヨルクシールの西方の都邑大村中彼か傳道に由て改
悔し神れ力の活ける証據人さる許多の人民のあらざる所甚だ少なし此マ
シユー、メイオルハメソヂスト教派中最も著るしき定住傳道者の一人にし
て彼が一千八百十四年に於て死せし時はジョン、ベンソン彼が葬式の説教
を爲さんが爲め嚴冬中ロンドンよりランカシールに急行せり

ウエスレーは六月二十日ストックポルトを去り四日の後ロンドンに着
し而して年會後迄此地に止まり八月十五日ハウオル、ハリスと共にウエー
ルスに向て出發し四日の後トレヴェッカに着し而して左の如く記せり「風
光の美なるとハウオル、ハリスの家の如きはウエールス中予が稀に見る所
にして其少さき講堂より其周圍の諸物に至る迄皆超逸の趣味を帶びざる
ハあく園圃、果園、魚池、周圍の小丘等實に一小樂園をなせり、氏は凡て是等の
物に就て神に感謝し是等の物ゐ由て神の德を頌讃せり、當時其家族(恐らく

ウエールスに於けるウエスレー

は彼の會友を指す者ならん)ハ凡そ百二十人なるが皆勤勉にして絶へゑ各
自の業務に執掌し而して神を畏れ義を行へり」、又曰く「八月二十二日—我傳
朝四時に馬に乘り世界中比類少なき美國を通過せり、予敢て言ふ、斯る田園
草野、森林、河流、及び絶頂に到る迄樹木青々たる絶美の諸山等一線ゐ延ひて
五十英里ゐ亘るの絶景ハ之を英倫全國に求むるも他ゐ得る能ざるなり」と

ウエスレーウエールス巡回を終るに當り記して左の如く云へり「予は益々
左の一事を確認せり即ち説教に由て警醒したる者を連合し神の道を以て
之を教育することなくして單ゐ使徒の如く説教することは是只敵の爲に子を
生むとなり、此二十年間にペンブロークシールの全地に説教したると幾許
ぞ然るに其地には一の會なく規律なく又秩序結合等あるとなし而して其
結果として一たび醒めたるもの〻十分の九ゑ前の睡ゐ勝る惰睡中にあり」、
是等は實に考ふべき語にして現今メソヂスト毎週の組會ゐ關する條規の
改正を主張する輩の宜しく一考すべきものたりウエスレーは己が經驗に依
て是等の言を吐けり經驗を缺ぐ今日の論者は其論鋒を進むる前ゐ少しく

不組織的の働きの無効

屋外說教と下層の人民

富の危險

熟考して可あり○八月の終に至りウエスレーブリストルに來り其地方に一箇月間留まりて屢々屋外說教をなし而して下層の人民に達するには此方法に由らざるべからざることを言へり氏はブリストルメソヂスト信徒が世及世の物を愛せざる樣注意し而して今日メソヂスト信徒れ警戒となるべき語を以て左の如く記せり「彼等は勤勉なし且つ節儉なれば其財産の大ゝ增加する素より其所にしてロンドン、ブリストル及び其他商業の盛なる市邑ゝ於てゝ人々七倍二十倍或ゝ百倍の財産を得たり然れども是大に危險あるとにして彼等が此等世の物ゝ執着して亡びゝ至るゞ如きとなき爲には實に最强の警戒を要するなり」○十月一日ロンドンに歸り而して「我儕が家ゝ大修繕の爲ゝ大抵破壞されしが予が要せし分は殘れり予い晝夜共に方六英尺ゝて足るなり」と云へり、夫より三週間の旅行をノルウヰッチゝなして其會の會則を朗讀し而して「單に是等の規則を守らんと決心したる者のみ我會友さるを得べし」と述べたり、十月二十九日ロンドンゝ歸り此年を終る迄其處に止まり而して凡て其閑時をロンドン傳道者と共に氏及其兄弟の著述を檢閲することに用ゐ其中にて人々の異論を稱ふる諸点を熟考し論旨又は文章ゝ於て不當と認むるものを訂正せり

聖餐に關するウエスレーの困難

ジョン、ジョーンスの按手禮

爰に尙ウエスレーの歷史中此時期に屬する一二の記すべき事あり、メソヂスト敎派の增進は大ゝウエスレーを奬勵したると同時ゝ又大に氏をして困難を感せしめたり、氏が諸會殊に其盛大なる會は自然に各々自己の會ゝ於て聖餐を受けんとを望みしもウエスレーは其兄弟の外此式を行ふべき敎師を有せず而して已ゝ殆んど絕へず巡回をなすを以て到底ロンドンブリストル及び其他諸會の要求に應ずること能はずさりとて未だ按手禮を受けざる傳道者をして此式を行ゝしむるを得ず是れ氏が甚ゞ困難せし点ゝしてトーマス、マクスフヒールド愛爾蘭の一監督より按手禮を受くるに至り此困難の幾分は之を減ずることを得しも、マクスフヒールドは數年の間ロンドンゝ留まりウエスレー不在の時ゝ自ら諸禮文を讀み又聖餐を行へり)當時氏はウエスレーを離れたれば其困難一層甚だしきに至れり、氏が重要なる補助者の一人ジョン、ジョーンスゝ學識才能あり且つ敬虔なる人

として既に十七年間忠實に巡回傳道者の職を執り居たるが恰も好し當時希臘教會の監督エラズマスロンドンに來りしをばウエスレーに彼にジョーンスの按手禮を求むるに目下の情狀に於て至當なふんと思考せり是れ蓋しメッヂストの傳道者は決して英國教會の監督より按手禮を受くると得ざりしを以てなり然れども之をなすに先だつてウエスレーはエラズマスが實に監督なるや否やを確知するの必要あるを感じジョーンスに命じて此事に付き書を以てスミルナの大監督に問いしめたりウエスレーはエラズマスがクレテのアルカディアの監督なるとの答と士耳其に於て實際此監督に過ぎたりとの數人の紳士の証言とを得謂て曰く「彼は其監督たるとに於ては既に確乎たる証據を有せり」と斯くウエスレーは自ら充分なる滿足を得たれど乃ちエラズマスに請ふにジョーンスをして諸會に於て聖餐を行ふことを得せしめん爲に之を聖別せんことを以てせり是に於てエラズマスはジョーンスに按手禮を施せり事若し此に終りたりせば此他別に此事に關して記載するを要せざるべしと雖も事此に止まらず巡回傳道者の一人按手禮を受けたりとの報流布するや否や他の人々此温良なる監督に來て同樣の恩賜を願ふに至れり斯くジョン、ジョーンス、サムソン、スタニフォルス、トーマス、ブライアント及び其他の人々按手禮を受けしが其結果はチャールス、ウエスレー大に之に不服を唱へ暫時の后ジョーンスに其關係を絶たざる可らざるに至りサムソン、スタニフォルスも亦教師の職務を行ふことを止めざる可らざるに至れり而してトーマス、ブライアントに法衣を着したるの故を以てセフヒールドメッヂスト會に破裂を來たせり事の不幸此に止まらず一千七百七十一年に至りウエスレーの至酷なる反對者の一人オーゴストス、トップレディー「ジョン、ウエスレー氏に與ふる書」なる者を公刊して此事を再興せり彼卑劣ふるもエラズマスを異邦の乞食僧と呼び「今日に至る迄アムステルダムの希臘教會は彼を欺騙者なりと信せり」と云へり彼に進んでウエスレーに四の巧みなる問をなせり

チャールスの不服

トップレディーが「ジョン、ウエスレー氏に與ふる書」

「一、足下に足下の傳道者等に希臘教會の禮式に從て按手せん爲にエラズマスを得られしや　二、是等の傳道者に其按手禮の故により又足下自

らの承認の下に英國教會の教師として法衣を着し又其職務を行ふも非ずや、否、足下は屢々彼等が領したる按手禮は全く足下自らの按手禮と同等の者なりと宣言せしに非ずや　三、足下の傳道者等が諸會に於て教師の職務を行ふことを得んが爲に足下が恣のまゝに彼等に按手禮を施すの權を得んと欲し此希臘教會の監督と誤認されたる者に自己を監督の職に擧げんことを强請したるに非ずや而して彼の希臘教會の條規に從へば人を監督とおすには二人以上の監督其式に臨まざる可らざるの故を以て足下を監督となすことを否みたるに非ずや　四、凡て是等の事に於て足下は足下が反復爲せし教會主權の誓即ち「我は外國の王公、平民、高價、大臣又の君主は此領内に於て毫も宗教上即ち靈魂上の事に關する支配權、權力、主權、高位、又の權威を有せず又有すべからざる者なることを公言す」と云ふが如き誓を破りしに非ずや」

是等の詰問中には幾許の眞實ある乎實にウエスレーには聖餐を行ふべき按手禮を受けたる傳道者の欠乏よりして起る處の大なる困難ありたるや明かなり而して氏の既に久くロールド、キングの說即ち新約の教に從へば凡ての長老は實に監督なりとの說を保持し已は既に長老なれば亦監督たり故に世上凡ての監督と同く充分に他人に按手禮を施すの權ありと信せしも或正當なる理由により當時其權を實行することを欲せざりしなり既に斯の如き事情あるを以て假令氏がエラズマスを之(氏を監督とおすこと)を請ひしとするも敢て怪むべきにあらざるなり、此事はトップレディーの疑問に多少力を添ゆと雖も我儕は他の一方に於てウエスレー自らの確言即ちエラズマスはウエスレーが請を一も拒まざりしとなしとの明白なる斷言を有す若し果してウエスレーが言の如くならばエラズマスは實際氏を監督となせしか(是れ何人も取らざる處の假定なり)否らざればトップレディーが巧みなる不實の誣言なるか二者共一に居らざる可らず、トーマス、オリーヴルスはウエスレーの許諾を得て(或はウエスレーに依頼に出でしやも知る可らず)トップレディーに攻擊に答へウエスレーはエラズマスに請ふてジョン、ジョーンスに按手禮を施さしめ而してジョン、ジョーンスは英國教會

ウエスレー長老と監督の同位說を保持す

トップレディーの言に反するウエスレーの確言

オリーヴルストップレディーに答ふ

の教師の如く法衣を着しメソヂスト諸會ゑ於てウエスレーを助けて主の晩餐を行ひたりと雖もウエスレーがエラズマスに自らを監督の高職に擧げんことを請ひたりとの誣言に對してハオリーヴルスハウエスレーより斷然一歩も假す所なき拒絶をおすべき權を受けたることを云ひ且つ語を繼で「併し今ウエスレー氏其請をなせりと假定せよ、其責は何過ゑあるや、ウエスレー氏ハ福音を宣べ傳ふべき內部の召を蒙りたる証據充分なる幾多の人を有し而して氏も其等の人々も其內部の召に加へて外部れ召を得んことを望むおるゑ英國の監督は一人も之を與ふる者なし斯る場合に當てウエスレー氏が或無罪おる方法に由て此不幸を治せんことを勉めしとするも何の怪しむべきことあらんや」と云へり、是れオリーヴルスお一千七百七十一年即ち此事の起りしより僅かお六七年の后に書き去者なるが我儕は何れを最も眞實に近しとそべきかトッブレディーの如き害惡なる反對者の巧言なるか將たウエスレー自らの確言及び其友オリーヴルスお彼より受けたる權を以て述べたる公言なるか我儕は之を以て此事の眞僞を判定せざる可らす、事寔に煩はしと雖ども亦大に肝要の事さり、蓋メソヂスト敎派の生長ハウエスレーが最も大なる困難の一にして當時お至り氏はメソヂスト敎徒を全く英國敎會より分離せしむるか又ハ氏自ら其傳道者等の爲に監督の按手禮を受るゑ或ハ又一千七百六十四年に於て爲さんと試みたる方法を取らざる可らざるの必要に迫まきり

此年ゑ於けるチャールス及びホイットフセールド

一千七百六十四年　六十一歳

チャールス、ウエスレーは尙弱体を以て此年をロンドン及びブリストルに於て費せしが如し、ホイットフセールドは今尙亞米利加に在りしが身体大に衰弱し一週中只凡そ三回の說敎を爲し得るのみなりき、ウエスレーは一月中ホロンドンと其近傍に於て說敎せし外ドルキング、ハイワイコム、オックスフオルド及びウイットニーを巡回せり氏はウイットニーより三英里以內の地即ちサウス、レイに於ては一千七百二十五年ゑ初度の說敎をなせしもウイットニーに於てハ此巡回の時始めて之をなせり氏記して曰く「予ハ未だ嘗て斯る人民を見しとなし其業務に勤勉なると質お驚くに堪へ

ボルトンの宅に於けるウエスレー

たり殊に其心靈甚だ安舒にして其行爲亦甚だ温和鄭重なり」と、ウヰットニーに近きブランドフォルド、パークにボルトン氏其姉妹(未婚)と住せしが其家は多年の間ウエスレーが大に好愛せし退隱所にしてボルトン嬢は氏の愛寵せし通信者なり一人、ボルトン氏は氏が最良の定住傳道者の一人にてありき、一日是等二人のウエスレーが愛友等は自宅の客室に寛坐しウエスレーは常例の如く讀書執筆に余念なかりしが右の二友ウエスレーを誘ふて談話せしめんと欲し先づ都會に住むは田舍に住むの甚だ勝れるに若かざるとを云ひ尙語を繼で「全く閑靜にして俗界を離れ而して毫も繁忙なる群衆肩摩の喧聲を聞くことなし」と云ひしがウエスレー例の機敏を以て直に「實に」テディー、併し喧騷なる雜念我儕を攪擾するとあるべし」と答へしかば此一言に」テディー默然として復辭なかりしと云ふ

二月二日ウエスレーは夫の修繕增築の爲めに數週間閉ぢわりしロンドンの舊ファウンドリを開き而して「今は只に堅固安穩なるのみならず清潔合宜にして且つ數百人を增入するを得べし」と云へり、三月十二日に於て向

ふ五ヶ月に亘る北部旅行を始め而してストラウドに到り左の如く記せり「我儕は幾年の間此處に於て空を擊ち居たりし乎、凡て我儕が建つる所は一人の害惡なる者惡く之を引き倒はせり、然れども彼が去りし以來神の語益々其根の深ふし只に會友を增加せしのみならず又大に會を强くせり」、ボルミングヘムに於て氏は夔に遊冶郎れ會場なりし講義所に於て說敎せしが記して「若し王國中凡ての遊場變じて斯る善良なる用に供せらるゝに至らば甚だ愉快なるべし、說敎后暴民等來集し家を出づる人々に向て土石を投せり」と云へり、氏は又グリムスビーに就て左の如く記せり「一たびは全く死し居たりしグリムスビーは當時に至り國中最も活氣ある所となれり此所の會友及び聽衆は何れも速かに增加し會場にて回廊を增付せしも尙甚だ狹隘なるを感せり這回の說敎には市長及び邑中の紳士等皆出席し主も亦大なる權能を以て此に臨み給ひ聽衆中或者は倒れて死せるが如くなり(彼は暫時の後言ひ難き喜びを得たり)又一人の婦人は激烈なる拘攣の爲めに場中より携へ去らるゝに至れり予は散會後往て其婦人を見しが全身烈

じく拘攣し恐るべき情態ゐて激動せしめ、實に汚れたる鬼之を傾跌せしゐり、然れども惡鬼ハ長く婦人を支配するを得ず翌朝ゐ至り婦人は鎮肉共に癒され而して深く神の公義と其愛憐とを承認せり」、之れ實に奇異なる記事なるが暫く記して讀者思料の資に供す

蘇國ゐ赴く

ウエスレーはニユーキヤスツル及び其近傍に留ること三週間ゐして蘇格蘭ゐ向ひ途中モルペス、アルンウヰツク及びボルウヰツクに於て說敎し而して北ブリテンゐ於て殆んど一ヶ月を費やしエデンボローゐ於ては大會の會議ゐ出席せり而して氏ゐカルトン、ヒルゐ於て說敎せし時は許多の敎師等出でゝ之を聽けり又氏は少しく躊躇せしも遂にウエスト、コルクに於ける主の晩餐式に列せり、ニユーキヤスツルに歸て後六月二十一日ホワイトヘーヴンに向て出發し而して其所の會に就て左の如く記せり「絕へず此會を害したる者は罪障あり、予は當時全會大に擾亂せるを見しゐ其原因は一婦人其隣人と爭ひたると及び或者價二ペンニーの麵包を盜みたるとありき又屋外說敎の缺乏は此會枯死の一因ありしを明らかあり予は屋外說敎

屋外說敎の所要

途中の困難

おくして能く神の事業の增進せしを見ず若し全く之を廢するゐ至らバ其事業の漸次消滅し去るゐ至るや期して待つべきあり」、六月二十五日ケンダルに來り次日四回の說敎をなし而して馬上五十英里を旅せしも更に甚しき疲勞を覺へず終りの十日間ハ毎日三回の說敎をなせしが其中屋外ゐ於てなしたるとも少なからざりき、氏ハシユルースベリーよりウエールスを經てブリストルゐ赴きしゐ其第一日の旅行ゐ於て一人の同行者と共に午前四時より午后八時迄馬上にあり途に全く途を失し漸く或人の指敎を得て其方向に進みしも其途は沼を以て終り又進むべからざるに至れり時に人あり馬上彼等を導て丘陵を馳せ遂ゐ一坦路に出でしが彼之を指てロースフエールに通ずるの路なりと云ひしかバウエスレー等其路を進行し一人に遭て之を問ひしゐ其人答て「否是はアベリストウイズゐ到るの路なり卿等若しロースフエールに往かんと欲せゞ後に返りて向ふの橋迄下らざる可らず」と云へり依て彼等其橋ゐ下り橋邊の一小店に尋ぬ其指敎ゐ從て次の村ゐ到り之を尋ねしに又全く過ちたるを發見せり彼等は山中の巨岩、絕

壁、及び沼澤の間を彷徨するを凡そ一時間にして再び前の小店に來りしが時既に十時を過ぎ而して說教旅行等をおすを既に十八時間なるも尙休息するを得ざりき是れ其店には酩酊したる坑夫等充滿して甚だ喧噪なりしのみならず臥牀只一個ありしのみにて又馬に與ふべき食料等一もなかりしが故なり彼等遂に一人の酩酊したる坑夫を雇ひロースフェールに到るの嚮導とおせしが其坑夫途中にて過まつて河に落ち爲に少しく其醉を醒なせり、彼等は十一時より十二時の間に遂に其望む所に達せしが此所に於ても馬に與ふべき食物を得ると能はざりき、不幸に不幸重なりて、ウエスレー等お寢に就きし後此客舍の馬丁と夫の坑夫ウエスレー等が疲れ果てたる馬を引出して之に乘りしが翌朝に至り之を見るにウエスレーの馬は深さ二インチ（一インチは我八分强）の傷ありて出血し（叉竿を以て打ちさる者なるべし）其友の馬は數ケ所の傷を負ひ居たり

ウエスレーは八月四日難おくブリストルに着し年會を終りたる後（八月十一日）ロンドンに歸り同十八日始めてスノーフヒールドの新講義所に於て說敎し而して二十日ホキヤントルベリーに赴きて其新講義所を開けり

ノルウヰッチ會の浮沈

九月三日再びブリストルに赴き其近傍に或は組會を開き或は說敎をなして一ケ月を費やし十月六日（土曜日）ロンドンに歸り次日三回の說敎をおし主の晩餐を行ひ夜半に近き頃馬車に乘りノルウヰッチに赴けり氏は此ノルウヰッチ會を以て英國諸會中最も變動し易き會なりと云へり一千七百五十九年に於てはノルウヰッチのメソヂスト信徒七百六十人ありしお二年の中に四百十二人に減じ又一年の后六百三十人となり其后二年即ち當時に其數僅かに百七十四人に過ぎざりき、ウエスレーロンドンに歸り長吏を招集し而してロンドン諸講義所の負債凡そ九百パウンドを償却するの策を議せしお六日の中に各人の喜捨に由て殆んど全額の三分の二を得さり氏曰く「一人を除くの外各皆大に喜んで之を爲せり只一人の紳士十シリングを出すに恰も十滴の血を出すが如くにして之を出せり」と、ウエスレー又每朝ロンドン傳道者を會し自著の博物學提要（コンペンディウム、オウ、ナチユラル、フヒロソフヒー）を讀めり、氏は零碎の閑時を以て書を書き叉ケント、ソスセックス、エセックス等の諸會を訪

はんの爲に短き旅行をなし以て此年を終れり

ウエスレー勞働の量

ウエスレー勞働の量は殆んど信ず可らざる程にして氏が説教、旅行、諸會の訪問著書、出版等は尋常人五六人を以て漸く爲し得べき事業なりしなり、只に是等の事のみならず氏は亦通信をなし種々の事に關して各種の人々の議士評定者たりしをも看過す可らざるなり、ウエスレーは大ふ書籍の力を信ぜし人として氏が出版物の販賣に盡力するを以て巡回傳道者の一務となせし程なりトーマス、ランキンに送りたる左の書翰は以て其一班を知るに足るべし

大ふ書籍の力を信ず

ランキンに寄せたる書翰

「拜啓小生が時に甚だ怪み候事は凡て我傳道者が實益ある我雜書を各會に散らすことは實に言ふ可らざる益を來す者なることを認識せざることに御坐候、ビリー、ペンニングトンはコルンウオールに於て前七年間に賣りしより多の雜書を一年間に販賣致候足下も之と同じ方法を御用ひなされば斯る結果あるべきを信じ申候即ち始めゐ巡回する時は一種類の書籍を携帶し次の時は他の種類の者其次は又他の種類と順次異種類の書籍を携帶し而して各所に於て之に付き説教をなし説教の後會衆に向て雜書を購讀すべきことを勸むることに御坐候願くは平安足下の靈と共にあらんことを敬白

一千七百六十四年九月二十一日　ジョン、ウエスレー」

ブリストルに於て

一千七百六十五年　六十二歳

ウエスレーは、ハイ、ワイコム及びウヰットニーの巡回を以て此年の業務を始めたり、ハイ、ワイコムはハンナ、ボールの住所にして嬢は當時年二十二熱心に救を求め居れり、此地は多年メソヂスト傳道者の巡回したる所にして始めて傳道せしはトーマス、ハムフレーなりとす彼は此所に於て或時瓦石雨飛の間に大膽にトーマス、ワルシの傍に立ちしことあり、ボール嬢は當時主要なる會友の一人にして一千七百六十九年に至りメソヂスト安息日學校を開けり(此安息日學校はレイキスがグローセストルに於て開きたる者に先だつこと十四年あり)嬢はウエスレーが最愛の通信者の一人にして一千七百

ハンナ、ボール